第43回

日米学生会議

和文報告書

出会いと模索

—地球意識の形成に向けて—

1991　7.23～8.19

財団法人　国際教育振興会

第43回日米学生会議和文報告書作成委員会編

「第43回　日米学生会議和文報告書刊行にあたって」

日米学生会議は1934年に太平洋戦争の危機を感じた学生たちが、自らの手で両国関係を変えようと立ち上がったことによって創設されました。残念ながら彼らの手で戦争を止めることはできませんでしたが、戦後日米関係の再出発と再生期において彼らは大きな役割を果たしたといえましょう。そこに創生期の日米学生会議の役割はあったのです。

それから58年の月日が流れた今日、社会は巨大化・複雑化してきました。個人の活動領域が格段に増したにもかかわらず、一人一人の占める位置は小さくなっていくかに感じられ、個々人の力への無力感と失望感が蔓延しているかにも思われます。私たち個人にいったい何ができるのか。まして学生に。日米関係や国際関係を考えるにあたってもこうした感情が生まれてしまいがちですし、私たち第43回日米学生会議実行委員が前回の会議で選出されて、これからどの様な会議をつくろうか話し合っていたとき、私達の頭を意識的に、無意識的にとりついていたことでありました。それだけではありません。日米間を個人が行き交う今日、そして日米・世界の平和の中で育った私達にとって日米学生会議の役割は何であるかという問題にも直面しておりました。日米学生会議の今日的意義を再び見出す必要があったのです。

そうした中で私たちは、第42回のテーマ「地球時代の夜明けに―新たなる自己の存在と可能性への模索」を踏まえ、さらに具体化させ「出会いと模索―地球意識の形成に向けて」を総合テーマに掲げることで、次代を担う学生が地球人としての意識を身につける場所として今回の会議を位置づけようとしました。

実行委員はこの仮説が真であることを証明するために、米国側実行委員とともに全力をつくして準備してまいりました。会議のトピックを選び、講師を依頼したり、宿泊施設の予約や交通機関のセットアップ、地元の方々のご協力依頼や寄付の依頼など、また会議の一般参加者を募るために全国を奔走いたしました。いろいろな方々とお会いし、いろいろなお話しをおうかがいし、励ましていただきました。人々の暖かいお心に涙すると同時に、何かが動きはじめ、自分たちの力で、という感触が得られる様になりました。５月からは新たに公募された参加者も加わり準備を進め７月の本会議を迎えたのです。枠組はそろっていました。あとは参加者一人一人の力が内容を決める。準備過程で得た自信と学生会議の今日的意義を果たし得るかどうかという不安が渾然一体となっていました。

本会議は米国側参加者40名の来日とともに始まりました。日本が初めてという米国人も、米国人との生活が初めてという日本人も大勢おりました。当初は意識や生活慣習、言葉の壁に両者がとまどい苦悩しました。日米対立の構図さえ随所にみられました。

しかし一ケ月という期間を通じて日一日と参加者はそれを克服していったのです。異質性と同質性を個人として認識し、他を受け入れる寛大さを身につけてきました。そして８月19日札幌で別れを惜しむ両国人の姿を見ることができたのです。論理の枠組みではとらえられない友情という確固たるものが、個々の参加者の成長の上に生まれたのです。これがまさに地球意識であったと思うのです。個々の参加者が自覚したか否かは分かりませんが、心の奥深くに芽生えたことは私にも分かりました。おそらく、参加者の一人一人が自分のものとして自覚し獲得するために葛藤することと思いますが、私たちには自信があります。日米学生会議が個々の参加者に地球意識を芽生えさせたことで将来の日米両国ひいては世界のために個々の参加者が大きな貢献をするだろうということに。戦前の会議の先人たちもやはり同じことを学生会議の意義と考えたのであろうと、私たちも初めて自信をもっていえる様になったのです。私たちの第43回の会議から第44回の会議が生まれました。一回一回の努力の積み

重ねも日米学生会議の意義であり、成果は必ず将来に生じるといえます。

この和文報告書は、第43回会議の記録であり、日米80名の参加者一人一人の一夏の怒涛の様な体験を綴ったものであります。もしかするとメディアで言い古されたこともあるかもしれません。しかし、それらは、美文ではありませんが、私たち一人一人の自分自身の言葉であり、事実と体験に裏付けられた力強さを持つものです。

この報告書は、私たちの会議にご協力下さった方々に感謝の気持ちを込めて、そしてこれから日米学生会議に参加される方、日々国際交流の活動に努力されている方々へ贈るものであります。

第43回日米学生会議日本側実行委員長　　大　塚　雄　三

目　　次

第43回　日米学生会議和文報告書刊行にあたって … 大塚雄三 …… (1)

目　　次 …… (3)
第43回ＪＡＳＣの代表諸君へ …… 板橋並治 …… (5)

第１部　総　括
Ⅰ．日米学生会議の沿革 …… 3
Ⅱ．概　　略 …… 4
Ⅲ．日　　程 …… 13
Ⅳ．第43回日米学生会議参加者 …… 14
第２部　本　会　儀
Ⅰ－１　東京（７月23日～８月２日）
東京・開催趣旨 …… 奥井暁子 …… 17
アメリカ側参加者到着 …… 西海奏子 …… 17
開会式 …… 武藤　康 …… 18
ミキサー(MIXER),自己紹介 …… 長尾あや …… 19
ジョイント・オリエンテーション …… 西山裕子 …… 19
（日米合同親睦会）
アメリカ大使館 …… 市来　圭 …… 20
Ⅰ－２　長瀞（８月２日～３日）
ＲＥＳＴ　ＳＴＡＹ …… 鳥越あすか …… 21
Ⅰ－３　新潟（８月３日～９日）
新潟・開催趣旨 …… 深町あおい …… 22
中間反省会 …… 猪刈由紀 …… 23
分科会交流会 …… 佐野日出之 …… 24
黒川村歓迎パティー …… 高橋幸世 …… 24
全体研修 …… 宍戸由紀子 …… 25
新潟市滞在 …… 深町あおい …… 26
フェリー …… 松本正道 …… 27
Ⅰ－４　北海道（８月10日～19日）
北海道・開催趣旨 …… 七戸美弥 …… 28
ホームステイ …… 大橋映子 …… 29
交流会 …… 後藤忠寛 …… 30
北海道レセプション …… 七戸美弥 …… 31
清水町訪問 …… 鈴木美紀 …… 32
反省会 …… 河崎秀陽 …… 33
新実行委員会議 …… 遠藤　繁 …… 34
閉会式 …… 五所恵実子 …… 35
別れ …… 野田雄輔 …… 36
Ⅱ　分科会
企業と発展途上社会 …… 大島葉子 …… 37

我々と変容する社会 …… 上窪一世 …… 40
文化と宗教 …… 天野環 …… 43
現代社会と法制度 …… 江藤一 …… 47
科学技術と社会 …… 奥井暁子 …… 50
歴史と社会制度 …… 岸本肇 …… 54
社会の圧力と個人 …… 小林隆司 …… 57
見えない隣人と私達 …… 七戸美弥 …… 61
スポーツと社会 …… 深町あおい …… 64
マスメディアと国際関係 …… 大塚雄三 …… 67

III シンポジウム／フォーラム／コロキアム
貿易シンポジウム・総括 …… 江藤一 …… 72
貿易シンポジウム …… 遠藤繁／山下真 …… 75
安全保障フォーラム・総括 …… 岸本肇 …… 77
安全保障フォーラム …… 水野直子 …… 79
ポスト・安全保障フォーラム …… 白石史朗 …… 81
民族問題フォーラム・総括 …… 天野環 …… 81
民族問題フォーラム …… 野村研二 …… 84
プレ民族問題フォーラム …… 長野宇能 …… 85
ジェンダーコロキアム・総括 …… 大島葉子 …… 86
ジェンダーコロキアム …… 森村王英 …… 88
コミュニケーションコロキアム・総括 …… 小林隆司 …… 89
コミュニケーションコロキアム …… 渡辺文枝 …… 90

第3部 その他の活動
I 準備活動(1)
総括 …… 大塚雄三 …… 92
財務・経理 …… 天野環 …… 92
プログラミング …… 深町あおい …… 93
広報・選考 …… 江藤一 …… 93
関西 …… 小林隆司 …… 94
II 準備活動(2)
全体合宿 …… 松井恵一 …… 94
定例会（関東） …… 比企野慶子 …… 95
定例会（関西） …… 大前拓也 …… 96
直前合宿 …… 作佳代子 …… 97
講演会（2月） …… 七戸美弥 …… 97
講演会（6月） …… 比企野慶子 …… 98
講演会（関西） …… 森村王英 …… 99
III 会議後の活動
報告会 …… 岸本肇 …… 99

主催、後援、賛助団体 …… 101
第44回日米学生会議のお知らせ …… 103

第43回ＪＡＳＣの代表諸君へ

板橋並治

第43回日米学生会議の開会に当り、会議の日本側主催団体である国際教育振興会を代表し、また第一回会議の創立に参加した委員の一人として、会議の代表諸君、特に海の彼方から参加した諸君に心から歓迎の意を表明する。

毎年の会議で、開会の辞を述べる機会を与えられていることは、私にとり誠に大きな光栄であるが、新しい代表諸君の前に立つと、第一回ＪＡＳＣが実現されたいきさつと、その後の略史について話さなければならぬという考えになる。

何故なら、この会議が我々学生の創意と不屈の努力によって実現され、その後二度も中断されたにも拘らず、1964年に復活されて以来、「学生の学生による、学生のための会議」という伝統を失わず今日まで続けられているという事実を知ってもらうことによって、代表諸君が大きな誇りをもって、この会議の成功に全力を尽くしてくれるようにという願いからである。

会議という構想が生まれたのは1933年の春である。新学期が始まって間もなく、東京の諸大学のＥＳＳ会員の有志で、青山学院の中山公威の提案で会合を持ったのが発端である。当時の学生は、集まると就職のことなどよりも、天下国家を論ずる傾向が強かったが、我々も御多分に洩れず、国際問題特に日米関係について論議した。

1931年の満州事変（日本軍の満州派遣）以

来、米国の対日感情が悪化しつつあったにも拘らず、我が政府はそれを緩和する為に何ら有効な手を打っていないと感じていた我々は、「学生として何かなすべきことがないだろうか」「学生の力で何が出来るだろうか」という点について論議を続けた。

「世界の平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米間の友好関係にかかっている」と信じていた我々に出来ることは、米国の大学生50名を招いて会議を開き、互いに率直な意見を交換することによって、相互理解を促進すべきであるという結論に達した。

会議を実現する為に第一になさねばならぬことは、米国の学生50名の滞日費を捻出することにあったので、大企業の幹部の方々を訪れてお願いしたところ、「それは素晴らしい計画だが」といずこも「だが」で終ってしまった。

本当に素晴らしいと思うなら、なぜ資金援助をしてくれぬのだろうかと、色々模索した結果、「当時のきびしい日米関係下にあって学生の分際で50名もの米国学生を招くなどということは、到底不可能である」と考えたにちがいないという結論を得た。

そこで我々は、学生の力を示すには是が非でも50名の学生を獲得する手を打たねばならぬと考え、対米学生親善使節団を派遣して出来るだけ多くの大学を訪れさせ、代表を募集するという計画を立て、1934年の春、4名の学生からなる使節団がシアトル向けの氷川丸で横浜を出港することになった。

埠頭には各大学のＥＳＳ部員が集まり、盛大な見送りをしてくれたので、我々4名は興奮してボーッとなっていたが、富士山が見えなくなると急にさびしくなり、「50名の学生を連れ帰らなかったら、腹切りものだ」と語り合った程である。

しかし最初に訪れたシアトルのワシントン大学で会議の計画を発表したところ、予想もできなかった程の大きな反響があり、驚いた。この調子なら50名の代表を得ることは確実であるという自信を得た結果、中山委員長と遠藤委員が自信を持って募金運動を再開するため帰国し、田端委員と私が米国に残り、同君は太平洋岸の大学、私は中西部大西洋岸の大学を各々20数校ずつ訪問し、代表募集運動を続けることになった。

その結果、二人で99名の米側参加者を伴って帰国したが、その内の20数名は大学教授とその夫人であったので、滞日費用を自己負担するオブザーバーとして参加してもらった。

このように、第1回会議は、日本側代表100名、米国側代表70余名とオブザーバーの参加を得て青山学院で開かれ、大成功を収めることが出来た。会議終了後、米国側参加者99名を関西から朝鮮を経て、満州への研修旅行に伴った。満州国の実情を見てもらうためである。

満州研修旅行の帰途、関釜連絡船上で米国側代表が会合を持ち、第1回会議を実現させた日本側学生の創意と不屈の努力と好意に報いるために、第2回会議を米国で開くべきであると決議し、実行委員を選んで帰国した。（これは我々日本側委員が密かに望んでいたことであったのだが。）

この決議通りに、第2回会議は翌年の夏、オレゴン州ポートランドのリード・カレッジで開かれ、その後、毎年日米交互に開かれた。しかし、1941年の夏米国で開かれることになっていた第8回会議は、日本側がヴィザをもらうことが出来ず、止むなく中断されることになった。

1947年に第８回会議が日本側学生委員によって復活された。この会議は本来米国で開かれるべきものであったのだが、当時日本は占領下にあり、米国側学生と連絡をとることも、招くことも出来なかったので、在日軍人や軍曹の中から、大学生の資格を持った人を代表として日本で開いた。

このような形で会議は日本だけで続けられたが、1953年の第14回会議に、戦後初めて米国から参加したコーネル大学の学生に会議本来の形について話した。第15回会議は是非コーネルで開かせてくれという要請があり、日本側委員は喜んで賛成した。

こうして、第15回会議は戦後初めて米国で開かれることになったが、当時の日本の経済状態では、太平洋横断の航空運賃を負担できる学生が殆どなく、対策に悩んでいたところ、米軍当局から軍用輸送機に15席だけ無料で提供するという申し入れがあり、学生代表14名とＯＢ１名が監督として第15回会議に参加すべく渡米した。

その当時の会議には、日米両国から少なくても50名の代表が参加することになっていたので、参加できなかった30数名の学生は不満を抱き、「ＪＡＳＣは第15回を最後として、発展的に解消しそれに代って第１回国際学生会議を開く」という決議をした。こうして、ＪＡＳＣは２度目の中断を見ることなになったのである。

1963年を迎えて間もなく、私は翌1964年が第１回会議の創立30周年に当るので、ＪＡＳＣを戦前の形で復活すべきであると考え、日米両国の戦前のＯＢの協力を得て努力を続けた結果、第16回ＪＡＳＣとして復活することが出来た。

あの年、会議の復活に失敗してしまったら、ＪＡＳＣは永遠に消滅してしまい、日米両国の諸君が今日ここで顔を合せる機会もなかったであろうと考えると、1964年はＪＡＳＣの歴史にとり、計り知れぬ程大きな意義を持った年であるといえるだろう。

こうして1964年に復活された第16回会議は、第２回会議が米国で最初に開かれたという由緒のあるポートランドのリード・カレッジで開かれ、以来今日まで日米両国で交互に開かれている。

我々学生の努力によって実現されたＪＡＳＣが「学生の、学生による、学生のための会議」という伝統を失わず、半世紀余りに亘り今日まで続けられているという事実に、私は大きな誇りを持っている。しかし、日米関係の現状を見ると、残念ながら我々学生が望んでいた通りの状態になっていないことを認めざるを得ない。

1991年６月６日のジャパン・タイムズに、デッキンソン・カレッジのジョージ・フリードマン教授と女流自由作家メレディス・ルバードの共著“Coming War With Japan”「来るべき対日戦争」という本に関する記事を見て驚いた。

「日米間の経済摩擦によって、米国の対日感情が悪化し続ける、結局米国は日本と戦わざるを得なくなる」というような考えの米国人がいることを示す本が出版されたということは、1934年以来、ＪＡＳＣの活動を支援することによって、日米間の相互理解と信頼を促進しようと微力を続けて来た私にとり、全く大きなショックであった。

日本の対米貿易黒字が思うようには減らぬため、米国の対日感情が悪化し続けていることは周知のことであるが、それが更に進んで、対日信頼感を急低下させているといわれてい

る。

米国のギャラップ社が、一昨年１月23日から３月１日の間に実施した世論調査によると、一般米国人の23％が「日本は信頼できない国」と考えており、「信頼できる」と考えている人は44％であるとのこと。

これを３年前の調査結果と比べると、「信頼できぬ」と考えている人は１％だけ減っているとのことだが、調査結果は1960年55％に次ぐ高率であるという。

一方、有識者の中でも38％が「信頼できぬ」と考えており、一般人の39％と殆ど同率である。この調査結果は、３年前のに比べて４％、４年前に比べて７％増加しているという。

これに反し「日本は信頼できる」と考えている有識者は54％となっているが、３年前の調査結果に比べると４％、４年前のに比べると７％だけ減ったことになる。つまり、この減った分が、「信頼できない」と考えているグループの票を増やしている訳である。

以上のような世論調査の結果などから見ても、日米関係が緊迫状態にあることは明らかである。そのような状況の下で、会議に参加している代表諸君の使命は、計り知れぬ程重く且つ難しいものといえるだろう。諸君はこの点に留意し、互いに心を開いて率直な意見を自由に交換することによって、真の相互理解と信頼をもたらし、この会議を成功させてもらいたい。

会議の開会にあたって、私がいつも〔密かに〕願っていることは、代表諸君がＪＡＳＣへの参加を契機として、将来自分は「太平洋の相互理解と信頼の架け橋」になるべきであるという使命感を持ち、その実現への努力を続けてもらいたいということである。

最後に、第43回会議の実現に協力して下さった方々にはＩＥＣを代表し心から御礼申し上げます。第一に、日米両国の代表諸君。代表がいなくては、会議は成立しない。第二に素晴らしいプログラムを作成した、学生実行委員。しっかりしたプログラムがなければ、会議は時間の無駄使いに終わってしまう。

会議そのものは、学生が主体であるが、学生の力だけでは、毎年続けるということは不可能である。したがって、これまで会議の支援を続けて下さっているＪＡＳＣInc.（米国側）、外務省、文部省、ＩＥＣ賛助会、三菱銀行国際財団、ＣＩＥＥ（国際教育交換協議会）、また今回初めて会議の場を提供して下さった新潟県・黒川村、北海道・札幌市・清水町の当局者の方々には国際教育振興会を代表し、心から御礼申し上げます。

第 43 回

日 米 学 生 会 議

和 文 報 告 書

第1部　総　　括

Ⅰ．日米学生会議の沿革

日米学生会議は、今から58年前の1934年（昭和９年）に、満州事変の勃発以後悪化しつつある日米関係を憂慮した学生有志によって初めて開催されました。太平洋地域の要石ともなりうる日米間の戦争を回避し、相互の信頼を醸成することが必要であるとの認識と、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は、日米両国の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という基本理念のもとに提唱され、実行に移されたのがこの会議です。準備活動は全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）の主催により進められ、資金調達、運営等の面で多くの困難に直面しながらも、４人の学生を使節団として米国に派遣するに至りました。一行は各地の大学を訪問して米国側の参加者を募り、その結果、総勢99名の米国代表を伴って帰国、一方で日本国内での受け入れ作業の奔走の成果もあり、かくして第１回日米学生会議は青山学院大学で開催され、また、会議終了後には満州への視察団旅行も実施されました。

会議の趣旨に賛同し、日本側の創意と努力に啓発された米国側参加者の申し出により、翌年第２回会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催されました。その後、会議は1940年（昭和15年）の第７回会議まで毎年日米交互に続けられましたが、太平洋戦争の勃発により中断を余儀なくされまし

た。この第６，７回会議について取材した城山三郎氏は、「友情力あり」（講談社刊1989年）を執筆されています。

1947年（昭和22年）、在日米国人学生と日本人学生の参加という形で復活した会議は、同様の形式で日本を舞台に1953年（昭和28年）まで続けられました。しかし、翌1954年（昭和29年）に戦後初めて米国において開催された第15回会議後、国際学生会議への一本化をはかるために発展解消することになりました。これに対し、戦前の参加者有志の会議復活を望む声が高まり、創設30周年にあたる1964年（昭和39年）に、創始者の一人である板橋並治が理事長を務める国際教育振興会の一事業として再び復活、第16回会議が米国で開催されました。以後会議は時代の要請に呼応しながらも同時に創設期の理念を着実に受け継ぎ、毎年日米交互に開かれて本年に至っています。（なお会議の企画運営は、創設以来、日米両国の学生の手によって行なわれています。）さらに、1973年以降は毎年独自の総合テーマを掲げ、日米学生会議の今日的意義を常に問い直し続ける姿勢を貫徹しています。

II. 概　　略

＜実施内容＞

第43回日米学生会議は、1991年７月23日より始まり、同８月19日米国側参加者の帰国をもって終了した。

会議は、「出会いと模索――地球意識の形成に向けて」（Meeting the Challenge of Global Citizenship）」の総合テーマの下、分科会、フォーラム、シンポジウム、コロキアム、各種野外研修を中心として行われ、東京都、埼玉県長瀞、新潟県黒川村、新潟市、北海道札幌市、清水町と開催地を移動しながら、討論を重ねた。

以下ではこの期間の経過を要約する。

（１）　東京（７月23日～８月２日、港区赤坂（財）アジア会館）

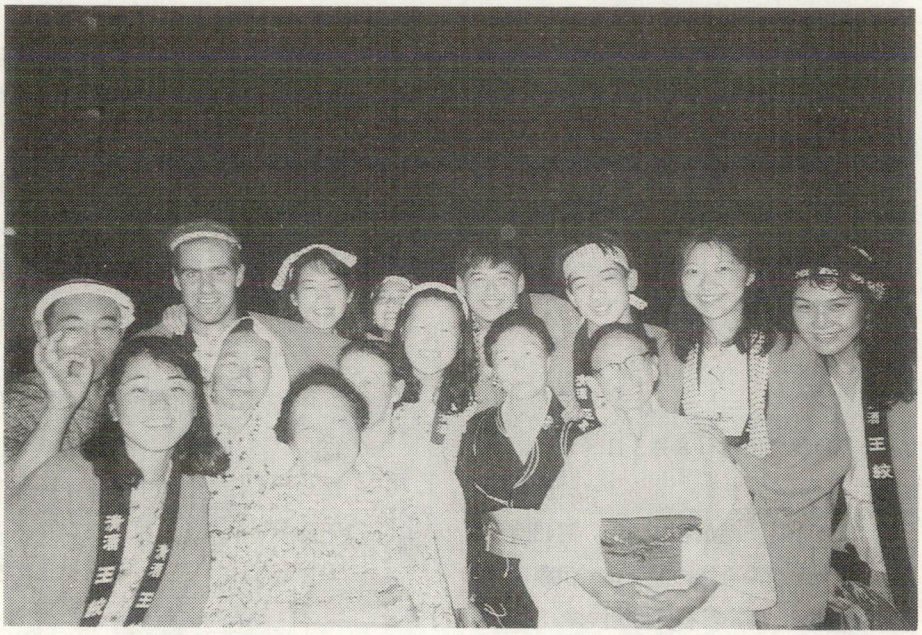
７月23日：日本側代表は午後に、国立青少年総合センターよりアジア会館に移動し、夕刻に来日した米国側参加者を迎える。

７月24日：（財）主婦会館において開会式を行う。国際教育振興会賛助会名誉会長の高円宮憲仁親王殿下を始め、各界の代表の方々にご出席いただく。日米両国委員長、国際教育振興会理事長であり日米学生会議の創始者の一人でもある板橋並治、ＪＡＳＣ　Inc.会長のDonald Albrightが挨拶。その後（財）国際教育振興会にてレセプションを開催し、殿下のお言葉を賜る。レセプション後は自己紹介や会議説明を行い、両国の代表が公式に面会。続いて、分科会ごとに最初の会合が持たれる。

７月25日：日米参加者の親睦を深めるために交流会が開かれる。続いて、分科会ごとに実地研修や討論を行う。

７月26日：米国大使館において、日米関係について講義を受ける。

７月27日：午前中に、分科会ごとに討論、実地研修を行う。



7月28日：午前中は分科会活動。午後は貿易シンポジウムの準備を行う。会場は国立青少年総合センター。

7月29日：貿易シンポジウムを開催。第1部では前米国通商代表代理補のグレン・S・フクシマ氏が日米経済摩擦に関して基調講演。第2部では、日米構造協議、農産物、政治過程、知的所有権、内外投資の各グループに分かれ、各々松下満雄東京大学法学部教授、金井道夫氏（農林水産省総合研究所海外部国際研究室長）、草野厚慶応義塾大学総合政策学部教授、本間忠良氏（三菱電機知的財産権渉外部長）、藤井清孝氏（CSファーストボストン証券会社東京支店インヴェストメントアンドバンキング部M&Aヴァイスプレジデント）から講義を受け、討論する。第3部では、ビジネスウィーク誌東京支局長ロバート・C・ネフ氏を議長に、講師陣によるパネルディスカッションが行われる。このシンポジウムを通して、日米両国の最大の懸念事項についてより深い認識を得ることができた。会場は中央大学駿河台記念館。

7月30日：終日自由行動。

7月31日：午前中は分科会討論、実地研修。午後からは各フォーラム準備担当者ごとに会合を開く。安全保障フォーラムの担当者は国際安全保障、日米安全保障、戦争、兵器の4のトピックに分かれ、翌日のフォーラムでの全体討論の土台となるプレゼンテーションの準備をする。一方、民族問題フォーラムの準備担当者は、ジョン・ラッセル氏（千葉県立衛生短大研修員）、ホアン・ウィリアムズ氏（ワシントン・ポスト政治部記者）の講義を受けた後、討論を行う。

8月1日：安全保障フォーラム開催。フォーラム担当者により準備されたプレゼンテーションで論点が示され、功刀達郎国際基督教大学教授、西原正防衛大学校教授による講義が続く。その後の小グ

ループ討論では、日米両国の安全保障のあり方を中心に討議された。

（2） 埼玉県長瀞（8月2日～3日、憩いの村美の山）

8月2日：東京という大都会を離れ、これまでの会議での疲れを癒すためにレストステイを行う。スポーツやゲームに興じ、夜遅くまで語り合う。

（3） 新潟県黒川村（8月3日～8日、胎内パークホテル）

8月3日：黒川村に到着。第43回日米学生会議新潟会議の開会式で伊藤孝二郎黒川村長、両実行委員長が挨拶。その後、会議前半（東京会議）を振り返って中間反省会を行う。日米間にコミュニケーションギャップが存在することが分かる。

8月4日：各分科会がこれまで行ってきたことを相互に交換し合う機会として分科会交流会を開催、午後は黒川村の自然の中でスポーツやハイキングに興じたり、リラックスした自由時間を楽しむ。夕食後はコロキアムの準備を行う。

8月5日：午前中は各分科会で討論。午後はジェンダー・コロキアム（個人としての男女の平等コロキアム）を開催。結婚、男女関係、性別とアイデンティティー、性別の社会化の4トピックに分かれて、プレゼンテーションが行われる。その後、日米の男女でペアを組み、討論する。このコロキアムでは、男女の社会的地位や機能について再検討されねばならぬことを感じさせられた。この後、黒川村主催の歓迎式典が行われ、黒川村の郷土芸能を見学、村の方々と共に、盆踊りを楽しむ。

8月6日：実地研修として、黒川村の名所を見学するとともに、日本の米文化を実体験するために、石油公園、酒造工場、北方博物館（豪農屋敷）、昆虫館を訪問した。その後、米問題セッションを開き、米問題についての説明を準備担当者から受けた後、自由化の是非について討議する。この後、コミュニケーションコロキアムの準備担当者は翌日の準備を行う。

8月7日：午前中は各分科会で討論。午後からはコミュニケーションコロキアムを行う。コミュニケーションと技術、マスコミュニケーション、パーソナルコミュニケーション、映像とコミュニケーション等に関するプレゼンテーションが行われたが、日米合作のため多様な視点が取り入れられており、続く討議を有意義なものとした。夕食後にはゲームを行ったが、それを通じて性差別の問題が取り上げられ、性差別に対する日米の認識の違いを痛感させられた。

（4） 新潟県新潟市（8月8日～9日、新潟グランドホテル）

8月8日：黒川村を離れ新潟市に向かう。新潟県の主催で歓迎レセプションが開催され、金子清知事の挨拶に対し、日米両委員長が返礼、会議中間報告を行う。

8月9日：新潟から小樽へ向かうフェリーに乗船。船上では分科会討論が長時間続いた。

（5） 北海道札幌市（8月10日～19日、南区道青少年会館、但し8月14日、15日は北

海道清水町）

8月10日：フェリーで小樽港に到着後、バスで青少年会館にむかう。次期実行委員選挙と北海道での会議に関して説明がなされた後、ホームステイファミリーと面会し、各家庭に向かった。

8月11日：ホームステイ。米国側代表は日本の家庭というものを体験することができ、また日本側代表も他の家庭の中に入ることで大いに学ぶものがあったようである。夕方から、ホストファミリーを交えて札幌ビール園にてパーティーを開く。

8月12日：午前に、最後の分科会をもち、野外研修や総括的な討議を行う。午後は各フォーラムごとの活動。安全保障フォーラムは防衛庁、自衛隊から日本の防衛政策について札幌真駒内駐屯地において講義を受け、民族問題フォーラムは北海道大学付属の博物館を尋ねて北海道の民族問題について学ぶ。

8月13日：旧北海道庁舎にて民族問題フォーラムを開催する。北海道ウタリ協会理事長の野村義一氏からアイヌ民族の問題について講義を受ける。その後準備担当者による民族問題全般に関するプレゼンテーションを受けて、小グループ討論に入る。続いて日米でペアを組み、民族問題について個人的な体験等を話し合う。このフォーラムでは他民族共生の困難さと必要性を同時に感じさせられた。フォーラムの後には、北海道主催の歓迎レセプションが開かれ、道内各大学の学長や学生が参加する中、副知事向田孝志氏、日米両実行委員長、米国札幌総領事ダンカート氏からの挨拶があった。

8月14日：全体研修のため清水町へ移動、町に到着し来町式を済ませた後、福祉や商工業、酪農等のテーマごとに分かれて、町内を見学する。後に感想を述べ合い、今後の町作りについて提案を行い、より深く日本を知る機会となる。夕方には町主催の歓迎レセプションが開かれ、町長の矢地広三氏からの挨拶に続いて日米両実行委員長の返礼がある。その後、盆踊り大会にも参加する。

8月15日：午前は自由行動で、町の様々な施設でスポーツをしたり、農場見学をしたり各自有意義な時間を過ごした。午後には町を発ち、札幌へ戻る。夕食後、日米に別れて新実行委員選挙を行う。

8月16日：日本側有志で反省会を行い次期会議に関してアイデアを新実行委員に提示する。新実行委員は次回第44回日米学生会議の骨子を練るために会議を行う。

8月17日：自由行動。新実行委員は会議。

8月18日：午前中は自由行動。午後、札幌市民会館にて、北海道庁より国際交流課長河村耕作氏と赤沼利和氏を迎え閉会式を行う。河村氏、国際教育振興会事業課から随行した水野詠子、ＪＡＳＣ Inc.会長Donald Albright、専務理事Gretchen Hobbs、日米両実行委員長の挨拶の後、日米新実行委員長から次回会議の骨子が説明される。

8月19日：札幌解散をもって第43回日米学生会議は終了する。

◇各分科会は以下の通りである。

（1） 企業と発展途上社会（Business and

Developing Societies)

（参加人員：日本側４名、アメリカ側４名）

討論議題

１．第三世界の女性と多国籍企業
－世界規模での階級支配と搾取－

２．半導体産業における日米間の技術的摩擦

３．理想論でしかない国際的経営理念

４．日本企業と環境問題

５．日本・ＯＤＡ再考

６．タイとインドネシアにおける日本経済の影響

７．日米間の相互依存とこれからの日米関係

８．日本の外国人労働者問題

実地研修

経済団体連合会国際経済部、山谷、ハリー・Ｔ・オーシマ先生（一橋大学客員教授）、北海道鈴木牧場

（２） 我々と変容する社会（Trends, Movements and Change）

（参加人員：日本側４名，米国側４名）

討論議題

１．日米貿易摩擦―文化的背景とその変容―

２．日本における帰国子女問題

３．日本における出生率低下現象

４．新人類を探る

５．時代の顔－マドンナ－

６．映画にみる異人種間結婚への視点

７．大海を超えた日本女性達

８．ＯＬ、キャリア・アップ留学

実地研修

株式会社博報堂、原宿散策ツアー、聖徳学園、株式会社ＯＭＭＧ札幌支社

（３） 文化と宗教（Religion and Culture）

（参加人員：日本側４名，アメリカ側４名）

討論議題

１．日本における新興宗教

２．マドンナ・宗教・神・カトリック教会

３．国家神道と天皇制

４．日本におけるキリスト教

５．ネイティブ・アメリカンの宗教

６．現代アメリカにおけるセクシュアリティ

７．禅と茶の湯

８．臓器移植と宗教観

実地研修

イグナチオ教会・デベラ神父、真如苑、(財)大日本茶道学会、三徳庵，文化庁宗務課、乃木神社、北海道クリスチャンセンター・バーカー神父

（４） 現代社会と法制度（Contemporary Legal Issues）

（参加人員：日本側４名、アメリカ側４名）

討論議題

１．海洋資源の責任ある有効利用とその管理

２．日本国憲法第九条の評価と考察

３．湾岸戦争への対応と日本国憲法の再検討

４．外国人労働者問題への法的アプローチ

５．東京ゴミ事情－その現状と法制度－

６．日本法文化再考－The Management Modelと行政指導－

７．日米雇用機会均等法の現状

８．発展途上国累積債務問題における日

米の役割

実地研修

森下丈二氏（水産庁海洋漁業部国際課漁業監督指導官）、

自衛隊市ヶ谷駐屯地；藤崎譲氏（防衛庁陸上幕僚部広報室三等陸佐）、丹羽忠志（防衛庁長官官房広報三等陸佐）、衛藤鐵男氏（駐屯地広報班長）、

東京入国管理局；佐々木聖子氏（法務省入国管理局）

（5） 科学技術と社会（Science and Society）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．強制的エイズ検査に関する一考察
2．公害と権力－日本の公害運動の知識と価値－
3．日米における科学技術の管理
4．技術移転と多国籍企業
5．日米の科学技術における相互依存関係
6．熱帯雨林破壊と日本
7．核エネルギーの未来
8．日本における「脳死」論争

実地研修

日立中央研究所、浜田卓二郎氏（衆議院議員）、桜井賢樹氏（国立医療病院センター内エイズ医療情報センター）、長嶋敏郎先生（北海道大学医学部第二病理学教室教授）

（6） 歴史と社会制度（History and Social Systems）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．日本における過労死問題
2．中東における日本の安全保障政策
3．日本外交の変遷–中東情勢への対応–
4．日本国憲法第九条の制定過程
5．日本の近代化を支えたもの
6．社会を形成する価値体系
7．東京問題－一極集中の弊害－
8．日本における土地問題

実地研修

過労死110番弁護士（川人博氏）、国立歴史民族博物館、浜田卓二郎氏（衆議院議員）、北海道庁企画振興部企画室

（7） 社会の圧力と個人（Social Pressure）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．同化における文化的圧力
2．男性社会における女性
3．黒人と日本人
4．指紋押捺問題と朝鮮民族
5．大学生への社会的圧力
6．ポリティカル・コレクトネス
7．日本における社会の圧力
8．社会の圧力

実地研修

女性の家HELP、韓国大使館二等書記官イ・ジョングワン氏、いのちの電話、北星学園余市高等学校

（8） 見えない隣人と私達（Rights, Roles, and Responsibilities）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．身体の不自由なある大学生の一日をめぐって
2．障害者とどうつきあうべきか
3．高齢化社会に生きて

4．代理母－親権をめぐる二つの訴訟を考える－
5．進学塾－教室の二重構造－
6．日本における外国人労働者問題
7．日本の「ウチ」「ソト」意識－部落民の歴史的考察から－
8．老人とは？－高齢化社会について考える－

実地研修

江戸川病院高砂分院、東京都社会福祉協議会、法務省入国管理局、北星学園余市高等学校

（9） スポーツと社会（Sports and Socie—ty）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．日本社会におけるスポーツの役割
2．ボート：人生の教訓としてのスポーツ
3．アメリカにおける大学体育会の現状
4．健全な心と健全な体－体育教育のあり方
5．米国における医療制度をめぐるアジア系米国人に対する障壁について
6．限界への挑戦
7．オリンピックを考える
8．「アマチュアリズム」を問うことの現代性

実地研修

小池由紀氏（ＴＢＳスポーツ局）

ロバート・ホワイティング氏（ジャーナリスト）

スダックスポーツクラブ

(10) マスメディアと国際関係（Media and International Relations）

（参加人員：日本側4名、アメリカ側4名）

討論議題

1．情報操作主体としての広告
2．性と流行と広告
3．湾岸戦争における日本の役割についての報道
4．第二次大戦・占領下の新聞
5．国際衛星放送網の構想
6．沈黙の権利—日米マスコミの自己検閲
7．「日本見直し論」者と日米関係
8．日米文化理解と報道

実地研修

博報堂、日本放送協会、槇原久美子氏（タイム誌）、ビル・パウェル氏（ニューズウィーク誌）、ロン・ローズ氏（朝日新聞ジャパンアクセス）、北海道新聞社

◇各フォーラムは以下の通りである。

（1） 安全保障（Defense）

講演 「日米安全保障と国連主導の国際安全保障の在り方」

西原正氏（防衛大学校教授）

功刀達朗氏（元国連事務次官補、国際基督教大学教授）

討論議題

・日米安全保障
・兵器（武器輸出と軍需産業、生物化学兵器等）
・戦争
・国際安全保障

北海道セッション実地研修

陸上自衛隊札幌真駒内駐屯地

（2） 民族問題（Racial Relations）

講演「アイヌ民族のあゆみと日本の現状」
野村義一氏（社団法人北海道ウタリ協会理事長）
討論議題
1．先住民族問題（アイヌ民族、アメリカインディアン）
2．歴史的民族問題（在日韓国朝鮮人、被差別部落民、アフリカ系アメリカ人）
3．難民・移住者問題（難民、外国人労働者、移住労働者、アジア系アメリカ人、ヒスパニック）
東京セッション講師
1．ホアン・ウイリアムズ氏（ワシントンポスト政治部記者）
2．ジョン・ラッセル氏（千葉県立衛生短期大学研修員）
札幌セッション野外研修
北海道大学農学部付属植物園博物館（北方民族資料室・難波拓雄氏）

◇シンポジウムは以下の通りである。
貿易シンポジウム（Trade Symposium ）
第一部　基調講演　FORGING A NEW U.S.－JAPAN RELATIONS HIP
グレン・S・フクシマ氏
（日本ＡＴ＆Ｔ株式会社総合政策・事業開発本部長、前米国通商代表部通商代表代理補、第22・23回日米学生会議参加者）
第二部　各グループにおける講師からのレクチャーと質疑応答
◇農産物　金井道夫氏（農林水産省農業総合研究所海外部国際研究室長）
◇知的所有権　本間忠良氏（三菱電機株式会社知的財産渉外部長）
◇日米構造協議　松下満雄氏（東京大学法学部教授）
◇政治過程　草野厚氏（慶応大学総合政策学部教授）
◇内外投資　藤井清孝氏（ＣＳファースト・ボストン証券会社東京支店インベストメントバンキング部M＆Ａヴァイスプレジデント）
第三部　講師陣によるパネルディスカッション
◇コーディネーター　ロバート・C・ネフ氏（ビジネス・ウィーク誌東京支局長）

◇コロキアムは以下の通りである。
（1）　コミュニケーション(Communication)
討論議題
・コミュニケーションと技術
・パーソナルコミュニケーション
・映像とコミュニケーション
・マスコミュニケーション
（2）　ジェンダー（Gender)
討論議題
・男女の関係
・社会的に作られていく男と女の役割
・ジェンダーとアイデンティティ
・結婚の在り方

＜成果＞
日米学生会議は、日米両国の学生の理解、信頼、友情の促進を図ることにより、長期的展望における両国の円満な関係維持に寄与し、引いては世界の平和に貢献するという目的のもとに毎年開催され今年で第43回を迎えた。
第43回の会議は、「出会いと模索－地球意識の形成に向けて（Meeting the Challenge

of Global Citizenship ）」という総合テーマのもと、日米80名の学生が集まり開催された。日米両国特有の問題より、地球全体の問題を討議内容とし、地球社会で日米両国、そして個人がどのような役割を果たせるかどうかという点を中心に議論が進められた。

特に全体会であるフォーラムでは、地球的規模での解決が求められている安全保障問題、民族問題を取り上げ、コロキアムでは、もっと個人的で人類普遍の問題であるコミュニケーション、ジェンダーを取り上げた。日米両国の学生がこうした論点について率直に話し合ったことは、意見の多様性の重要性と、先入観でものを見ることの危険性を学ぶ上で大変重要であった。一方、日米両国の問題である経済摩擦については、貿易シンポジウムを通じてその認識を深めることができた。

また、今回の会議を通じての最大の問題は日米間のコミュニケーションギャップであった。それは言語的、文化的な背景によるものであり、日米両国の代表は会議当初この問題に直面し、困惑したものであった。しかし、１ケ月間にわたる共同生活を通じて、ゆっくりではあったが、一歩一歩個人相互の理解、信頼、友情を培っていき、最後には確固たるものにしていくことができた。このことは、これからの地球社会で両国代表が活躍するに当たって大きな糧となると自負している。それは、日米両国の参加者が、真摯にお互いを理解し合おうとするたゆまぬ努力の結果とも言えよう。

会議の成果は、学生会議という形態を取るがゆえに、性急に求めることは不可能であるが、困難を克服して得た友情、相互理解の精神は、参加者個人の活躍を通じて今後の地球社会に大いに貢献するものと確信している。また、各討論の講師は一流の方々をお招きし、個人個人にとって大変有意義なものにすることができた。

この場を借りてご協力下さった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

Ⅲ. 日　　程

1991年	7月	23日	アメリカ側参加者東京到着
		24日	開会式／レセプション／日米ミキサー
		25日	日米合同親睦会／分科会
		26日	米国大使館
		27日	分科会
		28日	分科会／貿易シンポジウム勉強会
		29日	貿易シンポジウム
		30日	自由行動日
		31日	分科会／プレ安全保障フォーラム・プレ民族問題フォーラム（所属別）
	8月	1日	安全保障フォーラム
		2日	東京より長瀞（埼玉県秩父郡）へ移動／自由行動
		3日	長瀞から新潟県黒川村へ移動／新潟会場開会式／中間反省会
		4日	分科会討論報告会（グループ討論）
		5日	分科会／ジェンダー・コロキアム／黒川村主催歓迎レセプション
		6日	全体研修日：石油公園・酒造工場・北方文化博物館・昆虫博物館
		7日	分科会／コミュニケーション・コロキアム
		8日	黒川村より新潟市へ移動／新潟県主催歓迎レセプション
		9日	新潟市よりフェリーにて北海道へ移動／分科会
		10日	北海道札幌市着／ホームステイ
		11日	ホームステイ／ホスト・ファミリーとの交流会
		12日	分科会／プレ民族問題フォーラム・ポスト安全保障フォーラム
		13日	民族問題フォーラム／北海道庁主催歓迎レセプション
		14日	全体研修日：清水町へ移動・班別実地研修／清水町主催歓迎レセプション
		15日	清水町より札幌へ移動／新実行委員選挙
		16日	自由行動日／新実行委員ミーティング
		17日	自由行動日／新実行委員ミーティング
		18日	閉会式／札幌市主催レセプション／反省会
		19日	米国側参加者離日

Ⅳ．第43回日米学生会議参加者（分科会別）

＜企業と発展途上社会＞

＊大島　葉子	一橋大学（法律）
五所恵実子	国際基督教大学（社会学）
白石　史朗	早稲田大学（経済学）
野田　雄輔	自由学園（経済学）
＊Ann Marie Mantz	Eastern Washington University （Sociology）
Jeniffer Abend	University of Miami （International Finance）
Jose Pascual	Harvard University （International Relations）
Robert Pekkanen	Harvard University （Asian Studies）

＜我々と変容する社会＞

＊＊上窪　一世	津田塾大学（国際関係）
水野　直子	上智大学（英語・国際関係）
森村　王英	大阪大学（日本学）
山下　　真	東京大学（仏文学）
＊MiCh Jones	Carnegie Mellon University （Professional Writing）
Janet Chance	Harvard University （Philosophy of Education ）
Heather Conahan	Occidental College （International Relations）
Laura Fan	Wellesley College （Art）

＜文化と宗教＞

＊天野　　環	早稲田大学（政治学）
浅野　豊美	東京大学（国際関係学）
河崎　秀陽	浜松医科大学（医学）
高橋　幸世	津田塾大学（国際関係）
＊Kei Koizumi	Boston University （Comparative Political Economy）
Sona Abhyanker	Yale University （Biology ）
Paige Blair	Boston University （International Relations）
Gilbert Shaw	Davidson College （History）

＜現代社会と法制度＞

＊江藤　　一	中央大学（法律）
大橋　映子	獨協大学（英語）
後藤　忠寛	青山学院大学（国際経済）
比企野慶子	慶応大学（政治学）
＊Eric Matheson	University of Miami （Law）
Zubin Gidwani	University of Washington （International Studies）

Anastasia Gregoire	University of Texas, Austin (Asian Studies)
Kevin Kim	Stanford University (East Asian Studies)

<科学技術と社会>

*奥井　暁子	筑波大学（国際関係学）
大前　拓也	京都大学（電気工学）
宍戸由紀子	北海道大学（医学）
松本　正道	早稲田大学（応用物理学）
***Robert Efird	Harvard University (Asian Studies)
Lisa Chow	MIT (Business Management/Computer SCI)
Anita Everard	Tulane University (Health Administration)
Cynthia Staehle	Case Western Reserve University (Organizational Behavior)

<歴史と社会制度>

*岸本　肇	早稲田大学（法律）
市来　圭	東京大学（政治学）
長尾　あや	広島大学（英語教育）
武藤　康	慶応大学（経済学）
*Brad Smith	Rice University (Political Science)
Jeniffer Amyx	University of Virginia (Asian Studies)
Yvonne Galaxidas	Georgetown University (International Affairs)
Stanford Lin	Duke University (Political Science/East Asian Studies)

<社会の圧力と個人>

**小林　隆司	大阪大学（生物学）
遠藤　繁	早稲田大学（政治学）
鳥越あすか	慶応大学（政治学）
渡辺　文枝	立命館大学（英米文学）
*Louie Nguyen	Washington University, St.Louis (Finance)
Christine Cernosia	Stanford University (East Asian Studies)
Ari Green	Miami University of Ohio (Economics/Physics)
Lee Silverman	Washington University, St.Louis (Mathematics)

<見えない隣人と私達>

*七戸　美弥	国際基督教大学（行政学）
佐野日出之	一橋大学（経済学）
作　佳代子	大阪大学（人間科学）
西海　奏子	千葉大学（医学）
*Mary Ellen Quinn	University of Colorado (Physical Therapy)
Zachary Hernandez	Stanford University (Economics/English)
William Hornung	Yale University (East Asian Studies)

Corinne Maekawa	University of Washington (International Studies)

＜スポーツと社会＞

＊深町あおい	慶応大学（政治学）
鈴木　美紀	東京女子医科大学（医学）
長野　宇能	津田塾大学（国際関係）
松井　恵一	下関市立大学（国際経済）
＊Yoshio Hall	Yale University (Biology)
Maeleen Hamano	Occidental College (Political Science)
Indrani Lall	Princeton University (International Relations)
Jane Thomson	Georgetown University (Japanese)

＜マスメディアと国際関係＞

＊＊＊大塚　雄三	東京大学（政治学・法学）
猪刈　由紀	上智大学（英語）
西山　裕子	慶応大学（総合政策学）
野村　研二	早稲田大学（政治学）
＊Hiroshi Yamazaki	California State University, Sacramento (Anthoropology)
Jeffrey Huffman	Seattle University (International Studies)
Mary O'Donnell	Columbia University (History)
Kimberly Todd	Yale University (English)

＊＊＊実行委員長／コーディネーター
＊＊副実行委員長／コーディネーター
＊コーディネーター

第2部　本　会　議

Ⅰ－1　東京（7月23日～8月2日）

（宿泊地：アジア会館）

東京・開催趣旨

第43回日米学生会議は東京で始まった。アメリカ大使館への表敬訪問や主催団体である（財）国際教育振興会の事務局の存在、更には主要機関の集中からくる実地研修等においての利便性などの理由から、東京は毎回開催地の一つに数えられきた。特に今回の会議に関しては他の開催地がどちらかといえば都市部ではないことからも東京の重要性は大きかった。

東京においてはまず私達の会議に賛助、後援頂いている方々をお招きしての開会式及びレセプション、貿易シンポジウム、安全保障フォーラムを開催した。来賓を招いての開会式としレセプションは初の試みであったが、財団の賛助会名誉会長であられる高円宮憲仁親王殿下を始めとし、各界の代表的な方々にご出席頂き、参加学生にとって有意義であったことはいうまでもなく、来賓の方々からもご好評を頂いた。

貿易シンポジウムでは、やはり初の試みとしてグレン・S・フクシマ氏の基調講演を一般公開した。これは決定が遅く広報活動に限りがあったために、あまり多くの一般参加者を得ることは出来なかったが、今後開かれた会議を目指す上では大きな一歩といえよう。

その他に各分科会も地の利を活かして積極的に実地研修に参加した。

全体として東京は便利であり、著名人も多く主要機関も集中している。結果として各実地研修もフォーラム、シンポジウムも大成功であった。しかし東京という都市を考えた時に、それは日本の中心ではあるがあまりにも一部である。東京の雑踏の中であえて会議を開催する必要性があるだろうか、と考えさせられたのも今回初めてのことだろう。利便性を除けば東京は会議の開催地として適当だろうか。真夏のヒートアイランドと呼ばれる酷暑の中正装に身を包み、汗を流して人をかき分けシンポジウム会場に急ぐ道中、ふとそんな疑問が湧いた。　（奥井暁子）

アメリカ側参加者到着

「来たよ！」という誰かの声で、アジア会館で待っていた私たちは、アメリカ側のバスが到着したことを知らされた。夜8時、予想より少し早めの到着に少し戸惑いながらも、私たちは急いでアジア会館の入り口に集まった。彼らが次々と入り口から入ってくると、もうそこは興奮の渦につつまれていた。日米両実行委員同士は、お互いの名前を呼んで抱きしめ合い、感激の再会に身を震わせていたし、他の参加者たちも、まるで旧知の友に会えたかのように親しげに挨拶を交わしていた。初めて会うもの同士でも、みな同じＪＡＳＣer（参加者）だという思いが、互いを既に近づけていた。

本当に全員がどんなにかこの日が来るのを待ちこがれていたことだろう。この日の為に私たちは長い間様々な準備を重ねてきたのだ。会議が始まったらああしよう、こうしよう、とそれぞれがはちきれそうな思いで一杯だったにちがいない。直前の準備の疲れににもかかわらず、アメリカ側が到着したとたんみんな火がついたように元気になったのを見ただけでも十分うかがい知ることができた。それまでお互いに一度も英語を話している所を見たことがなかったが、みな英語を話すと別人のように見えた。アメリカ側が到着する前と後では、確かに何かが違っていた。もちろん今までも日本人同士ではＪＡＳＣ（日米学生会議）の活動をしてきたわけであるが、やはり日米双方がそろって初めてＪＡＳＣが本当に始まるんだなと強く感じた。

自分のルームメイトをみつけると、それぞれ各自の部屋にひきあげていった。早速何人かは外に出かけていったが、この日はアメリカ側の多くが長旅の疲れで早く眠りについたこともあってあまり遅くまで語り合う者はいなかった。しかし、全員が明日から始まるであろう実り多い日々に思いをはせながら床についたことは間違いない。　（西海奏子）

開会式

前日初めて会ったばかりのアメリカ側参加者との会話がまだぎこちない。実行委員の右手を上げる合図にみなピタリと静かになる。ＪＡＳＣ（日米学生会議）の中で培われてきている一体感を感じる。今日から80人の家族の一員になるのだという気持ちがした。

開会式が始まる11時が近づきさっと緊張感が走る。特別ゲストの高円宮憲仁親王殿下がご入場になり、司会者Hallの緊張した挨拶で式は始まった。

日本側、アメリカ側の２人の実行委員長の挨拶は、会議開催のために１年間奔走してきた２人のこの会議にかける思い入れが十分伝わってくるすばらしいスピーチだった。日本側委員長の大塚雄三は、日米という２つの国から来たことを忘れて地球市民として物事を考え、話し合って欲しい旨を述べ、アメリカ側委員長のRobert Efirdは、日米学生会議が日本とアメリカの友好の促進に貢献してきたことを述べ、今地球意識という新たな挑戦に挑んでいることを訴えた。両人のスピーチの中でも「グローバル」という言葉が、１つのキーコンセプトになっていることを感じた。その後の国際教育振興会の板橋並治氏、ＪＡＳＣ Inc.のDonald Albrigh氏からのスピーチも日米学生会議の意義を訴え、私達を温か

くはげますもので、これからの会議に臨むにあたり身の引きしまる思いがした。

午後からのレセプションでは高円宮憲仁殿下からのスピーチを頂いた。自己のカナダの大学への留学の経験から照らして日米学生会議の意義を強調され、会議の成果が実り多きものであることを希望する旨を述べられた。

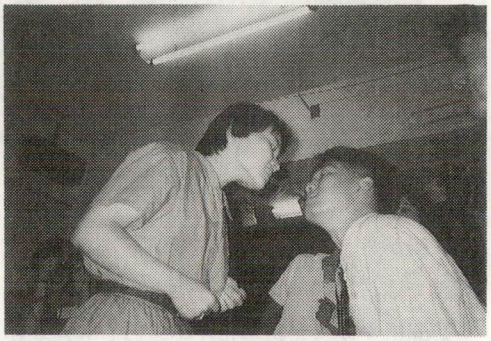
日米学生会議が、いかに社会の様々な人、団体から支えられ期待されているかを感じさせるのに充分な開会式だった。参加する80人の中の１人としてその責任を強く感じた。

板橋並治氏のスピーチの最後の言葉「DO YOUR BEST.」が強く頭に残った。

（武藤　康）

ミキサー（ＭＩＸＥＲ），自己紹介

一昨日、アメリカ側の参加者が到着し午前中には開会式、続いてレセプションが行われた後に続く、初めての自己紹介の場である。レセプションの後に少し自由時間があったのだが、その間に、それぞれ待機していた教室で部分的自己紹介が、一アメリカ人参加者の提案で始まった。みな、それぞれお互いを知りたかったのだろう。とても積極的であった。名前、学校名、分科会に続く、自己ＰＲや、あだなは場の雰囲気をあたたかいものとした。大体その教室内の参加者の顔と名前が一致したところで正式の自己紹介が、大教室で始まった。大きな輪を作り、順番に名前、日本人参加者は、ＪＡＳＣ（日米学生会議）で作ったそれぞれのあだな、自己ＰＲをいった。一人一人、かなり緊張しているようだったが、なかには、みんなを笑わすユーモアの持ち主も



いた。これから始まる会議中、一ケ月寝食を共にする友達を、期待と少しの不安を胸にひとり一人、見つめていた。アメリカ側は、それぞれ、しっかりした自分の考えを持ち、人前での発表にも慣れているようで、私は少し圧倒されてしまったが、同時に、この素晴らしい人々に出会えてとても嬉しかった。

（長尾あや）

ジョイント・オリエンテーション（日米合同親睦会）

７月25日、ジョイント・オリエンテーションは、日本側、アメリカ側の参加者全員による伝言ゲームで始まった。これに続く分科会対抗のポッキーゲーム（口にくわえたポッキーで輪ゴムを渡してゆくゲーム）では、出会ってからまだ２日足らずでありながら、どのチームもすばらしいチームプレーで、会場はしだいに熱気に包まれていった。

次は、日本側がスライドを用いて日本の紹介を行った。まず森村と長尾が京都と広島の名所を案内してくれた。途中森村の彼氏が登場するというハプニングもあり、会場は一気にもり上がった。続けて、「一般的な大学生の一日」と題して、江藤の一日が紹介された。

朝、駅から大学校舎まで学生が行列して歩く場面では、アメリカ側からため息がもれた。

新聞紙を使って折った「かぶと」も大変好評で、童心にかえったかのようにはしゃいで遊ぶ光景も見られた。

次は一転して、混声4部合唱「七つの子」が有志十数名によってしっとりと歌われ、美しいハーモニーで聴衆を魅了していた。2曲目の「ドレミの唄」は、日米80名の大合唱となり大変盛り上がった。

変わって、アメリカ側によるイベントが行われた。ハワイ出身者のフラダンス教室、ディスコダンス、フォークダンス、リンボーダンスと、すべてダンスづくめであったのは、ダンス好きのアメリカ人らしく、日本側参加者も一緒になって、踊り続けていた。

23日の夜初めて出会ってから、次の日の開会式までは日米双方共緊張していたが、このジョイントオリエンテーションをきっかけに日米両参加者全員が一つとなることができたと思える。このあと分科会に分かれて初めてのミーティングへと向かったが、皆まだ踊り続けていたい心境であったことだけは確かである。

（西山裕子）

アメリカ大使館

7月26日正面の壁にアメリカ合衆国の象徴である白頭ワシが描かれたアメリカ大使館講堂で広報担当官のロバート・ネヴィット氏から短い講演を受け、質疑応答を行った。ついでチャーリー・ウォルシュ氏にさらに質問に答えていただいた。

ネヴィット氏はまず自動車貿易問題を取りあげながら日米経済関係について話された。ネヴィット氏によると日米自動車摩擦は単に自動車産業の優劣に限らず、金融や部品製造販売に至るシステム全体に渡るものであり、アメリカに比べると日本では金融から販売までのこのシステム内の結びつきが非常に密であり変わりにくい。したがって日本市場でアメリカ企業が活動していくためには製品の質よりもそういったシステムに力を入れる必要

がある。またアメリカ側のマスコミには日米貿易のバランスを単純化し過ぎているところが見られる。自動車貿易だけを見れば日本の圧倒的輸出超過だが、一方日本はアメリカ農産物輸出の４分の１を輸入している。さらに日米間の教育交流をより相互的なものにし、ひいては相互の国についての情報がより交換されるようにすることで相互理解が深められ、それは国際社会の安定にも貢献するだろう。最後にネヴィット氏によればこれまでアメリカ企業は広大な国内市場に満足し、ほとんど国際市場へは関心をはらってこなかったが、ボーダーレス経済になりつつある今否応なしに国際市場の競争に巻きこまれつつある。競争の厳しい国際市場で日米はお互いに利益を得る競争原理を作り上げる必要があるとのことだった。

続いてチャーリー・ウォルシュ氏が質問に答える形で日本の国際社会での行動について話された。ウォルシュ氏によれば日本の国際安全保障に対する政策は完全ではないにしても形成されつつある。湾岸戦争はその政策形成が加速し有意義なものに変えた上、日本の中に日本の平和主義も何か行動をしなければいけないとう認識を生み出した。また当の日本人を驚かす程の経済成長によって経済大国となった日本は世界最大の規模の政府開発援助を行うといったように経済的にも国際社会に貢献して来ているが、この経済協力が発展途上国の農村地域での教育や人権の保護に役立つといった様により有効に使えるような政策枠組が必要であるとの指摘もなされた。

両氏による話はより深く日米関係や国際社会の中での日本の立場を考えさせられるものであり、啓発される所の多い有意義なものであった。　　（市来　圭）

Ｉ－２　長瀞（８月２日～３日）

（宿泊地：憩いの村美の山）

REST　STAY

８月２日午前９時、私たちは10日間ほど過ごした東京をあとにしてバスで長瀞へと出発した。東京での連日の夜遊びがたたってか、バスの中ではぐっすり眠り込む人がほとんど。東京の予想以上の蒸し暑さに少々バテ気味の人もちらほら。

12時頃には長瀞へ到着し、川岸で昼食となった。うだるような暑さには変わりがないがビルの合間とむき出しの岩の上ではやはり何かが違って思える。暑さの中にも一種の爽やかさを感じたのは私だけだろうか？童心に帰って水鉄砲で遊ぶ者、土産物屋を熱心に見て回る者、めいめいが好きなことをして、２時間あまりを過ごした。

再びバスに乗り30分ほどで美の山のいこいの村に到着した。宿泊は山の中腹に位置しており、眺めは抜群である。夕食までの時間テニスで汗を流したり、山の頂上を目指してハイキングに出かけたり、東京の喧騒から解放されて伸び伸びと自然を満喫することができた。

ボリュームたっぷりの夕食の後は、宴会場での大カラオケ大会となった。それぞれが自慢のノドをたっぷりと披露した後、最後には後に43rdＪＡＳＣ（第43回日米学生会議）の主題歌となる「乾杯」の大合唱となった。さらに外に出て花火大会も行われた。花火自体は大したものではなかったが、この夜の出来事が、後のＪＡＳＣに与えた影響は大きかったと思う。東京では皆でこうして自由に語り会ったり、何かをしたりという時間が少なく、なんとなくバラバラという印象は否定できなかった。しかしこの夜、花火大会の後にもロビーで語り合ったりして、ぼんやりとだが、ＪＡＳＣとしての一体感が出来始めたように思える。たった１日のＲＥＳＴ　ＳＴＡＹであったが、身体も心も本当にリラックスできた１日であった。　　（鳥越あすか）

Ｉ－３　新潟県（８月３日～９日）

（宿泊地：胎内パークホテル、新潟グランドホテル）

新潟・開催趣旨

「将来、またここに皆集まって必ずリユニオン（同窓会）をやろう。」

新潟、黒川村での滞在最終日である。一人の米国側参加者が真剣にこう話をもちかけてきた時、私は今回の新潟開催が成功であったことを実感した。学生会議が日本開催において列島を北上するのは、今回が初めてであった。世界の変動と共に日米関係は今日、益々その幅を広げ、また深いものとなっている。今までとは違った視点で日本を捉え直すその試みの一つとして新潟開催がきまった。滞在先は、県北東部に位置する黒川村。山あいのホテルに滞在した私達には、鳥の声と近くの川のせせらぎに目覚める毎朝が、東京の喧騒を離れた後としては夢の様であった。曇りがちの天候で例年の暑さはなく、澄んだ空気の中を散歩にでかければ、青々とした水田が広がるのに時おり出くわす。ここが日本屈指の穀倉地帯であることは明らかであった。

６日間の滞在では、二つの分科会、二つのコロキアム、中間反省会、分科会交流、新潟実地研修を主に、周りの環境が助けたのだろう、非常に落ち着いた雰囲気の中で話し合いが進み、参加者はお互いの理解を深めながら、その結束を一段と強めることができた。

地元の方々との交流は温かいものであった。伊藤孝二郎黒川村長が会議の為に開いて下さったお盆祭りでは、村の方々と雨の中を一体となってはしゃぎ回り、また、実地研修で訪ねた豪農屋敷では、当主の威厳ある風格に魅かれ、案内する彼の言葉に一同聞き入った。そして何よりも、ホテルの方々の温かく親切な対応に私達は非常にお世話になった。ある米国側女子参加者は、帰る前になって米国から持ってきた小さなお土産を、厳しい菜食主義者である彼女の為に何度も話し合いながら特別に料理を用意してくださった調理場の方々に是非手渡したいと言ってきた。また一方では、地元のおいしい御飯を毎日頂き、コメ論議では日本の米市場解放を息巻いていた米国側参加者が日本側とおかわりを争うほどの日本米の大ファンになってしまった矛盾をどう説明したらいいのだろうか。

新潟最終日、新潟市に移動した私達は、県主催のレセプションにおいて金子清知事の歓迎と励ましの言葉を頂いた。私達の会議は、

これら周りの全ての方々の力で初めて成り立っている。新潟で多くの人々の温かい心に触れ、改めてその様な実感をかみしめた。この会議を可能にして下さった全ての方々に対して、改めてここで感謝を申し上げたい。

（深町あおい）

中間反省会

中間反省会はまず日米個別に話し合った後全体でのミーティングを行った。日本側から出された問題点は大きく分けて3つあり、一つにはアメリカ側のマナーの問題、次に主として言葉に起因する問題へのプラクティカルな提案、最後に最も根本的なことがらも忘れがちな、本来あるべき会議の姿と現状とのギャップの指摘であった。

アメリカ側からは、マナーに関して「何が日本のマナーに反することか、その場で教えて欲しい」という声や「店に入った際に誰が、どれだけ払うかを初めにきちんと教えて欲しい」といった意見、また日本側が英語を話す苦労に対するケアや、もっと日本語も使えるようにとの積極的な思いやりが見られた。日米間の文化の違いとしてしばしば取り上げられることだが、「我々が聞きたいのは、知識ではなく意見だ－not knowledge,but opinion －」という、日本側にしてみれば厳しい指摘もあった。

日米間の認識の違いが最も顕著だったのは会議の理念、目的・テーマについてである。日本側の中に第43回のテーマである「地球意識の形成に向けて」もっと真剣な話し合いを求める動きが見られ、彼等の主張に理解を示すアメリカ側参加者と共に反省会終了後も話し合いが続いていた。

日米合流後の話し合いの中で一種の誤解が生じ、一同やや騒然とする一幕もあった。ことの起こりは、日本側のミーティングで、会議の公式日程よりもそれ以外の部分に熱心な傾向への批判がでていることを説明する際に用いた例が、アメリカの女性に対する中傷と誤って受け取られたことにある。結局は、その後再び日本側のみでミーティングを開いて、この点に関する日本側の合意をまとめ、各個人が誤解の解消に努めることとなった。女性の地位、女性に対する偏見に対するアメリカ女性の敏感さと、英語の微妙なニュアンスを正しくとらえることの難しさを思い知らされる一件であった。

一個人として大変驚かされたことは、これまでの皆の表情からは想像できないような事を皆実は考えていたのだ、ということである。当然と言えば当然だが、2週間が過ぎて、アメリカ側、日本側双方とも様々な思いをはき出すかのような姿が印象的であった。もう少し早い時、例えば1週間がたった時点にでも、それほど大がかりでなくともミーティングの場を設けてもいいのではないかと個人的には思っている。

（猪刈由紀）

分科会交流会

中間反省会から一夜明けた８月４日、分科会交流会が行われた。これは、各分科会からそれぞれ一名ずつで構成された８つのグループが分科会の枠を越えて、討論しようというものである。普段、公式の時間においては分科会間の交流は殆どないため、大変貴重な時間である。とりわけ、それぞれの分科会がどのようなフィールドトリップを行ったかは、私にとって、とても気になる所であった。

前日の反省会で、日本人側の英語を使う際の困難が指摘されたせいか、アメリカ側参加者も非常にゆっくり話してくれ、とてもわかり易い。この日の話し合いは、当然のことながら、テーマが広範にわたっており、どの分科会でも、各々の関心に基づいて、自分の考えをぶつけあっていることがわかる。一人一人が自分の分科会での経験を説明していく。

内容が豊富なためか、予定の時間を越えて説明してしまう。言いたいことが沢山あるのに、時間が足りないのはＪＡＳＣの一つのジレンマであるかもしれない。特に、この分科会交流会では、テーマが余りにも多く、時間は余りにも短い。お互いが言いたいことを言うのは大切なことである。だが、それだけで終わってしまったら、それを会議とは呼べないであろう。もう少し時間が欲しかった、というのが、私の率直な実感である。

だが、それでもこの企画自体は非常に大切であるし、得るところが大きい。今まで、あまり話すことのなかった人の意見や考えを、直接聞くことができる。そして、素晴らしい意見、そして見識を持った人が、このＪＡＳＣの中には、たくさんいるのだということを再認識させられるのだ。それは、自分に努力が足りないということも教えてくれるし、また前向きに生きていこうとする時の強い原動力ともなってくれるのである。

（佐野日出之）

黒川村歓迎パーティー

８月５日、温泉につかったり、人をつかまえて話しこんだり、手紙を書いたり、思い思いにのんびりした時を過ごしたあと、20時、私達は、村の人達のご好意による日米学生会議歓迎パーティーの会場へと飛び出していった。都心では絶対に見ることのない真っ暗な空の下、すでに舞台、櫓、出店などが用意され、今にも祭りの始まる雰囲気である。会場で、ハチマキ、団扇、法被がそれぞれに配られると、早速、慣れない手付きでそれらを身につけ、互いに顔を見合わせては、笑いながら確認しあった。

パーティーは、まず黒川村長の伊藤孝二郎氏の温かい歓迎のお言葉で始まった。続く日米両委員長のお礼の言葉は、参加者全員の心からの気持ちを語ってくれた。木のよい香りの升が一人一人の手にわたると、鏡開き。参加者は地元で造られた、日本酒「王紋」を堪能した。

いよいよ、黒川村無形文化財に指定されている獅子舞である。この舞いは、江戸中期の凶作の折り、初めて舞われ、以後、村の安泰

と豊穣を祈願するものとなったそうだ。ひょっとこのようなユーモラスな仮面をつけた男女一組の農民の舞いは、笛と太鼓の音にのって、手、足、腰で存分にリズムを刻む、楽しいものであったが、続く獅子の舞は、流れる如く舞台全体に躍動する舞であった。初めて身近に見る舞の迫力に参加者は日米を問わず、「Beautiful」「おもしろい」と感嘆の声を上げながら、見入った。民族芸能という言葉を実感できるときであった。

黒川村の盆踊りを皆で踊った。さすがに、着物姿のおばあさんたちは上手だが、必死で躍るＪＡＳＣerも、なかなかのものだ。雨が降ってきても、ディスコミュージックにかわると、会場全体、踊りの熱気にあふれた。音楽に合わせて一生懸命に踊るおばあさんの姿と笑顔がとても印象に残っている。最後にこの心温まる楽しいパーティーを企画してくださった黒川村の方々に御礼申し上げたい。

（高橋幸世）

全体研修

朝、胎内パークホテルの前で皆で写真を撮っていると、オヤ？何か見慣れぬ大きなカメラもこちらを向いている。取材だあ！皆、素知らぬ顔をしながらも少しいつもより緊張ぎみ。というわけで、今日の全体研修には報道関係者も同行された。

黒川村の名の由来は、油の湧出のため川が黒い色をしていたことから来るそうで、日本で初めて油田が発見された土地である。バスでゆられて約30分、シンクルトン記念公園ではプーンと油のにおいが鼻をくすぐる林の中で、昔ながらの神道に基づく採油の儀式を見学させて頂いた。第二次世界大戦中、黒川村の油は大変重宝されたそうで、我々80名は両国の不幸な過去を振り返り、現在の自分達の固い友情を再び確信し合った。

市島酒造では工場内を見学した後、数種類の酒を試飲させて頂いた。二日酔のため迎え酒を楽しむ者もチラホラ。地酒の味の差は、米と水から来るそうで、それを聞くと新潟の酒が何故に上質なのか納得がいく。バンカラで有名な北大の学生の私は「北国の春」をチ

ビチビやりながら大満足していた。米国側参加者40名にも“ＳＡＫＥ”の単語を知らぬ者はもういるまい。土産に酒を買っている者もいた。そのうちの数本はその日のうちに我々の体内に吸収されたことは言うまでもない。

北方文化博物館は、かっての大地主伊藤文吉の元本郷で、昭和21年遺構保存のため財団法人北方文化博物館が創設され、これに寄付された。博物館の創設には一人の米国人が尽力されたという。ここでの圧巻は何といっても大広間から見る庭園で、各地の名石を配した鎌倉、室町の古式による廻遊式庭園だそうだ。蟬の声を耳にしながら縁側に皆で一列に並んで庭を眺めていた。60以上の部屋があるというこの豪邸、我々の好奇心をもっても全てを把握しきれない。庭園には５つの茶室があるということだが、その一つは特に米国人の人気を集めていた。

博物館でおいしい天ぷらを食べた後、我々は「昆虫の家」を尋ねた。すばらしい昆虫のコレクションである。中でもチョウの標本は優れていて、その羽や華やかさにはため息がでるばかりであった。

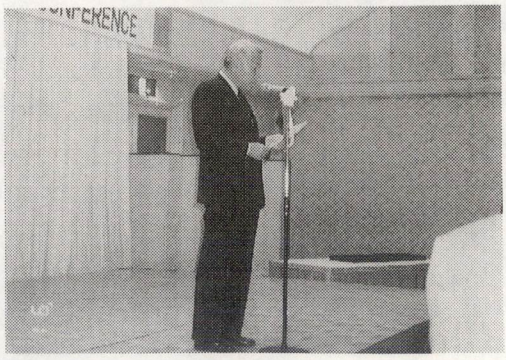
今回の全体研修では、何人かが通訳をかってでることになったが、酒造工程の話では日本人の我々にも知らぬ言葉が多々使われた故、頭痛をもよおすと言っていた米国人のＲ君、「昆虫の家」で緊張のあまり身体を硬直させていた日本人Ｕ君からもわかる様に、改めてコミュニケーションの難しさを感じさせる場面もあった。

車窓に見えた青々とした田園風景は、この後の我々の米問題についての討論に期待を寄せていた様である。　　（宍戸由紀子）

新潟市滞在

新潟最期の一日、私達は一週間お世話になったホテルの方々との別れを惜しんだ後、新潟市へと移動した。バスで到着して早々に、市内のホテルにて昼食会を兼ねたレセプションが県庁主催で行われた。

会場の豪華に盛り付けられた食事、そして何と言っても正面のステージに下げられた垂れ幕の鮮やかな字――The Prefecture of Niigata Warmly welcomes the members of the Japan－America Student Conference――が私達には嬉しかった。金子知事のあいさつがあり、続いて日米両委員長のあいさつと結果報告、そして伊藤黒川村長の音頭で乾杯。レセプションは和やかに進んだ。会には、県内在住のＯＢの方他準備活動中にいろいろ助けていただいた諸氏も参加しており、そう



いった方々と歓談する者、新潟の思い出に早ふける者、記念写真で忙しい者等々、その場の雰囲気を皆それぞれ楽しんでいた。途中には、主催者であるＪＡＳＣ　Inc.のAlbright会長、そして東京から駆けつけた板橋国際教育振興会理事長が、新潟県に対して感謝の意を含めてあいさつを行った。そして会も終盤に近付く頃になって、学生会議参加者一同による合唱が始まった。‘We Are the World’のメロディーが流れだすと、自然に出席者は肩を組み合って一つの大きな輪を作った。皆の歌声が一つになり大合唱となる。そして間もなく閉会となった。

会終了後、夜の街へ出ると、その日は新潟祭り。私達も練り歩く踊りの波に交じっておどけて見せるなどのはしゃぎ様であった。しかし、翌日はフェリーで北海道へ移動。朝は早い。いつまでも歩いていたい気持ちを押さ

えてホテルへ戻る。部屋の窓からはライトアップに照らされた万世橋が、その影を信濃川の川面に映しているのが見えた。これで新潟ともお別れだ。どんなにたくさんの思い出が出来たことだろう。幸福感に浸りながら、明日の準備のためにスーツケースを開けた。

（深町あおい）

フェリー

10時30分、フェリーはゴゴゴゴという音とともに新潟港を離れた。骨が軋むほどの重い荷物をフェリーに運んだ直後なので、ほっと一息。黒川村での数日間が、脳裏を掠め、会議が終わりに近付いていることを実感する。13時から、テーブル（分科会）が始まる。ほとんどのテーブルが二人から三人の論文発表を予定しているらしい。ある者は一生懸命論文に目を通そうとしており、ある者はひたすら論文発表の用意に忙しく、ある者はひたすら眠る。フェリーの中ではミーティングを開く場所を見つけるのに一苦労である。私のテーブルは、デッキに出たが、風が強くて、論文は飛ぶし、ペンは転がるしで、結局、場所を移動する羽目になった。テーブルの中には、階段のしたにもぐり込んで小声で議論しているものもある。５時間の長いテーブルを終えたあと、思い思いに夕食をとる。

しばらくすると太陽が水平線に沈もうとしている。いつものように記念撮影。長い夜がまた始まる。何かが起こる予感がする。フェリーのカラオケ・ラウンジでは白い霧に包まれた松井がスポット・ライトを浴びながら十八番の「恋の予感」を歌う。そして先着20名様無料と聞くやいなやＪＡＳＣer（日米学生会議参加者）のパワーが爆発した。いつものようにまた「乾杯」の歌を合唱する。

そろそろ22時。消灯の時間である。普通の人は就寝する時間である。しかしＪＡＳＣerに睡眠は似合わない。デッキに出ると後方が

騒がしいので行ってみると、踊り歌う者、ＪＡＳＣ（日米学生会議）そのものについて議論するもの、皆興奮している。いつしか10人前後が円陣を組んで歌を歌い始めると次々に歌が歌われ、際限ない合唱がつづく。暗闇が時の流れを止め、ＪＡＳＣerを包み込む。朝まで語り明かすものや、興奮で眠れないままベッドに横たわるものの、日本海にまた朝が訪れる。朝５時、がらんとしたフェリーを眠そうな顔のままで下船する。睡眠不足の体にスーツケースが容赦無く重くのしかかる。森

村の瞳のように輝く日本海が、ＪＡＳＣerを出迎える。（松本正道）

Ｉ－４　北海道（８月10日～19日）

（宿泊地：南区道青少年会館、清水町農業研修会館）

北海道・開催趣旨

最終開催地、北海道。日本人参加者も、半分以上は初めての地である。私達は小樽港に８月10日、早朝４時30分に到着。８月18日の閉会式まで第43回日米学生会議の締め括りを札幌市と清水町（全体研修として一泊）にて過ごした。以下に、北海道での主なスケジュールを振り返り、成果を統括したい。

10日午後、我々の研修地、青少年会館真駒内ハイツにてホームステイの家族と面会。札幌市の協力で、日米学生のペアが各家庭にて一泊のだんらんを楽しんだが、中には食事を囲んでの会話が新潟での米問題の議論に及び、家族の方の新たな視点を交えて深夜まで話し込んだ家庭もあったという。11日の全体の親睦会では、学生と家族の輪があちこちに見られた。実に心暖まる２日間であった。

13日には民族問題フォーラムが開かれアイヌ問題を中心にお互いの人種観などを議論。夕刻から北海道庁主催のレセプションには向田副知事をはじめ北海道の各界からの御参加があった。会議開催にこぎつけるまでさまざまな形でご協力くださった方々の応援の言葉に改めて感謝の意を強くした。

14日、全体研修。北海道のほぼ中央に位置し酪農、畑作と町民による第九（合唱）の町として知られる清水町に赴く。ここでは、８つのグループに分かれ（酪農、文化、宗教、など）町のいろいろな素顔を見るべく役場の方と高校生と共に研修を行った。各研修先ではそば作りや座禅を実体験したり小学校の生徒と遊んだりと会議の枠を越え、清水町民と触れ合う絶好の機会となった。矢地町長御出席の歓迎会はちょうど盆踊りと重なり、町から頂いた黄色の（町のシンボルうっちゃん）Ｔシャツを着た日米の学生が夜遅くまで踊りの輪に連なっていた。

15日には清水町を後に札幌へ。新実行委員選挙を控え落ち着かない帰路の道中だった。

そして、同日中には新実行委員が決定。43回の会議内容が終わりに近付く中で新たな歴史の一歩が始まるという接点の時に感慨の色があちこちの顔にうかがえた。18日には閉会式で正式に会議がひきつがれ、そして、43回日米学生会議は幕を閉じた。

こうして北海道でのスケジュールを振り返ると改めてその慌ただしさを感じざるを得ない。はじめにも書いたが、北海道は私達のほとんどにとって見知らぬ土地であった。そんな私達は北海道ならではのものも少々欲張って求めていたかもしれない。農業、酪農、民族、防衛、地方と一極集中などどれだけの議題を消化できただろうか。しかし、北海道を開催地とした当初からの大きな目標、地域の方々との触合い、についてはかなり達成されたのではないかと思っている。ホームステイや清水町での小さいグループに分かれて行った実地研修は、会議の滞在地として以上に北海道に対する理解を深めてくれた。さらには、一学生と市民、町民との間の交流の一歩という意味で意義が大きかった。残した課題としては、日米学生会議は親善大使としての役割から、地域に対して何らかの働きかけが出来るかという点であろう。この点は次回以降の参加者に委ねるだけでなく、今回の会議に参加した我々がそれぞれの道の中で担うべき課題であると思う。

その意味でも、第43回日米学生会議の一カ月という期間を過ぎた現在、そして将来も、最大限の理解を示し協力して下さった方々に対し感謝の意を表していきたい。個人レベルや、さまざまな形で日米学生会議と北海道をはじめとする各開催地とのつながりが続いていくことを心から願っている。（七戸美弥）

ホームステイ

六日間の新潟での会議が終わった。いよいよ最終の北海道の会議へと突入である。私達はフェリーに乗り、19時間揺られて早朝の小樽に着いた。皆眠い目をこすりつつ、バスの窓から北海道の美しい景観を楽しんでいるうちに、真駒内ハイツに到着した。午後からホストファミリーが迎えに来る。どんな家族が自分のホストファミリーになるのだろうと期待と不安で胸をはずませながら、ホストファミリーに会えるのを楽しみに待っていた。日本人とアメリカ人でペアを組んだ。大抵が同性同志だったが、中には男女でペアのところもあったので、今思えばそのペアは内心喜んでいたのではないかと思う。一組ずつ名前が呼ばれホストファミリーの人と共にハイツを去り、いよいよ一泊二日の思い出ホームステイが始まったのである。

ところで少し私のホームステイの体験をつづろうかと思う。その家族は４人家族で、ホストファーザーは無口な方でマザーは話好きの快活な方であった。実際のところ私は最初、非常に緊張していた。なぜなら日本人である私が突然見知らぬ同じ日本人の家庭に泊まることに対して少しためらいがあったからだ。が、見事にも一時間後にはホストファミリーは私の緊張を完全にほぐして下さった。そして夜には、共に様々な事について充実した話し合いをし、互いに意見を共有することができたことは私にとって大きな収穫であったと思う。一番盛り上がった話題が「結婚」につ

いてであった。お見合いについてどう考えるか、または何十年も結婚生活を営んでいてどんな時に相手を好きと感じるか等々真剣な討論をし、貴重な意見を聞くことができ、大変自分にプラスであった。

一泊二日の楽しい有意義なホームステイも終わりに近づきホストファミリーと共にサッポロビール園に行った。そこで友達のホストファミリー体験についていろいろと聞いた。例えば、英語の問題でホストファミリーは全く話せないので、日本人が通訳に奔走し、大変だったが勉強になったという声や、家族に小さい子供がいてその子たちにすっかり気に入られてしまった話など様々である。どちらにしても共通した感想は、日本側にすればやはり同じ日本人の家庭に滞在することがとても新鮮であり、アメリカ人側では、日本の家庭を理解するきっかけとなったということであろう。

このホームステイの企画は、第43回日米学生会議の総合テーマ「地球意識の形成に向けて」に立ち戻って考えて見ると、非常に意味深いものであったのではないか。なぜなら、日本とアメリカの相互理解を深め、共に地球意識を育むためには、まず行動基盤である家庭に触れ、考えてみることが欠かせないからだ。この体験は必ず参加者の心の中で大きな位置を占めることだろう。最後にこのように貴重な機会を作ってくれた実行委員の人々に感謝して筆を置こうと思う。　（大橋映子）

交流会

一泊二日のホームステイを終え、ホストファミリーと共に夕方ビール園に集合した我々は、様々な思いを胸に古いビール工場を利用した建物内へと入っていった。

「乾杯」のかけ声もなく、何気なくパーティは始まったかのように見えたが、次の瞬間人々はバイキング形式の料理の前に列をなしていた。それから数十分間、人々はただ食べて飲んで、海の幸、山の幸、肉、ビール、ワイン等々多彩を極めた料理で食欲を満たしていった。一段落すると、いつものように写真撮り合戦があちらこちらで繰り広げられ、さらに、大声を出す者、皆に酒をすすめる者、急に社交的になる者などまでが出てきた。

いよいよパーティも最高頂に達したと思われた頃、第43回参加者の18番である「乾杯」の曲がどこからともなく歌われ始め、あっけにとられているホストファミリーをよそに、最後には皆で肩を組みながらの大合唱となっていた。

しかし、時間の経つのは何と速いのだろうか。時計は無情にも午後９時を刻み、皆はパーティーの余韻とホストファミリーとの別れを惜しみながら、バスが来るまでの間、外で写真を取り合ったり話をしていた。無制限にあったビールとワインをみんなけっこう飲んでいたため、その間は非常に賑やかであった。

ついに二台のバスが我々を迎えに来ると、

後ろ髪をひかれながらも乗り込まなければならず、そうやって８月11日、札幌の夜はふけていくのであった。

なお、筆者は先日、黒川村盆踊り大会での自分自身の反省と、数人からの「飲み過ぎないように」との忠告があったため、大してこの日飲まなかった。代わりに、皆が次第に酔っぱらい集団と化していくのを冷静に観察しながら、ホストシスターと大人の会話を楽しんでいたのである。　　（後藤忠寛）

北海道レセプション

我々一行を歓迎しての北海道庁主催のレセプションが８月13日、夕刻より開かれた。向田副知事を始め、お世話になった北海道庁の方々、また札幌市、総領事館、アメリカンセンター、各大学、など、各界から御参加があった。レセプションは向田副知事のスピーチで始まり、副知事は、叱咤激励の言葉を21世紀の日米関係を担う我々への期待を込め述べられた。次に、日米両実行委員長の挨拶、総領事のスピーチと続いた。さらに歓談の時間には、道内の学生も交えた、出席者同志の輪があちこちに見られ、会議の枠を超えた意見交換の格好の場となった。そして、最期に歓談の輪は「知床岬」を歌う輪となり、北海道の風景を全員で歌い上げた。

このレセプション中に、多くの方から、日米学生会議に対する理解と激励のお言葉を頂いた。日米学生会議は会議の参加者が作るものである。しかし、同時に参加者以外の有形無形の協力があってこそ成り立つものだ。この夏我々日程をこなすだけでも大変な一ヵ月を過ごした。それも79人との共同生活である。余裕がなくなってくると、お互いを思いやる気持ちが薄れがちだった。会議への支援の言葉を思い出すにつけ、当時、与えられて当然、という空気がなかったか、自治体や会議を支える協力団体への配慮は足りていたのか、という思いにかられる。

第43回日米学生会議は永遠だが、通過点にしか過ぎない、と言った参加者がいた。ならばこの先尚のこと、会議に参加した者として日米学生会議と社会との接点を考え、学生と

いう身分と会議の本質を問うた上で各自が社会に対する責任を担っていきたい。それぞれの会議は終わっていないのである。

尚レセプション当日の午後は、民族問題フォーラムを北海道旧庁舎をお借りして行った。最後に、忙しい中一日中お付き合いして下さった北海道の各界の方と交わる機会を作って下さった北海道国際交流課の方に改めてお礼を申し上げたい。　　（七戸　美弥）

清水町訪問

8月14日、15日の2日間、私たちは清水町をたずねた。札幌からバスに揺れること約5時間。清水町は北海道のほぼ中心。帯広に近い酪農の町である。

清水町に到着すると、おそろいの黄色のTシャツを着た町の人達が出迎えてくれた。そして私たちもそのTシャツをもらい、それに着替えてまず昼食。80人全員が同じTシャツ

を着ている様子は、なかなか壮観だった。

午後は8グループに分かれて、そこに地元の高校生が加わって、町の文化や産業を見学した。私のグループは農業についてだった。まず訪れた養鶏場。長さ100m以上の大きな飼育所が幾つも並んでいて、中に入ると見渡す限り鶏、鶏、鶏。みんな篭に入れられているから、赤いとさかだけがちらちら揺れている。卵を見るたびに、しばらくはこの光景を思い出しそうだなあと思った。次は町の共同穀物集積所を見学。3番目は個人経営の酪農家だった。親子3人だけで約80頭の乳牛を飼育していると言う。ここの牛は昼は放し飼いにされていて、コンピュータで管理されている。首輪に小さな装置がついていて、牛が自分で餌場に行くと、その牛にあった量の餌が自動的に出てくるという画期的な仕組になっていて驚いた。最後は、会社組織の酪農場にいった。どこも初めて見る様な所ばかりで、興味深い見学コースだった。見学が終わって戻ってみると、各グループの見学内容の発表が行われていた。文化グループはすごくもてなされておみやげをもらったらしい。

夕方から駅前の広場で、町長主催の歓迎会を開いていただいた。ここで昼にもらったTシャツが大活躍をした。Tシャツを着ていれば食べ物、飲み物が無料！地元の女の子達が演奏してくれた太鼓がとても良かった。

その後、私たちは盆踊りに参加した。もうすっかりあたりは暗くなっていて、夏とはいってもTシャツ1枚では少々肌寒かった。だからかもしれない、踊れや騒げやで、けっこう

盛り上がった気がする。

翌日の午前は自由行動だった。サイクリングをする人、体育館でバスケットをする人、池でボートに乗る人、みんなそれぞれ思い思いに、大自然の中でのんびり羽をのばした。

清水町はすごくいい。町の人たちは、親切でみんな明るい。自然がいっぱいで、大きなとうもろこし畑とか、長くて信号のない道とか、いかにも北海道らしいところがいっぱいあった。住んでみたい思う。しかし都会もやしの私には厳しいことも多いのだろう。

こうして最後の全体研修は終わった。清水町の方々の温かいもてなしは一生忘れないだろう。それと同時に、日本はせまいといっても都市と田舎の差は激しいなあと感じた。

最後に余談であるが、山下は清水町をいたく気に入って、会議後数日泊まって、体験酪農をしたという。　　（鈴木美紀）

反　省　会

反省会では、閉会式の後ということもあって、楽しかったことや思い出などや、一人一人が皆に伝えたかったことなどを語りあった。北海道の夜、外でやったため、反省会は寒さのため中断してしまったが、その後は、部屋の中で、20人くらいで反省会は続いた。そこで話された内容は反省というよりは、思い出が主だったので、ここでは、日本側が８月16日に行った反省会において出た率直かつ建設的な意見についてふれてみたいと思う。

①　ＪＥＣ（日本側実行委員）と他の参加者のギャップ

・どこまでＪＥＣの仕事でどこまで他の参加者が入っていけるのか、先に知らせて欲しかった。

・定例会の午前中、ＪＥＣミーティングで他の参加者が入れなかった。見学したい人がいれば見せてもよかったのではないか。公開しない必要性があるならば、先に知らせて欲しかった。そして何を話しあったのか報告が欲しい。

・ＥＣ（実行委員）ミーティングは事務的なことばかりやっていた。別に閉鎖的になっていたつもりはなかった。

・ＥＣとの壁は決して全員が感じていたわけではない。

・ＪＥＣがオープンでいてくれてよかった。

・自分自身が積極的に働きかけなかったことを後悔。

・思い入れがＪＥＣは強いだろうが、正当化には走ってほしくない。

・参加者側は自分達で自分から意見を言うべきだろう。など。

②　定例会について

・米国側と日本側の知識の量の差を感じた。毎週１回定例会を開く必要があるかどうか。米国側は集まっていないのだから、同じ忙しい学生として、１回集まり３カ月後までにこんなことを勉強しておきましょう、でいいのではないか。

・もし定例会がなかったら、急に始まる日米学生会議で生き残れるかどうか？

・定例会でもっと議論の場が欲しい。

・共通語が英語である。定例会で、もっと英語を使う機会がほしかった。どのくらい自分の英語にギャップがあるか知れば良かった。

・米国側も定例会ではないが、何か出会う機会をつくればいいのではないか。
・関西の定例会を１週間遅らせても、当日関東の資料を受けとるため意味がなかった。

③　テーマについて
・テーマをもっと話し合う機会が欲しかった。テーマと自分自身を結びつける場所がほしい。１人３分間ずつ話すスモールグループディスカッションがよい。
・民族問題・安全保障フォーラムなどの後に、必ずテーマと結び付いた議論の場をもつ。
・各自の書いた論文を読み合う。全体合宿などで意見を交換しあう。
・テーマは会議の１つの顔である。
・総合テーマ、フォーラム、シンポジウム、コロキアム、分科会のつながりが見えるようになってほしい。例えば分科会の面からフォーラムに参加できるなど、分科会により、フォーラム、シンポジウム、コロキアムを決めてもいいのでは？

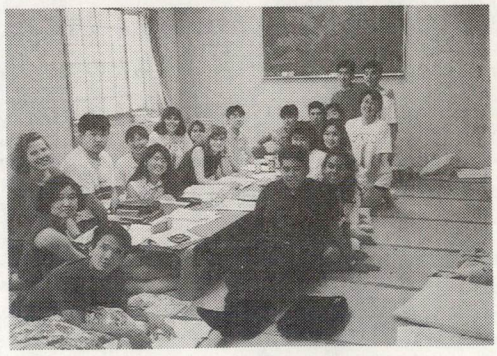
④　その他
・計画表を先につくっておいた理由を言っておくべきだった。そして他の参加者にも作成に参加してもらいたかった。
・日・米で選考方法が違うこと自体、平等ではないのではないか。
・会議中に、日本側は米国側に対して閉鎖的だったかもしれない。

などなど本当に多くの意見が出たのだが、ここの紙上では全て書くことができないのが残念である。来年のＪＡＳＣ（日米学生会議）において、この反省会の意見が反映されれば幸いである。最後になってこれだけの反省が出るということは、皆のＪＡＳＣへの情熱の証拠であり、来年のＪＡＳＣがよりよくなることへの願いであると思う。ともあれ、第44回日米学生会議は始まったばかりであり、これからどのようになっていくのか楽しみでしかたがない。　（河崎秀陽）

新実行委員会議

日米双方で選挙を経た後でのＥＣ（実行委員会）の最初の活動は第44回の概要を話し合うNew EC Meeting（新実行委員会議）であった。これは北海道で、３日間かけて行われた。そして決められたことを全て記載したものを“Sapporo Agreement”と呼び、今後１年間これをベースにＥＣ達は企画・運営していくことになるのだ。

実際のミーティングは両実行委員長を進行役に英語ですすめられていった。期間はどの位にするのが妥当なのか。日米で話し合いたいトピックは何だろうか。知識のつめこみで終わらないために何をどう行うのが効果的なのか…。それぞれがそれぞれに案を出し合った。分科会の候補に挙がったトピックは２つの黒板に書き切れなかったほどである。



このミーティングがすべて英語であったことは日本側にとってハードであった。しかも、ある人が話している途中で、次々と手を挙げていくアメリカ側に日本側が戸惑いを感じたのも事実であった。しかし、日本側が消極的であった、と言っているのではない。第44回会議への取りくみの意欲といったことは日米双方で優劣など付けることなど不可能なのである。具体的な内容として以下のようなことが決まっていった。

1つの行事が終わったら、そこでおしまい、というのは避けたい、できるならば会議を通して問題意識を深めていきたい。こうした願いで企画されたのが、各開催地で行われる予定のフォーラムである。そして、専門知識を要する安全保障や貿易問題。さらに社会に貢献するＪＡＳＣ（日米学生会議）という願いが込められたボランティア・ワークといったことまで、各開催地で何らかを考えていこうと計画された。また日米共同で、会議の成果を社会にアピールしようという意図で、また会議での話し合いを1つの形に残そうということで、共同声明も行うことになった。分科会についても文系にかたよらないように工夫をこらそうということも話し合われた。今回New ECが心がけたことはテーマにも表れた通り、自分たちなりにできる社会への貢献ということ、会議では終わることのない問題意識の持続、物事を多面的に見つめようとする姿勢をＪＡＳＣで行っていこうと計画案を出し、合意していったことである。英語という言葉の問題もあるが、このミーティングでも日米間の態度にちがいを見い出すことができた。多数決ということに関しても、1人1人が最後まで妥協せずに言う権利があるはずだ、という姿勢と限られた時間内で合意を作る、というこの双方のバランスは予想以上に難しかった。ある時は夜中の2時まで話し合った。やっと皆に安堵の笑顔がこぼれたのは仮のプログラムや、開催地、分科会の方向性といったひと通りが決まり「Sapporo Agreement」が出来上がった時だった。言葉にこそしなかったが、それぞれのＥＣが第44回会議へ向けて成功への意志を秘めている笑顔のように私は見えた。

（遠藤　繁）

閉　会　式

8月18日午後3時。第43回日米学生会議の閉会式が札幌市民会館の会議室で行われた。窓の外には大通り公園を見おろすかのようにすっくと立つ赤いテレビ塔が見え、緑と花が溢れる美しい公園で残り少ない夏の休日を楽しむ人々の声が聞こえてくる。天気は快晴、青空がどこまでも広がり、まるで明日からの80名それぞれの道を暗示するかのように明るい太陽の日ざしがさんさんと照りつける。北海道庁の方々からのメッセージに続き一年間

他のみんなと共にＪＡＳＣ（日米学生会議）でかんばってきた大塚雄三とRobert Efirdの委員長としての最後のあいさつ。いつもきちんとしたスピーチを用意するバリバリ派の大塚と、感情を込めてゆっくり話すシミジミ派のEfird。この２人のコンビはなかなか面白かった。28日間、東京・新潟・北海道と私達を見守って下さった国際教育振興会の水野詠子氏、JASC Inc.のAlbright氏、Gretchen Hobbs氏の顔が前に並ぶ。Hobbs 氏の言葉にあったように「今日は終わりの日ではなく、新しい出発の日」このことをいつも心のどこかにとめておこう。この１カ月に体験したことはあまりに多く、貴い。新しい土地、新しい人々、そして何よりもこれから未来を築いていくために共に手を取りあっていける素晴らしい仲間との出会い。生まれた土地も国も、育った国の文化も習慣も考え方も違うけれども、心を開いて話し合ってみれば共通に、お互いに理解できるハートを持っている。これは前からずっと私の頭にあったことだが、ＪＡＳＣに参加することによって、頭ではなく心で感じることが出来たのが何よりも嬉しい。

「明日から又、現実かぁ」だれかがつぶやいた。ＪＡＳＣでの経験を夢で終わらせないためにも、ここにいる１人１人と私の道が又クロスするその時まで、がんばって自分の道を進んでいきたいと思う。　（五所恵実子）

別　れ

８月19日、千歳空港、４週間に及ぶ会議の全日程を終え、私達は帰路に就こうとしている。空港ロビーの中央では、人目をはばかることなく日米80名の学生が別れを惜しんでいる。目を真っ赤にして泣きじゃくり、抱擁する姿や、再会を誓って固い握手を交わす光景があちこちで見られる。80名それぞれがこの別れの日を噛みしめ、肌で友情を確かめあっているのだ。

共に過ごした日々を思い返すと、走馬燈の様に数々のシーンが頭の中を駆けめぐって来る。様々な場所を訪ね、語り、喜び、泣いて笑った一ケ月。言葉で表すにはあまりに多くのことを体験したと思う。一人一人の胸に、人生において消し去ることの出来ない思い出が刻まれていることだろう。

搭乗時刻が迫って来た。惜別のムードは最高潮に達している。米国側40名がゆっくりと搭乗ゲートに姿を消して行く。「また会えるよな！」手を振り、拳をかかげて見送る日本側の誰もの目に涙が光っていた。

第43回ＪＡＳＣ（日米学生会議）は終了した。しかし、この別れの日を出発点としてそれぞれが新しい一歩を踏み出すのである。またいつの日か再会できることを信じて。

Never Say Good－Bye.　（野田雄輔）

II. 分 科 会

企業と発展途上社会
(Business and Developing Societies)

現代の社会を考察する際、企業の存在は決して無視することの出来ない大きなものである。多国籍企業の進出による環境破壊、現地の人々の生活形態の変化等は特にいわゆる発展途上国で問題となっている。しかし、先進国と言われる国々の社会も決して完成されたものではなく、まだまだ発展途上である。この分科会では発展途上の意味や日米両国が発展の為にするべき事等が話し合われた。実地研修では、様々な立場の人の考えを聞くことができ、貴重な体験であった。

<分科会討論>　　(発表順)

1. 第三世界の女性と多国籍企業
～世界規模での階級支配と搾取～

Ann Marie Mantz

社会学を専攻とするMantzは第三世界の女性がいかに多国籍企業の進出にあってその労働力を搾取されているかを論じた。又その背景にある「第三世界」という言葉の一般的定義が紹介され、「発展」とは何かという議論へと続いて言った。その中で、一国の全体的な成長の為には一部の犠牲も必要悪か否か。経済成長のひずみとしての環境破壊などといった被害については誰が責任を負うべきかといった様々な問題について討論した。

2. 「半導体産業における日米間の技術摩擦」
白石　史朗

左より、五所恵実子、野田雄輔、Ann Marie Mantz、Robert Pekkanen、
大島葉子、Jose Pascual、Jeniffer Abend、白石史朗

経済学を専攻する白石は半導体産業に見る日米関係について言及し、米国系半導体企業の巻き返しは現時点では不可能だという彼の結論を紹介した。米国企業の弱点としては、半導体メーカーの一種集中製作型である点や労働力のオートメーション化の代わりに労働賃金の安い海外に移転しがちな点が製作過程に関して挙げられた。又経営については短期的視野やそれに資金調達の問題が挙げられた。これらを踏まえて半導体産業における日米協力の可能性などが討論された。

3．「理想論でしかない国際的経営理念」

Jeniffer Abend

経営学を専攻するAbendは学校で取った授業を元に、現在の多国籍企業における国際的経営理念を具体的な例を用いて紹介し、国際的理念の必要性を説いた。米国の煙草メーカーは、国内での需要が激減し規制も厳しくなった為、海外市場へ目を向けている。特に規制の殆ど無い発展途上国の政府に圧力をかけても売りつける。国内では捨てるのが難しい有害廃棄物も、莫大な債務を抱える発展途上国に金を払って引き取ってもらっている。これらの例から、自国利益中心でない、地球的視野での理念を我々が持つ必要性を確認した。

4．「日本企業と環境問題」

野田　雄輔

経済学を専攻している野田は環境問題において日本企業がどんな努力を行っているかについて言及した。ここ数年日本企業の環境問題に対する態度は変わって来ており、安価な高品質製品の大量生産という経営戦略の中にもう1つ環境に有害でないという条件を付け始めている。リサイクルに積極的な企業も多い。我々は討論の中で、環境破壊に関するコストを考慮に入れなければこれからの企業の成長は難しいだろうという結論に至った。

5．「日本・ODAの再考」

大島　葉子

法学を専攻する大島は、構造的なODAの問題について論じた。援助額は世界第一位になったが会計年度内つまり1年で予算を使い切らなければならないことから起こる目的のない金のばらまき、財界と政界のODAによる癒着など解決すべき点は多い。ODAによる現地の人々の生活への被害についても言及された。討論ではアメリカのODAの現状も紹介され、これからの日米両国が世界に対して担う役割について様々な意見が交換された。

6．「タイとインドネシアにおける日本経済の影響」

Robert Pekkanen

東アジア研究を専攻とするPekkanenは、日本の経済的影響が強い東南アジア地域からタイとインドネシアを取り出し、それらへの日本の影響について言及した。援助面

では、教育や技術移転での援助を行うアメリカと異なり、社会資本の援助中心に日本は行うが、批難はあるにしても効果は認めるべきだとの意見を紹介した。貿易や投資の分野でも日本の存在は大変大きい。日本企業の進出により経済成長が促進されるのは認めるが、あまりに他国の企業に依存しすぎるのは問題ではないか－このジレンマが現地の人々の心に存在すると言う。自分がその立場であったらどう思うかという事を中心に討論が行われた。

7．「日米の相互依存とこれからの日米関係」

Jose Pascual

政治学を専攻するPascualは現在緊密である日米関係について論じた。経済大国としての日本はアメリカにとって頼もしいと同時に脅威的な存在である。Pascualは、経済関係が密になるほど両国の関係は向上するどころか悪化するという説について彼自身の解釈を述べた。それと同時にこれからの日米関係の課題を防衛面なども含めて紹介し、両国間に存在する政治的、文化的、社会的な誤解を解くことの重要性を強調した。討論は防衛から戦争に対する考え方へと広がってゆき、さらに教育制度での相異点についてまでも様々な意見が交換された。

8．「日本の外国人労働者問題」

五所　恵実子

社会学を専攻する五所は80年代後半から日本で顕著に増え続けている外国人労働者の問題を扱った。原因を２つに分け、外的要因として中東情勢が不安定な為戻ってきた出稼ぎ労働者が貧しい自国では職に就けないこと、又内的要因として日本の経済成長を挙げた。受け入れ国側の問題と同時に送り手国側の問題についても言及された。

＜実地研修＞

①　海外事業活動関連協議会

最初の実地研修では、日本企業が海外進出先で「良き企業市民」として受け入れられる為には何をするべきか、というコンセプトの下に発足した海外事業活動関連協議会についてお話を伺った。対米直接投資摩擦や進出先でのトラブル等に対し、企業が問題の理解を深め、解決に努める－その為の活動が日本において実施されているのを認識でき、又その活動の重要性を再確認した１日であった。

②　山谷

分科会を机上の空論では終わらせたくないということで、日雇い労働者が集まる地域である山谷を訪れ、山谷の地域活動に携わる方にお話を伺った。実際に行ってみると高齢の方が多いことに気が付く。労働者の平均年令は60歳前後であるそうだ。又予想に反して、外国人労働者は日本人に似たアジア系以外は殆どいない、ということである。山谷に住む人々の暮らしぶり、お互いに干渉しない、生活の在り方など外からでは決して解らないことを知ることができた。「経済構造の一部としてではく、労働者の問題として山谷について考えてほしい」という言葉が忘れられない。

③　一橋大学経済研究所客員教授

Harry T.Oshima

東京最後の実地研修は、長期にわたって東アジア、東南アジアの経済発展について実証研究に従事されたOshima教授を訪れた。投資を歓迎して受け入れた国

と受け入れなかった国での経済成長の違い、重工業から農業へと普通とは逆のパターンで移行した南アジアの政策過程の失敗点、と言った経済的見地からの様々なお話を伺った。又それのみでなく教育が必要とされる分野とされない分野や、宗教の相違点が経済成長に及ぼす影響等社会問題とも絡めた点についても伺え、多くの事を学んだ。

④ 鈴木牧場

牛肉自由化によって日本の畜産業はどのような影響を受けており、その打開策として何をしているのだろうか－このような疑問を持ちながら、我々は御夫婦で営んでいらっしゃる鈴木牧場を訪れた。鈴木氏の牧場ではアンガスという黒い牛を育てていらっしゃり、ホルモン剤投入等は一切行っていない、ということだった。これからの市場で生き延びていく為には、何か特徴を持つことが大切なのである。お話を伺った後、鈴木氏の所の牛肉をステーキでごちそうになったが、牛を見た後すぐに頂くというのは微妙な経験であった。

〈最期に〉

以上、当分科会は活動は多岐に渡っており大変実り多いものであった。激しい討論を繰り返しながら、一人一人が得たものは大きい。又実地研修では実施の際、様々な方にお世話になった。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。　　（大島　葉子）

我々と変容する社会

（Trends, Movements and Change）

我々は、永々たる時の流れの中で“今”という瞬間を積み重ねながら、“未来”に向けて生きている。この時の流れを歴史と呼び、便宜上“過去”“現在”“未来”と区別する。“過去”からの連続としての“現在”の中で起こる様々な変化を見つめ直すことは、変化を生み出す我々を見つめ直すことであり、我々の“未来”に向けた生き方へ多くの示唆を与えるのではないだろうか。

＜分科会討論＞　　（発表順）

1．「日米貿易摩擦－文化的背景とその変容」

Heather Conahan

外交政策を学んだConahan は日米関係の象徴とも言える貿易摩擦を分析することに努めた。彼女の主張として

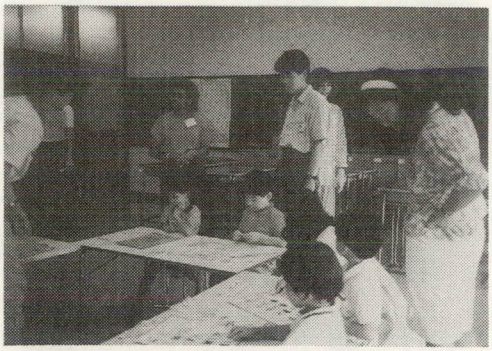
① アメリカは日本人のメンタリティを理解せず、内政干渉ともとれる行動が見受けられる。

② アメリカは交渉しているのではなく、不平を言っているだけで工業製品１つとっても日本人の志向、条件に合わせた長期的視野での取り組みが不足している、などの点が挙げられた。

2．「日本における帰国子女問題」

Janet Chance

大学院で教育学を専攻し、日本の私立中学で２年間英語を教えた自身の経験を基に、日本で帰国子女が直面する問題についての分析を行った。後のディスカッションでは異なるものをよしとしない日本の文化的土壌に焦点が移り、その象徴としての入試制度の在り方に議論が集中した。異なる背景



を持つ者がその特性を生かしていくことと、彼（女）らを優遇することによって起こる反発。異質性と同質性のバランスをとることの難しさを実感した。

3．「時代の顔－マドンナ」

Laura Fan

今世紀のスーパースターと言える“マドンナ”。メディアと彼女との関係からフェミニズムの視点から見たマドンナへと話が広がっていった。彼女の挑発的とも言える表現方法、つまり、自分の肉体を武器にしたやり方を魅力と捉える者と単なる我儘と捉える者に分れた。分かれ目となるポイントが彼女が自分の「性」を売り物にしているかどうかと考える点にあったのは興味深かった。

4．「映画に見る異人種間結婚への視点」

MiCh Jones

黒人と他人種との結婚に対する社会の見方には、多人種社会のアメリカにおいてさえもなお、複雑なものがある。映画「Jungle Fever」を例に黒人と白人との結婚がいかに多くの偏見と差別を受けているかという発表が行われた。Jones自身黒人であるが、黒人の少ない環境で育ったせいか黒人という意識を余りもったことがなく、むしろ避けようとした傾向があるという発言には人種偏見・差別が人間に与える影響力の大きさを見た気がした。

5．「日本における出生率低下現象」

山下　真

分科会唯一の男性メンバーである山下は、日本における出世率低下現象の背景を北欧等の例をひきながら説明を加えた。討論において、彼の「女性は子供を生み育てることの素晴らしさを忘れている」という意見が他女性メンバーを刺激し活発な展開となった。女性側から女性を「生む性」として強調する余り、女性の自己犠牲を当然視する背景が生まれるのであり、女性にも「生む性」以外の多くの可能性と能力があること、その為には男性側からの協力が不可欠であることが意見として出された。

6．「新人類を探る」

森村　王英

“新人類”の分析を３視点から行い、現在における「若者」の以前の若者とは異なる特質を確認した。討論において、個人のレベルで顧みると親（の世代）とのギャップや全くの断絶感を感じつつも、明らかに受け継いだと言わざるを得ない部分、共通の部分の存在もかなりあるという指摘は興味深かった。親の価値観と自分の価値観との違いをプレッシャーとして受けとめるのかどうかということがポイントであろう。

7．「大海を越えた日本女性達」

水野　直子

日本における国際結婚の歴史的考察を行った。アメリカへの移民が始まった明治期、

“戦争花嫁”の排出された太平洋戦争後の時代を経て“結婚難”と言われる現代。結婚という出来事の中にはその国の文化、時代の流れが色濃く反映されると主張。討論では現代“花嫁不足”と言われる日本のアジアからの花嫁を例としてその国の経済力と国際結婚の関連性、国際結婚が進んだ場合の社会への影響力などが話されたが、現在の変化の背景には日本女性の結婚観の変化と旧態然とした男性の結婚観のズレがあるのではないかという意見が出された。

8．「ＯＬ、キャリア・アップ留学」

上窪　一世

日本でＯＬと呼ばれている彼女達がキャリア・アップ留学することの背景を探った。男性中心社会への反発を動機として起こっている筈の彼女達の行動が、結果的には一度見切りをつけた男性社会へより一層自分を適応させているのではないかという分析であった。自己能力を伸ばしていきたいという個人としての欲求が女性全体の地位向上、新しいより“better”な人間社会への契機に繋がらないところに問題があるという意見が出た。

＜実地研修＞

①　株式会社　博報堂

業界のリーディング・カンパニーである博報堂を訪問し、国際的分脈における広告の意義や影響力などについて伺った。講義の中で“local”な場での成否が国際的な場での成否と繋がるものであり、localnessの重要性を強調した点は新鮮であった。最後に各国のＣＭ観賞を行ったが、その国の倫理感まで含めた文化が色濃く根底に流れていることを実感した。

②　原宿散策

体験的実地研修を行いたいという目的の下、若者の町原宿へ足を踏み入れた。立ち並ぶ様々な店。群がる中高生達。同じ物でもタレントの経営する店で売られている高い物に人気が集まり、異常とも思える程であった。原宿の流れは早く、今日の“はやり”も明日には見向きもされなくなる。そのような目まぐるしさとは対象的に静謐な雰囲気の明治神宮が隣合わせにあり、この「静と動」のコントラストが原宿という街の魅力ある変化を生み出しているのではないかという結論に達した。

③　聖徳学園

日本の教育方法においても様々な変化が見られる。私達が伺った聖徳学園は東京で唯一英才教育を行っている学校であり、夏休み中の３才から５才児の為のセミナーを見学させて頂いた。特徴として、この学園は能力のある子供を更に伸ばしていく為の学校であり、多面的・総合的に取り組んでいる点がある。見学の後、園田主事に話を伺ったが、アメリカのシステムをとりいれているということだった。アメリカが日本のシステムを見直しているのと逆の動きにあり、教育システムにおける相互交流が大きな変化として見られるようである。

④　株式会社　ＯＭＭＧ　札幌支社

参加者が大きな期待をもって臨んだ研修であった。事業部長の山川氏より設立の経緯、特徴などを伺った後、現在の日本における結婚の傾向などについて伺った。結婚難と言われる背景には女性が社

左より、森村王英、水野直子、MiCh Jones、Heather Conahan、上窪一世、
山下　真、Laura Fan、　Janet Chance

会的に進出し、選ばれる立場から選ぶ立場へと変わり、自分の価値観を持つようになったこと。そのような女性の意識変化とは裏腹にいつまでも結婚相手に母親役を求める男性とのズレがあるということであった。最後に氏から「女性の方、奢ること勿れ。男性の方、もっと自分を磨いて下さい。」という言葉を頂戴した。

〈最期に〉

間口の広いテーマだっただけに多少、全体の議論が拡散しがちであり、まとめることが難しい分科会であった。しかし、どの議論でも単なる遠くの出来事としてではなく、自分達の問題として捉え議論する姿勢が見られ、討論そのものは常に充実したものであった。この場での議論や研修先で得たものが、各人が今後生きていく上で多くの示唆を与えれば幸いである。最後に実地研修を快く引き受けて下さった各研修先の皆様、研修実現の為協力してくださった方々へ感謝申し上げます。そして、頼りないコーディネーターの私を助けて色々準備をしてくれた日本側参加者の皆さん、分科会を盛り上げてくれた日米双方の参加者の皆さん、ありがとう。最後に１年間私を支え、会議中もそのウイットを十分発揮しながら最高の相棒であったMiChに心から“ありがとう”。　　（上窪　一世）

文化と宗教
(Religion and Culture)

当分科会では、日米両国において、キリスト教・仏教・儒教等、様々な宗教的システムが現代社会・文化に対しどのような影響を与えているのか、という点を中心に、以下の四つのテーマに基づき討論・実地研修を行った。

＜A＞　文化・宗教の意味するものとは何か、
　　又宗教的であるとはどういうことか？

＜B＞　文化的・宗教的価値体系と経済発展

の関係とは何か？

＜C＞　現代社会における文化的・宗教的システムの占める位置とは何か？

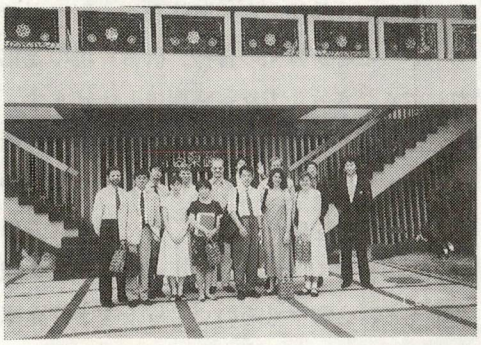
＜D＞　異なる宗教を持つ人間同志がいかに理解しあえるか？

＜分科会討論＞　（発表順）

1．「日本における新興宗教」

浅野　豊美

浅野はポストモダンと呼ばれる日本社会において何故このように新興宗教が盛んなのか、という疑問から、その構造的・歴史的要因について言及した。日本の伝統的文化・宗教にみられる神話体系・先祖崇拝・アニミズムに関し説明したうえで、近代以降の新興宗教の歴史的変遷を四期に分類し、米国との比較を含めつつ、その問題点を社会における共同体の崩壊と現代人のアイデンティティの模索という観点から討論を行った。



2．「マドンナ・宗教・神・カトリック教会」

Kei Koizumi

Koizumiは、ポップ・アーティストであるマドンナに見られるカトリシズムの影響を彼女のビデオの中に追いながら、彼女の拒絶するところのカトリック教会における男性優位・白人優位・家父長的構造について言及した。カトリック教会の持つそうした教条的立場を批判しつつもなお自身カトリック教徒として宗教の自分自身における役割、即ち何が“善”であり何が“悪”であるかがそれによって理解できるであろうこと、を強調した。

3．「国家神道と天皇制」

天野　環

天野はナショナリズムとしての宗教という観点から、近代天皇制の宗教的基礎・国家神道の形成及び崩壊過程について言及しつつ、敗戦後も解体されず現代社会に存続している天皇制支配システムについて批判を加えた。

4．「ネイティヴ・アメリカンの宗教」

Sona Abhyankar

Abhyankar はネイティヴ・アメリカンの宗教観を、その精神性、自然神との一体感といった独特の観念的生活から言及し、先住民としての彼らの宗教観に我々の学ぶべきものの多くがあることを強調した。又彼らの伝統・思想がアメリカにおける他の主な宗教（特にキリスト教布教活動の問題）と対照をなしており、その精神的生活と聖なる土地との結び付きを踏まえつつ、社会における文化・宗教の果たす役割について討論を行った。

5．「日本におけるキリスト教」

Paige Blair

Blairは日本におけるキリスト教の受容と変容に関し、その過程における、西洋のものであるところのキリスト教と日本の文化・社会との葛藤、特にキリスト教の個人主義と儒教における社会的調和といった思

左より、浅野豊美、河崎秀陽、Gilbert Shaw、 高橋幸世、 Kei Koizumi 、
Paige Blair 、 天野　環、Sona Abhyankar

想の違いを挙げつつ言及した。又罪の社会としてのアメリカ社会と恥の社会としての日本社会という社会論を踏まえつつ、キリスト教の持つ多元的な側面と、異文化／社会としての日本への受容、宗教の持つ意味等について討論した。

6．「現代アメリカにおけるセクシュアリティ」

Gilbert Shaw

Shawはアメリカのプロテスタント諸教派内部（特に長老教会）におけるセクシュアリティに関する問題を取り上げ、主としてホモセクシュアリティの神学的論争について言及した。聖書にはホモセクシュアリティに関する記述は見当たらないことや、かつての奴隷制支配を聖書から正当化していた教会の存在を踏まえ、フェミニストの神学批判を援用しつつ、教条的な宗教の在り方の危険性について討論を行った。

7．「禅と茶の湯」

高橋　幸世

高橋は東京にて行った茶の湯の実地研修を踏まえ、茶室独特の空間・環境やその実際の作法を通じた茶の湯における非言語的・調和的コミュニケーションの在り方と禅の思想との関わりについて言及した。禅の歴史的背景を含め公案等を紹介し、禅が言語的コミュニケーションや書かれた教えに従うものではなく、実在そのものを見つめることに重点を置くものであり、それ故自然との調和を必然的に求めるものであることを強調した。

8．「臓器移植と宗教」

河崎　秀陽

自身医学生である河崎は、日本の医療界における臓器移植（特に脳死）の問題を取り上げ、日本における移植取扱いの困難さについて、その宗教的側面を論じた。こうした問題には各々の持つ倫理性・精神性・科学の発展と宗教との関連など様々な要因

の絡むものであるが、アメリカの現状と比較しつつ、脳死は人の死かといった議論が為され、そうした死を考えることは即ち生を考えることにつながり、人間意識の超越・調和が強調された。

＜実地研修＞

① イグナチオ教会・デベラ神父

上智大学のマスコミ社会教授でもあるデベラ神父を教会に訪ね、日本におけるキリスト教の変遷についての講義を受け討論を行った。日本人の人口の１％以下がクリスチャンとされるものの実際は４％に及ぶであろうことや、教会で結婚式を挙げる日本人は10％にもなるといった統計上の数字を挙げつつ、特に明治近代化以降の宣教師による布教活動との関連においてのキリスト教の受容・変容・これからの展望といった議論がなされた。

② 真如苑

立川に総本部のある仏教系教団・真如苑を訪ね、教団紹介ビデオによりその歴史・役割・現状等についての講義を受けた。仏教主流派との相違点やその独特の修行方法について説明を受けた後、寺院内部・宝物殿を見学し、又アメリカ人信者との討論も行った。質疑応答では何故短時間でこのように多数の信者を獲得し、海外に17ものブランチを持つに至ったのか議論され、伝統的宗教・他仏教系教団との関係についても言及された。

③ 財団法人　大日本茶道学会・三徳庵

高橋が茶の湯を習っている田中仙道氏を三徳庵・学会本部教場に訪ね、伝統文化としての茶の湯と禅との関係について研修を行った。まず茶の湯の歴史的・文化的背景に関してのスライド説明を受けた後、普段は見ることの難しい茶室・茶庭見学・手水・席入り体験を行い、実際に濃茶・薄茶と点前を見学・体験させて頂いた。人間と動物との相違概念において、西欧伝統では理性であるのに対し、東洋伝統では礼に従った作法であることが茶の湯を通じて強調された。

④ 文化庁宗務課

日本の宗教全般に関する担当行政機関である宗務課を訪ね、日本の宗教行政に関しての講義・質疑応答を行った。行政上の分類によれば、日本の宗教は伝統的神道・仏教・キリスト教・諸教（新宗教・その他）と区分され、宗教自体の概念規定は存在しないものの、宗教法人令が大きな役割を担っている。討論においては、現代日本における新興宗教の隆盛をふまえ、新しい日本文化の創造にこうした宗教がどこまで関われるかが議論された。

⑤ 乃木神社

東京滞在地のアジア会館近くの乃木神社をオプショナル・ツアーとして訪ね、実際に神社内部を見学させて頂いた。たまたま神社神道様式に則った結婚式が行われており、日本人参加者でさえ普段余り触れることのないこうした儀式に接することができた。

⑥ 北海道クリスチャンセンター・バーカー神父

戦後間もなく日本で日米学生会議に参

加され、以来数十年に渡って北海道で活動されているバーカー神父を訪ね、自らの個人史を軸に北海道におけるキリスト教の受容・変容についての講義を受け、討論を行った。日本におけるキリスト教を考察する上でのポイントとして、神という概念・自我の確立・共同体・罪などにおける日本独特の概念を指摘され、又障害者運動・平和運動・反差別運動等への取り組みとキリスト教との関連について議論を行った。

＜最期に＞

以上の全分科会討論・実地研修を踏まえ総括討論を行った。キリスト教における受容・変容については様々な側面から議論を重ねたものの意見は各参加者によって異なった。主に強調されたのは異宗教間・宗教伝統内部・文化宗教間におけるコミュニケーションの重要性と各々の多様性の認識であり、長期的・短期的なモノの見方が要求されることが明らかになった。　　（天野　環）

現代社会と法制度
(Contemporary Legal Issues)

現代の法及びその運用は、日米両国において絶えず市民からの批判に晒され、改革の対象として議論の的となっている。「法」は人間の生から死まで深い関わりを持ち、様々な影響を及ぼす社会の重要な要素である。無味乾燥と言われるいわゆる「法」に参加者の様々な異なった視点からダイナミックにアプローチしたのが当分科会である。

＜分科会討論＞　　（発表順）

1．「海洋資源の責任ある有効利用とその管理」

Zubin Gidwani

漁業の将来は、米国と日本の海洋調査における協力体制に依存していると主張する国際学専攻のGidwaniは、昨年42回会議の貿易シンポジウム・パネリストのJay Hastings氏とコンタクトを取り日本の水産庁をはじめとして綿密なリサーチを行い、データの裏付けと共に完成した論文を最初の実地研修の場である水産庁で発表した。その中で流し網漁の功罪を述べた上で、いわゆる国際連合の流し網漁の禁止決議案をひとつのケーススタディとして今後の海洋資源有効利用の施策に生かすことを提案した。

2．「日本国憲法第九条の評価と考察」

大橋　映子

日本国憲法第九条は、戦争放棄と戦力の保持を禁止しているが、この規定は第二次世界大戦の反省に基づき他の諸外国に先駆けて採用されたものであると主張する大橋は、この第九条の崇高な目的が、時の政府によって徐々に侵されていく過程を日米安全保障条約をも引きながら述べた。そして第九条を護ることと国際貢献をすることで日本は世界において一人前と呼べるのではとまとめた。

3．「湾岸戦争への対応と日本国憲法の再検討」

江藤　一

法律を専攻している江藤は、湾岸戦争の海上自衛隊による機雷処理に見られた政府

の動きをケーススタディとして日本国憲法第九条の制定された経緯、自衛隊発足の歴史、日米安保条約、自衛隊の運用について触れながら法が社会と乖離してしまっては意味を成さないので、社会の現状との調和を図るべく変更も辞さない確固たる姿勢が不可欠であると主張した。

4．「外国人労働者問題への法的アプローチ」
比企野慶子

政治学専攻の比企野は、いわゆる外国人労働者問題に、改正された入国管理法とその問題点、外国人人権保障を規定した国際法、そして労働法とその問題点という切り口で法的アプローチをした。そして日本に定住している外国人労働者の合法化が必要であるとし、また世界的人口移動は不可避の流れである現在、法が率先して人権侵害の恐れのある外国人労働者の人権保障に動くことが望まれるとした。

5．「東京ゴミ事情－その現状と法制度」
後藤　忠寛

現在、世界的に問題になっているゴミ処理問題、特にその中でも深刻な東京のゴミ問題を取り上げた国際経済専攻の後藤は、いわゆる『廃棄物処理法』とその問題点、特にゴミの減量をするという視点の欠落を指摘し、これらの点に関して早急な改善が望まれていると述べた。もちろん米国でも深刻な問題であるこのトピックについて資源のリサイクリングを含めて活発なディスカッションがあった。

6．「日米法文化再考　The Management Modelと行政指導」
Kevin Kim

東アジア学専攻のKimは、日本の訴訟事件は少ないと良く言われるが、1934年の訴訟件数は、1974年の2.2倍にも達していた事実を指摘した上で、交通事故訴訟をケーススタディとして米国司法府の独立に対し

左より、Eric Matheson、江藤　一、Zubin Gidwani、大橋映子、Kevin Kim、比企野慶子、Anastasia Gregoire、後藤忠寛

て日本の司法府は国会に予算でコントロールされる上に、法務省に司法試験を使って法曹の数を制限され、独立が脅かされている状況にあると述べた。加えて日本の官僚達が、行政指導に典型的に見られる訴訟以外の解決法の方がより、効率が良いと市民に思わせるようにしてきた点を挙げて、日米における相違を指摘した。

7．「日米雇用機会均等法の現状」

Anastasia Gregoire

国内・国外からの圧力によって立法され、さらに社会的現状にマッチした快適なコミュニティ作りを目指している日米両国であるが果たしてこのような方法で社会の価値基準や習慣を変えることができるかという問いに対して日米の雇用機会均等法をケーススタディとして多数意見、少数意見、法律の運用に当たっての強制力の比較、この二法に対してなされる批判、そして社会改革に影響を与える法に対する文化的姿勢について言及し、活発な議論が展開された。

8．「発展途上国累積債務問題における日米の役割」

Eric Matheson

法律を専攻しているMathesonは、一触即発の危険をはらんでいる発展途上国における対外債務問題をトピックとして取り上げた。対外債務は、すでに金利を払えない財政事情の国も出てきており、事態は極めて深刻であり、これらの国々が最終的に支払い停止した場合、世界経済は破綻を来すだろうと報告した。結論として日米両国が協力して発展途上国に債務返済の打開策の提案を含めたリーダーシップの発揮が望まれていることを述べた。

＜実地研修＞

① 水産庁

7月25日午後：この日は、水産庁を訪問して海洋漁業部国際課漁業監督指導官である森下丈二氏のお話をZubin Gidwaniの論文発表の後に彼の発表の中で不

明な点についてのコメントを含めて伺った。会議が始まる前後から焦点の流し網漁についてマスメディアでも取り上げられるようになり関心は少しずつではあるが高まってきていた時期であった。森下氏によれば、環境保護団体の主張しているような流し網漁による海洋生物の混穫は極めて少なく、生態系に対する影響もリサーチの結果に依れば許容範囲である。但し、海洋資源のリサーチには数の推定が絡んでくるのでなるべく多くのデータ収集を行い地球に優しい漁業という国際的認識を得る必要があるとのことであった。

② 自衛隊市ヶ谷駐屯地

7月27日午前：この日は大橋と江藤の論文発表に関連して自衛隊市ヶ谷駐屯地を訪問し、駐屯地見学と自衛官の方々との質疑応答があった。駐屯地見学では、防衛庁陸上幕僚部広報室三等陸佐である

藤崎護氏、駐屯地広報班長である衛藤鐵男氏の案内で、旧軍の地下防空壕、極東軍事裁判所跡地や資料館を見学した。特に防空壕見学では戦争の愚かしさと狂気を垣間見たような気がする。質疑応答では、藤崎氏と防衛庁長官官房広報課三等陸佐である丹羽忠志氏が担当してくださった。丁度、海上自衛隊の機雷除去作業から日が浅く、ＰＫＯ活動への自衛隊の参加がとりざたされていた時期なので、質問もその辺に集中した。また自衛隊のご好意で昼食を隊員食堂で御馳走になった。昼食後も自衛隊と憲法第九条との兼ね合いや、自衛隊の将来像について活発な質疑応答があった。宿舎への帰途も議論は続いたのである。

③　東京入国管理局

７月31日午前：「見えない隣人と私達」分科会との合同実地研修として大手町の東京入国管理局に法務省入国管理局法務事務官である佐々木聖子氏を訪問してお話を伺った。最初に入国管理局の職員の方と佐々木氏の案内で入国管理局事務手続を見学した。その後、佐々木氏による入国管理局の組織説明と先に改正された入国管理法の説明が行われた。佐々木氏は、外国人労働者の送り出し国の実状を知ろうと二年間休職され、アジア各地を歩かれた経験があり、その集大成の著書がある方である。氏は個人的見解として断られた上で単純労働者受入れには賛成である旨述べられた。それには、単純労働者の送り出し国との一体となった総合プランニングが必要であると強調された。その後、活発な質疑応答が改正入国管理法について主になされた。

＜最後に＞

気が付いてみれば、実地研修全てが東京であり、しかも官公庁であった。少々バランスを欠いたきらいがある。しかし、分科会後半にじっくり、腰を据えて論文発表できたことは分科会充実には有効だったのではないかと思う。各々の論文の議題が、バラエティーに富んでいたのは法の様々な要素を考える上で不可欠だったと言えよう。この分科会運営に当たって御協力頂いた関係者の方々、実地研修のプランニングを含めて快く手伝ってくれた分科会メンバー、そしてこの分科会を一年間一緒にコーディネートしてきたMathesonに御礼申し上げたい。　　（江藤　一）

科学技術と社会
（Science and Society）

この分科会は今日の諸問題が科学的発見、あるいは技術開発などと深い関わりがあるという現状に鑑み、社会と科学技術の関わりや国際的諸問題を科学技術という視点から考えることを目的とした。分科会討論は各参加学生の研究発表を土台としつつ、自由討論の形で行われたが、やはり関心である環境問題や

開発と環境、第三世界と先進国の関係のあり方などの諸問題に常に帰結していったことが印象的だった。

以下私達の討論と実地研修をふりかえってみることにする。

<分科会討論>　　(発表順)

1．「強制的エイズ検査に関する一考察」

Anita Everard

近年、エイズはますます大きな社会問題となってきている。エイズの蔓延を防ぐ為の、ハイリスク・グループやローリスク・グループ（同性愛者、麻薬常習者、血友病患者など感染の可能性のある者）に対する強制的エイズ検査が問題となっている。強制検査によるエイズのコントロールが期待されるが、個人のプライバシーの侵害も問題視されている。発表者のEverard は、強制的エイズ検査にしばしば行き過ぎがあること、その為の社会的影響の大きさなどからその効果を疑問視し、むしろ従来通り自由意思に基づく検査を推進していくべきだとする。日本側参加者に比べアメリカ側参加者のエイズに対する高い問題意識に、両国の事情の違いが現われた。医師に対する強制検査の是非、両国の性教育の違い、さらには男女交際、結婚観の違いまで幅広く討論された。

2．「公害と“権力”－日本の公害運動の“知識”と“価値”－」

Robert Efird

発表者のEfirdは、日本の四大公害を取り上げ、その公害運動の経過分析から、本来客観的とされる科学的「事実」は、「事実」を捉える“知識”や「事実」の解釈を左右する“価値”、そしてそれらをコントロールする“権力”によって主観的なものとなっていると主張する。最近の環境汚染に対する運動の難航も、四大公害の時のような運動に対する世論の支持が得られない為であり、政府（“権力”）による“知識”のコントロールの巧みさの現れだとしている。一方で、昨今の政治不信や環境問題への関心の高まりから、新たな環境運動や政治意識の在り方の可能性をも論じている。発表後の討論では、主に環境汚染に対して日本ではどう考えているか、我々はどのような行動をとるべきか等が議題に上った。

3．「日米におる科学技術の管理」

Cynthia Staehle

今日の国際的諸問題、特に開発途上国の発展という問題に対処するに際して、日米両国の役割は大きい。両国間の共同研究や相互的技術移転を促進し、ひいては国際的な技術移転をもたらすことが、途上国発展の一つの鍵になるとStaehle は主張する。

4．「技術移転と多国籍企業」

奥井　暁子

開発途上国の発展にとって技術進歩は重要な要素である。先進諸国の投資や多国籍企業の進出のみでは、途上国にとって発展につながる工業化は望めず、むしろ先進国に従属的な、国際競争力を持たない産業構造の形成を助長する。本格的な技術移転の為には途上国政府自らの産業育成政策が必要である。発表者である奥井は、ブラジルの外国資本の国内化の過程を取り上げ、産業界への政府介入の効果を主張する。

5．「日米の科学技術における相互依存関係」

Lisa Chow

アメリカに比べて日本の基礎研究の予算の小ささが問題となっているが、Chowも将来の科学的、技術的進歩・向上のためには、両国の間に対等で協力的な相互依存関係が築かれることが重要であるとする。日本は従来アメリカの基礎研究の成果を応用する技術開発に長け、飛躍的な経済発展を遂げた。今後両国が相互に基礎研究の成果を享受し、応用していけばさらなる科学技術の発展も可能であるとしている。

Staehle、奥井、Chowの発表の後、技術移転と南北問題、先進国の積極的投資の功罪などについて、総合的な討論が活発に行なわれた。

6．「熱帯雨林破壊と日本」

松本　正道

今日世界の熱帯雨林の破壊は著しいものがある。特に東南アジア地域の破壊問題は日本が深く関わっているだけに、もっと深く認識されるべきである。開発途上国の多くは経済的困難に直面する中、人口増加や政治腐敗などの問題を抱えている。自国の経済発展の為に資源である木材の輸出を促進しているのは、先進国よりもむしろ途上国自身であることにも目を向ける必要があると松本は主張する。先進国の国民としてまず何をなすべきかが盛んに議論された。

7．「核エネルギーの未来」

大前　拓也

日本のエネルギー消費量と資源小国という現実を考えれば、原子力発電の有効性は非常に高いと大前は分析する。原子力発電の安全性が問題視されるが、技術的には信頼し得るレベルに達しており、原子力発電の普及のためには国民の広い理解が最大の課題である。特に今後開発が期待される核融合エネルギーの応用は将来のエネルギーとして大いに期待できる。事情に詳しい科学者などが率先して世論に働きかけることで、核エネルギーへの理解を深めることが重要であると主張する。エネルギー利用の問題から科学の進歩はどこまで必要とされ、許容されるか等の根源的討論も行なわれた。

8．「日本における『脳死』論争」

宍戸　由起子

日本において「脳死」を死と判定することの是非が取り沙汰されるのは、宍戸の分析によれば医学的な問題より日本の文化や価値観に根ざすところが大きい。即ち欧米に比べ、理論的思考が一般化しておらず、かつ古来から死者の魂を信仰するなどの不死の考え方があることが、今日の「脳死」問題に対する世論に影響しているとする。宍戸は「脳死」は脳全体、および脳幹の機能停止状態を指し、植物人間のような状態はそれに当らないと考えているが、異なる学説も多く、医学的にも「脳死」の定義が定まっていない。このような状況で、「脳死」を死と判断する動きがなし崩し的に進むことは危険であり、好ましくないとしている。討論ではインフォームド・コンセントなどの問題も話された。

＜実地研修＞

①　日立中央研究所（東京）

日本の先端技術を見学するという趣旨で、コンピューター・グラフィックの実演や、半導体や超伝導技術の開発、研究

に関する展示を見学する。研究方針等についての解説も合わせて受けることができ、興味深かった。

② 衆議院議員 浜田卓二郎氏（東京：「歴史と社会制度」分科会と合同）

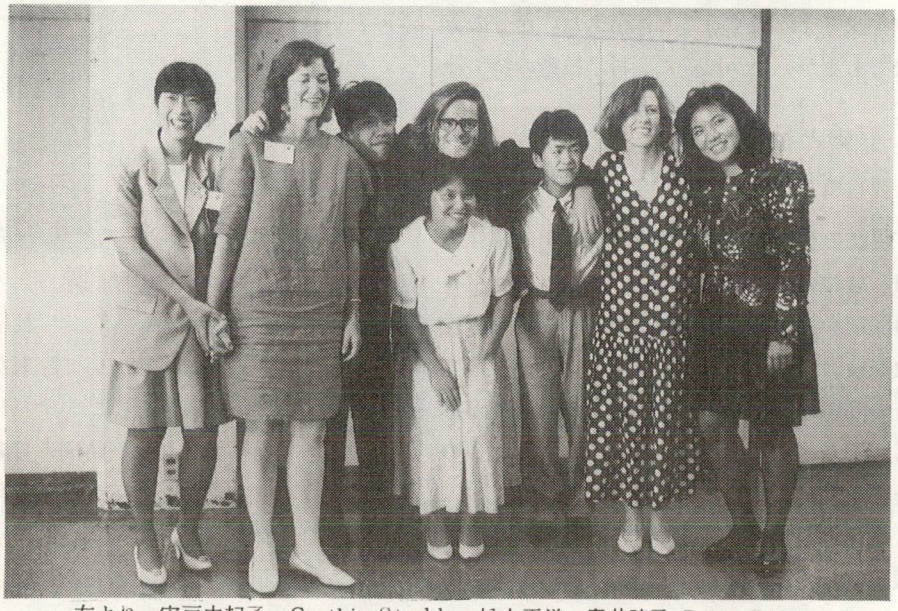
浜田氏の意見によれば、今後の日米関係と国際社会における両国の役割の重要性を改めて認識し、日本が積極的に国際社会に働きかけていくことが今後の課題である。内政については国民一人一人が政治家や政府に関心を持ち、積極的に働きかけていく、相互作用の重要性を強調された。憲法九条と自衛隊に関する質問には時期的に改正は難しいとし、「拡大解釈」の立場が現実的であるとした。また外国人労働者問題についての質問には、技術移転の立場から考えて、段階的な「条件付き受け入れ」支持という見解を示された。

③ 国立病院医療センター内エイズ医療情報センター 桜井 賢貴先生（東京）

スライドを用いて、日本と世界のエイズ感染の現状と対策について詳しく解説して頂いた。日本の感染経路も感染者数も様々であることなど、日本の現状は1980年頃のアメリカや1983年頃のフランスの状態であり、今こそ徹底したエイズ対策を取らねば欧米並に日本でも感染者が激増するという予測。厚生省やエイズ対策の為の諸団体の活動なども紹介された。日本のエイズの現状についてよく知られていないこともあり、活発な質問がなされた。

④ 北海道大学医学部第二病理教室 長嶋 敏郎先生（北海道）

初めに大学病院の医療機器や設備の見学をさせて頂いた。コンピューター等の最新設備の完備に驚くとともに、廊下に溢れる資料棚に日本の基礎研究機関であ



左より、宍戸由起子、Cynthia Staehle、松本正道、奥井暁子、Rober Efird、大前拓也、 Anita Everand、 Lisa Chow

る大学への予算配分の問題点を垣間見る思いだった。その後長嶋先生の研究室において、日本の癌研究の現状、医療事情について詳しく解説して頂いた。エイズやその他のウイルスの研究についても、先生ご自身の豊富な経験談を交えながら分かりやすく日本と世界の現状を話してくださった。日本で死因の筆頭に挙げられる癌に対する研究や医療体制にはまだまだ多くの改善の余地があることを改めて知った。質疑応答の際にはこれまでの討議の中で出てきたインフォームド・コンセントの問題やホスピスの是非、エイズ研究の現状などについて活発な質問がなされた。終始和やかな雰囲気の中で、コーヒーの香に包まれた討論だった。

＜最後に＞

必ずしも理科系の学生ばかりではなかったため、専門的な詳しい討論という点において限界があったものの、科学技術と社会の接点の多様さを認識することは出来た。自分の専攻であるかいなか以前に、科学技術の持つ社会的役割や、その応用のされ方を私達一人一人がもっと深く考える必要がある。結局は人間が開発し利用するという、人間の行動の中にある以上、個々の認識がなくてはより良い技術進歩も科学も飛躍的発達も、そしてそれらを享受することも成功しないだろう。更により根源的な問い掛けとして、私達は科学技術の発達をどこまで望むかということも今後考えていかなければならない。それが延いてはこれからの私達の生き方、即ち人類の在り方を模索することにつながると思われる。今回この分科会を通じて日米両国の参加者一人一人に、「科学技術と社会」についての新しい問題点や視点との「出会い」、討論や実地研修を通じての多様な意見との「出会い」があったと思う。今後各々がその中での自分の役割や在り方を「模索」していくことで、それぞれが「地球意識の形成に向けて」一層活躍していくことを期待する。最後に、今回の分科会の成功を導いて下さった、多くの方々のご協力に心からの感謝を捧げ、報告を終わりたい。

（奥井　暁子）

歴史と社会制度
(History and Social Systems)

現在の社会は、過去の様々な歴史的事件の積み重ねの上に成立している。我々は、現在の問題を論ずるにあたり、現在起きている現象を検討するだけでなく、過去にさか上ってその問題の歴史的背景を捉えていく必要がある。そうすることによって始めて、お互いの社会を理解し合えるのではなかろうか。

当分科会では、以上のような認識のもとに議論が行なわれた。

＜分科会討論＞　（発表順）

1．「日本における過労死問題」

長尾　あや

長尾は、近年日本において深刻な問題となっている、「過労死」について発表した。日本の社会においては、時間外労働をすることは当然、常識となっており、利益優先の社会全体の構造を変えていかなければならないと指摘した。そのためには、働く人一人一人の意識改革が重要であることで意

見が一致し、またアメリカ人の労働観との対比もなされた。

2．「日本憲法第九条の制定過程」

市来　圭

市来は日本国憲法第九条の意味することを歴史的経緯をふまえて分析し、湾岸戦争において日本がとるべき対応について発表した。その中で、平和主義思想が世界的潮流となっていると指摘し、戦争が起こってから何をするのかというよりも、戦争を未然に防ぐための国際的システムをどのように確立していくかが重要であると説いた。

3．「日本外交の変遷－中東情勢への対応－」

Yvonne Galaxidas

Galaxidasは、日本外交の変遷について中東を中心に考察し、日本の変化を軍国主義→破壊→経済優先主義と捉えた。1973年までは日本は国内問題にしか関心を示さなかったが、オイルショックにおいて「たてまえ」と「本音」を使い分けた外交を展開するようになり、その後は対米追随外交が中心となった。彼女は、今後日本は真の「外交」を確立し、世界に貢献していかなくてはならないと主張した。

4．「中東における日本の安全保障政策」

Stanford Lin

Linは日本の安全保障問題について発表した。彼は日本経済の中東への依存が大きいことを指摘し、必然的に八方美人的態度をとらされており、日本はいわば中東に人質を取られているようなものだとした。日本としてはパレスチナ問題等の中東の不安定要因を除去していく努力や、宗教についてもっとよく理解する必要があるといった意見が出された。

5．「社会を形成する価値について」

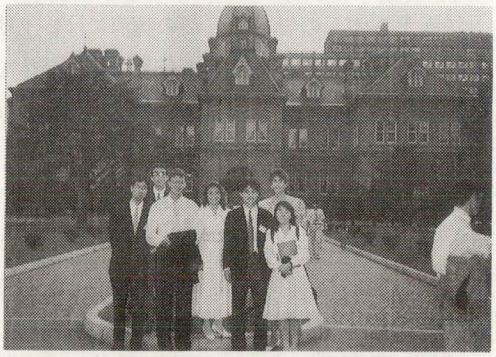
Brad Smith

Smithは現代社会を支えるべき価値体系について発表した。そして①プライバシー②生活の質の向上、③家族の重要性の３つがこれからの社会を支えていく価値体系であるとした。特に、「生活の質」とは何なのかについて深く考えてみる必要があると主張し、エコロジーの問題、財産の問題、人とのつながりの問題等を総合的に検討する必要があるとした。

6．「日本の近代化を支えたもの」

岸本　肇

岸本は日本の近代化の発展段階について発表した。日本の近代化の背景として、江戸時代の重要性を説き、また地理的、歴史的に見て非常に幸運な状況にあったとした。



日本の急速な近代化の背景と過程を分析してみることは、発展途上国がよりよく発展していくための示唆を与えてくれるのではないか。特に教育の普及は重要である。

7．「東京問題－一極集中の弊害－」

左より、武藤　康、Jennifer Amyx、Yvonne Galaxidas、岸本　肇、
長尾あや、Brad Smith、Stanford Lin、市来　圭

武藤　康

武藤はこれから日本が取り組まなければならない問題として、いわゆる「東京問題」を取り上げた。その中心として地価の急騰が上げられるが、それは国内問題としての生活水準の低下にとどまらず国際摩擦をももたらすものである。この解消には、土地政策の改善だけでは不十分で、社会全体の構造を変えていく必要があるとした。

8．「日本における土地問題」

Jennifer Amyx

Amyxは日本の土地問題に焦点を絞って発表した。1985年以降の地価の急騰は著しいものがあるが、それは土地利用の効率が悪いことと金融政策に問題があるとした。しかも土地保有の有無によって貧富の差がもたらされ、諸物価をも引き上げている。今後は土地利用政策や都市計画をしっかりと立て、金融秩序を混乱させないよう注意しながら地価を下げなければならないとした。

＜実地研修＞

①　過労死110番

（弁護士　川人　博氏）

過労死の問題について精力的に取り組んでいらっしゃる弁護士の川人博先生の事務所を訪れた。まず過労死について取材したビデオを見せて頂き現実を理解した上で、先生から問題点について説明を受けた。日本の労働時間特に時間外労働が非常に長いこと、通勤時間も諸外国に比べ非常に長いことが指摘され、会社中心主義の日本の社会制度そのものが問題であり、今後は個人重視の社会にしていくとともに、法による残業規制、休日の強制的な増加がはかられなければならないとされた。

②　国立歴史民族博物館

ここを訪れたのは、アメリカ人に日本

の歴史がどのように歩んできたのかを知ってもらうと同時に、我々日本人ももう一度自らの歴史を振り返ってみようと考えたからである。ここでは日本の歴史や日本人の生活に関する数多くの展示がなされており、一目でその当時の人々の生活を想像することができるようになっている。アメリカ側参加者が興味深く見ていたのはもちろんであるが、日本側参加者も普段意識から遠ざかっていたものを思い出したかのように館内をまわっていた。場所的に少し遠いながらも、一見の価値のある博物館であった。

③　浜田卓二郎代議士

日本の指導者が今後の日本と世界のあり方をどのように考えているかを知るために、政策通として有名な衆議院議員の浜田卓二郎先生を訪ねた。その中で、世界は今後、冷戦後の新しい国際秩序を模索していかなければならず、そこにおいて日本は積極的な役割を果たしていかなければならないとされた。憲法九条の精神は今後世界の大勢となってくるであろうから、改正は行わずに、平時において戦争防止のために行なわれる平和維持活動等日本ができる範囲において積極的に協力していくとともに、国連機能の強化を図っていかなければならないとされた。その他、高齢化社会に伴う社会活性化のためのシステムの確立の必要性や技術移転、ＮＧＯ強化による海外協力推進の必要性等についても指摘された。

④　北海道庁

地方開発のあり方と東京一極集中の弊害の実際をさぐるため、北海道庁企画振興部を訪れた。ここでは、北海道の歴史や産業を図表をもとに説明して頂き、今後の発展計画をおうかがいした。その中で特に目をひいたのは、千歳のエアカーゴ基地構想であった。北海道は日本のフロンティアといってもよく、今後新潟と並ぶ環日本海経済圏の重要拠点のひとつとして、大いなる可能性を秘めているのではないかと感じた。

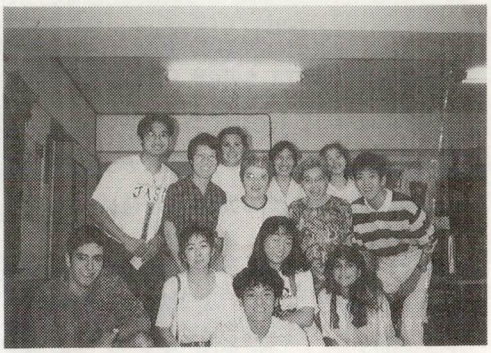
＜最後に＞

日本は長い歴史を持つ国であり、アメリカは新しい国である。このことだけ取ってみても、日米両国が理解し合うとは大変なことだということが容易に推測される。私達はお互いを理解すべく努力するとともに、歴史をしっかりと見つめ、今後の日米関係および世界のあり方も考えていかなければならないのではなかろうか。そして人類共通の価値（基本的人権、民主主義、自由等）を確立し、人類のだれもが幸せな生活を送ることのできる地球社会を形成するために日米両国が果たすべき役割は大きい。そのためには、本会議の趣旨である日米両国の相互理解と協力、今回のテーマである「地球意識の形成」が不可欠である。

（岸本　肇）

社会の圧力と個人
（Social Pressure）

人間は社会的動物である。便利で多様な生活を実現させるために分業を行い社会を形成する。同時に社会が我々の生活に影響をあたえ、時に圧力となり我々の行動を歪める結果



ともなる。個人の素直な心に基づいた行動が、社会の圧力によって無意識のうちにも曲げられていることは少なくない。

いじめや差別、民族問題などの原因の一端を、社会自信が内部にもつ規範、慣習といったさまざまな力に求め、社会が個人に与える影響を分析し、社会の圧力に屈しない個人の在り方について討論した。

＜分科会討論＞　　（発表順）

1．「同化における文化的圧力」

Ari Green

移民の国アメリカといわれるが、そこでは長い間、イギリス文化の押しつけがなされてきたとGreenは主張した。新しくアメリカにやってきた移民たちは、常に、アメリカ文化を受けいれるか、“異物”としてみられるかのどちらかであった。移民へのアメリカ文化の圧力を減らし、アメリカ文化そのものを変化させる必要がある。なぜならアメリカを作っていくのは過去も未来も移民であるのだから、とGreenは強調した。アメリカと聞くと、文化的寛容さを思う日本人には新たな発見であった。

2．「指紋押捺問題と朝鮮民族」

鳥越あすか

大学で政治学を専攻する鳥越は外国人指紋押捺の問題に関し、日本政府の対応と、一般日本人の無関心さを指摘した。特に日本に生まれ、日本で育った在日朝鮮・韓国人の歴史と現状を説明し、これまでの外国人登録法が、いかに彼らの人権を侵害してきたかを説明、日本政府は過去の責任をとり、この問題を早急に解決する必要があると訴えた。

3．「男性社会における女性」

Lee Silverman

男性優位の社会の現状で、社会に進出していく女性が直面する問題について述べた。言葉遣い、服装、男性との付き合い、家庭との両立、子育て後の職場復帰など、程度の差こそあれ、まさにそれは現代日本社会に存在する女性への圧力と同じものであった。ほとんどのメンバーがこれらの問題に対し理解を示す中、一人、女性は家にいてほしいとする遠藤のこだわりが、女性参加者の興味と攻撃の対象となり、議論はつきなかった。

4．黒人と日本人

遠藤　繁

日本人のもつ黒人への差別意識について自己反省を交えながらの発表をし、白人偏重の日本人の意識を批判し、他人種への理解を訴えた。この問題は個人差も大きく、日本人のなかでも遠藤の観察に同意しない者も出て、日米間以上に個人間の議論が盛んであった。差別というものは個人の意識が何よりも大きな要因であることの説明であったように思われる。

5．「社会の圧力」

小林　隆司

社会の枠組みが非常に強く個人の上にのしかかる日本の社会で、個人が社会から受ける圧力を分析し、原因を探った。いじめ、部落問題、差別、進学、就職競争など、現代日本に存在する問題の根底に共通して横たわる原因としてふたつの圧力が考えられると主張した。判断の価値基準を自己の内側に求めるという、当然ではあるが、しかし、困難なことの必要性をだれもが認めたが、その実践となると最良の方法は見つからない。Political Correctness の波に押しつぶされがちな最近のアメリカ社会と現代日本に、ある種の共通性を見いだすことができたのは興味深い点があった。

6．「日本における社会の圧力」

渡辺　文枝

米国留学の経験をもつ渡辺は自分の意見をはっきり持っていると言われるアメリカ人と、日本人との違いがどこから生じたのかに焦点を当てた。特に教育制度、家族形態、歴史的社会制度、の三つの側面に注目し、自己の地位を自分で獲得せねばならないのがアメリカ社会であると主張した。彼女自身、大学でアンケートをとるなど、意欲に満ちた発表であった。

7．「大学生への社会的圧力」

Christine Cernosia

Stanford大学院でアジア文化について研究を行ってきたCernosiaは、最近のアメリカの学生の変化を、学生新聞を通して考察するユニークな発表を行なった。1986年、学生は同性愛、人権、民族などの問題に対し、抗議を行ない、大学側に授業、運営方針を変更させるほどの力を示した。しかし、五年後の現在、少数派を受け入れるmulti-culturalismの勢いの強さに人々は“正しい（political correctness）”とされる意見に口を揃え、活発な議論はなくなってしまった。Nguyen同様、彼女も複雑な問題

前列左から、渡辺文枝、Lee Sil erman、鳥越あすか、後列右から
Christine Cernosia、Louie Nguyen、小林隆司、Ari Green、遠藤　繁

ほど議論のできる自由な雰囲気の大切さを強調した。

8．「ポリティカル・コレクトネス」

Louie Nguyen

自分自身ベトナムで生まれ、アメリカというまったく異なる文化のなかで突然生活を始めた経験をもつNguyenは、アメリカ社会で長い間求められてきた多文化主義（multiculturalism）と、それに伴い最近生じてきたpolitical correctnessという問題について説明した。アングロサクソン系の単一文化から、黒人、アジア人等の文化を同様に認めようとする社会運動が進むアメリカ。しかし、そのあまりに激しい勢いの為に、多文化主義にわずかでも反することを述べると職場、学校から追われるという事件が起きるようになった。これが人々を恐れさせ、多文化主義の是非について口にする機会を奪い、議論は行なわれなくなった。果たしてこれが本当の多文化社会の形成に貢献し得るのかという問いとともに、議論できる自由度の大切さを訴えた。

＜実地研修＞

① ＨＥＬＰ　女性の家

日本に在住する外国人女性、特にアジア女性は経済的理由のため日本に来たのち、予想もしない生活に苦しめられることがしばしばある。彼女らの人権保護、救済を長年にわたって行なっているボランティア機関、ＨＥＬＰ、女性の家を訪ねた。見学当日も我々と同年代の女性や、子供を抱いた女性たちが収容人数を充たしていた。母国で騙され来日、風俗産業に従事させられたのち逃げだした人がほとんどという。彼女等の安全を確保し、帰国などの手伝いを行なっているスタッフの方々から日本における外国人女性の状況と、彼らの活動の様子に関し、非常に熱心な説明を受けることができた。

② いのちの電話

さまざまな圧力に耐えかねて自殺していく人は日本でも、アメリカでも後を断たない。こうした人々を救済するため、電話によるカウンセリングを行ない続けているいのちの電話の事務所を見学した。利用する人々の年令、相談内容、その他、過去から現在にかけての相談の変化もまじえ説明して戴いた。最近では、社会の複雑化とともに自分の悩みをうまく口にできない人が増えていることは印象的であった。

③ 韓国大使館二等書記官

イ・ジョングワン氏

指紋押捺の問題と関連し、韓国大使館のイ・ジョングワン氏よりお話をうかがった。外交の立場から日本政府に対し、改善の交渉を行なってきた韓国政府側の意見について、また、在日韓国人の日本での状況について御説明をお願いした。この問題に関し発表を行なった鳥越は、特に関心をもち、他のメンバーにとっても鳥越の発表内容からさらに理解を深める良い機会となった。

④ 北星学園余市校

全国から、高等学校中退者の受け入れを行なっているこの北星学園では、過酷な受験戦争に疑問を感じたり、マスプロ

的な、押しつけ授業等に嫌気がさし、一度高校をやめた経験を持つ生徒が多く通学している。十代後半の思春期に社会からの圧力に反発した生徒の集まる本学園を「見えない隣人と私達」の分科会とともに訪れた。中退者受け入れを開始するにあたってどのような点に注意して教育方針の変更を行なったのかとの問いに対し、いまでも生徒と教師による試行錯誤が続いており、現在もよりよい姿を模索中だという答えにはなぜか心の和むものがあった。また、何人かの生徒や、卒業生にも話を聞くことができたが、福祉に対して興味をもつなど、それまで見えなかったものに気づき始めたとのコメントは印象的であった。

＜最後に＞

地球時代にあたり、外に目を向けた国際化がうたわれるいま、この分科会を通して逆説的ではあるが、自己の内部に注目することの重要性に気付いたように思う。価値基準を自らのなかに求め、社会のなかでも自分自身の内なる信念に基づいた行動をする勇気こそ今必要とされているというのが結論であろう。

最後に。アメリカ側のコーディネーターとして一年間共に構想を練ってきたNguyenや、実地研修を快く引き受けてくださった方々、そしてこの分科会を盛り上げ、コーディネーターを勇気付けたくれたメンバー一人一人に心より感謝したい。これらの多くの方々の協力によって実現した本分科会での成果は、社会に出た後も大きな影響を我々一人一人に及ぼすと確信している。　　（小林　隆司）

見えない隣人と私達
(Rights,Roles, and Responsibilities)

日常生活で気にとめないこと、例えば駅の階段や歩道のちょっとしたでこぼこや傾斜が突如として過酷な現実となる。当たり前と思っていたことが、そうではないのだと気付く瞬間である。

一体我々の周りにはどれだけ声なき弱者が存在するのか、彼らの権利はどうなっているか。そして我々は近くにいるはずの彼らに対して、また社会に対していかなる責任を担うべきか。このような問題意識をもって、当分科会メンバーは日米両国における見えざる存在を個人レベルで捉え、さらには、社会の一構成員として何らかの行動を起こして行くことを念頭に様々な分野から討論、実地研修を行なった。

＜分科会討論＞　　（発表順）

1．「身体の不自由なある大学生の一日を巡って」

Corrine Maekawa

自身が通う大学で、車椅子の学生が直面する様々な障害を実体験に基づき論じた。『障害者と接する際の心得』というパンフレットが配付され、日頃の我々の態度を顧

みることを促した。また、アメリカの大学および教育機関における障害者受入れの態勢、ボランティアの意識は障害者を見ることのほとんど無い日本の大学とは対照的であり、日本側の意識の改革が必要であることが議論された。

2．「障害者とどうつき合うべきか」

西海　奏子

障害者に対する個人の意識と、ボランティアをする動機について分析。医学を学び、自らもボランティア活動をしている西海だが、先に論文発表を行なったMaekawaの体験との比較はそのまま日米の比較となった。中でもボランティアに対する定義の違いは明らかで、（無償の日本、契約によるアメリカ）現在の圧倒的な介護の不足を考えると、アメリカ的ボランティアの形の方が、より現実的との声が上がった。

3．「高齢化社会に生きて」

作　佳代子

高齢化社会の到来で老人介護のあり方が、ますます問われている。とりわけ寝たきり老人の介護はその世話をしたことのない人には分からない厳しいものである。ボランティアをする側が、疲労のために体をこわしてしまうという例も多い中で、（彼女もそうであった）まず自分に一番近い老人、身内の者をどう世話するかという問いかけがなされた。

4．「進学塾　－教育の二重構造－　」

七戸　美弥

教育の二重構造化が言われて久しいが、塾通いをする小中学生の実態はどうなのか、食生活、遊びや生活サイクルなどの変化について論じた。塾そのものの功罪よりも、教育制度自体が変わらない限りは、子供達は画一的な教育を受け、異質なる他者との共存を覚える機会もなく、受験競争という現実にのまれるままなのではかいかという指摘があった。

5．「代理母―親権を巡る二つの訴訟を考える－」

Zachary Hernandez

日本では耳慣れない代理母ということばだが、アメリカでは親権を巡って訴訟が起きるなど世論を二分する社会問題となっている。中でも有名な訴訟を取り上げ（Baby Mのケース）、代理母の健康、子供が障害を持つ場合の扱い、金銭のやりとりなど契約と割り切れない代理母問題の現状の難しさが、議論された。

6．「日本における外国人労働者」

佐野日出之

現代産業での人手不足も深刻な状況にある。この論文は外国人労働者に関して日本側の事情（プル要因）と相手国との経済格差その他（プッシュ要因）、について分析した。ヨーロッパでは受入れ後、外国人労働者の存在が新たな差別構造を生んでいることから、根深い差別意識の残る日本において政府の取るべき方策は、受入れを制限することであると論じた。

7．「日本の『ウチ』と『ソト』意識
－部落民の歴史的考察から－」

Billy Hornung

部落民の歴史的考察を元に単一民族社会と言われる日本の差別構造を分析した。民族問題としてではない伝統的歴史的基盤か

左より、作佳代子、Zachary Hernandez、七戸美弥、Billy Hornung、
佐野日出之、Marry Ellen Quinn、Corrine Maekawa、西海奏子

ら来る日本人特有の異質なものへの差別感が部落問題には根強く影響を及ぼすとし、真の国際化を目指すならば、外国人をよんだり、海外旅行をすることよりも内なる差別をなくすことが先決であると指摘した。

8．「老人とは？　高齢化社会について考える」

Marry Ellen Quinn

老人問題を病院実習で様々な症状をもつ老人と接した経験をもとに、これから我々のとるべき対応について論じた。ますます高齢化が進む現在、60歳、70歳、一体いくつになれば老人と呼ぶのだろうか、という老人の定義に関して問いかけがなされた。また、自分の両親と老後の世話について真剣に話し合ったことがあるかとの質問もあり、再度、自分の問題としての高齢化社会が議論された。

＜実地研修＞

①　江戸川病院高砂分院

院長の青井禮子氏とソーシャルワーカーの秋谷滋氏の説明でリハビリテーションの施設や老人ホームを見学。その後、夕食を頂きながらの議論が白熱し深夜まで高齢化社会から米問題まで様々なことを話し合う機会となった。

②　東京都社会福祉協議会

東京都の社会福祉対策の現状について森本佳樹氏の説明を受ける。障害者用の風呂や寝たきりの老人が部屋を移動するための器具の展示を見た後、実際の車イスを体験。飯田橋駅から靖国神社の往復だったが、道の段差、傾斜による歩行の困難さ、いつも周りを見上げるという視線の及ぼす精神的影響を痛感した。

③　東京入国管理局

「現代社会と法制度」分科会との合同実地研修として法務省入国管理局の佐々木聖子氏を訪ね、外国人労働者受入れの現状と政府の方針を聞く。技術を持った

労働者の基準や東南アジアの国々などの説明を受けた上で、質疑応答を行なった。

④　北星学園余市校

「社会の圧力と個人」分科会との合同実地研修として高校中退者を積極的に受け入れている当校を訪問。教頭の北垣俊一氏に学校の方針と中退者を巡る社会的状況についての説明を受け、二人の在校生とＯＢを交えて生徒側の生の声を聞いた。

＜最後に＞

「難しい話が多かったね。」会議終了近くメンバーの一人がぽつりと感想を言った。実際ディスカッションが行き詰まることも多かった。今、メンバーの発表内容を振り返ってみても、各々が日々考えていること、実践していること、そしてこれからもずっと関わっていくこと…そんなテーマばかりでひと夏で簡単に明確なビジョンがでるようなものではなかったと思う。ただ我々がめざした議論だけでなく、行動を起こそうという目標はある程度達成された。そして、この分科会を機により一層各自が追求して行くだろう。そんな手応えを確かに感じた分科会であった。

（七戸　美弥）

スポーツと社会
（Sports and Society）

様々なレベルでの試合が各地で催され、また地域スポーツが社会に浸透していく中で、近年人々のスポーツに対する関心は高まるばかりである。スポーツは個人を問わず、誰もがその感動や興奮を平等に味わえる。そうしてスポーツは、私達の生活においてその重要な一側面としてあり続けてきた。しかし一方では、蔓延する金銭主義や過度の勝敗主義にスポーツの本来の目的――楽しみや気晴らしといったもの――は見失われてきてはいないだろうか。「オリンピックとは、参加することに意義がある。」現代オリンピック創始者が残した余りにも有名な言葉であるが、果たしてこの精神は、現在のスポーツにおいてどこまで通用するだろうか。

当分科会では、現代におけるスポーツと私達とのあり方をめぐって、スポーツ愛好者を自認する８人により自由な意見が交わされた。

＜分科会討論＞

（発表順）

１．「日本社会におけるスポーツの役割」

長野　宇能

経済的繁栄の下に便利で快適な毎日が保障されるようになった日本だが、私達の生活は本当に「豊か」なのだろうか。それを考える上で長野は、「娯楽」としてのスポーツを挙げ、日本社会がそうした目でスポーツをとらえることの必要性を説いた。体育教育や部活動における勝敗重視の姿勢が日本では競技者／観戦者を隔離している等の点が指摘され、また一方では、大学におけ

るスポーツサークルの存在をめぐり、今日の若者のスポーツに対する考え方の変化など話し合われた。

2．「アメリカにおける大学体育会の現状」

Yoshio Hall

自ら体育会サッカー部に所属するHallは、現在のアメリカにおける大学スポーツの、金銭主義に偏った暗い一面について報告した。各校のスポーツチームの活動が大きく評価される米国では、選手の不正入学、また財源確保に膨大な額のスポンサー契約が時として行われる。そうした中で、選手からは本来の学生という自覚は忘れ去られ、彼らの大学卒業率は著しく低い。このような大学は、プロ選手の培養地と化したままでいいのか。厳しい現実に考えるべきことは多かった。

3．「ボート：人生の教訓としてのスポーツ」

Jane Thomson

体育会ボート部でオールを漕ぐThomsonは、練習や試合を通して得た経験がいかに自己の人生観に影響を与えたかを語ってくれた。厳しい練習の中で、何故この訓練が必要なのか、心の葛藤が、彼女にとっては自分を見つめ直す良い機会となったこと、また試合時の緊張感と興奮、休暇中の部員との共同生活の楽しみなど、話は尽きなかった。

4．「健全な心と健全な体－体育教育のあり方」

Indrani Lall

体育教育が私達の社会にはたす役割とは?自己の経験を踏まえながらLallは、適切な体育教育が個人の自信と責任ある行動と良好な人間関係を築くことの重要性について語った。日米に見られる若年層の体力低下が問題点として話合われた。発表の最後には自ら指導員免許をもつLallによる即席エアロビクス教室が開かれ、たままち床に伏

左より、松井恵一、鈴木美紀、Maeleen Hamano、長野宇能、Yoshio Hall、
（下段）Jane Thomson、深町あおい、Indrani Lall

すことになった参加者は、自ら「体力低下」を身をもって実感したのであった。

5．「米国における医療制度をめぐるアジア系米国人に対する障壁について」

Maeleen Hamano

米国におけるアジア系市民が、文化的・言語的・構造的・経済的障壁に阻まれて十分な保険手当てを受けられない現状について、Hamanoは様々な例を取り上げながら発表を行なった。これに関して、日米両国からそれぞれの医療制度における問題点が多方面から指摘され、弱者への配慮を欠いた両制度の側面について思い知らされる内容となった。

6．「『限界』への挑戦」

深町　あおい

スポーツの世界においては、絶えず新記録が生まれており、その意味では人間の「限界」は現在も伸び続けているといえるだろう。しかし、その「限界」が薬物などによる人工的な力によって作り出された場合、それはやはり人間の力の成果と言えるだろうか。深町は、近年の記録の伸びを「進歩」と呼ぶことに疑いを投げかけた。また、記録更新が困難になってきた今日現在、そういった記録を競うスポーツの将来について話し合われた。

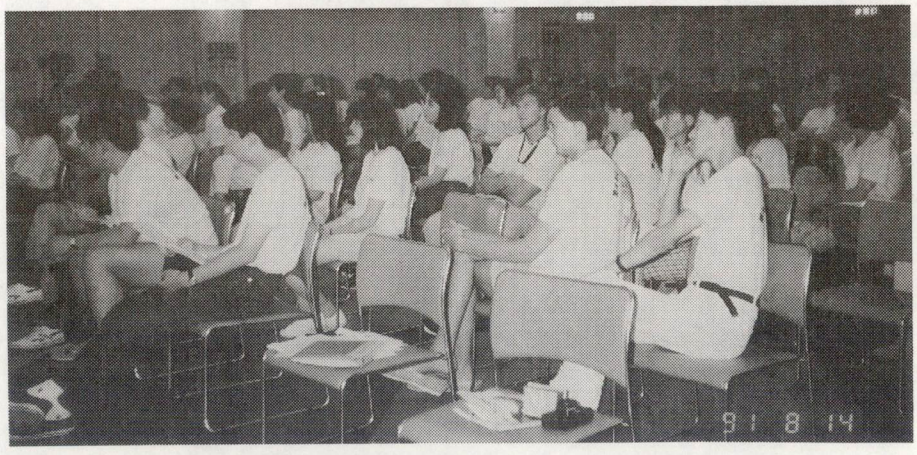
7．「『アマチュアリズム』を問うことの現代性」

松井　恵一

8．「オリンピックを考える」

鈴木　美紀

合同発表を行なった松井と鈴木は、一方がラグビーの視点から、もう一方は現代オリンピックの現状から、薄れゆくアマ・プロの境界線について問題点を提示した。松井は、自らもプレーするラクビーがアマチュアリズムを信奉する数少ないスポーツの一つであることをモデルとして挙げ、それを守ることの意義をスポーツは何かという基本に立ち返ることで強調した。一方、鈴木は商業路線に走る今日のオリンピックに対して様々な観点から検証を行なった上で、交流を柱に置いた新しい体制の確立の必要性を説いた。討論では、理想主義的意見と現実的意見が入り交じり、ジレンマに陥ったもどかしさから、問題の根深さを思い知らされた。



＜実地研修＞

① 東京放送（スポーツ局スポーツ企画政策部　　小池　由紀氏）

同所属に紅一点で活躍していらっしゃる小池氏には、スポーツ番組－特にプロ野球中継－作成の舞台裏について興味深いお話を伺った。当日も広島から帰ってきたばかりという多忙を極める生活を送りながらも、長年グラウンドに足を運び培った選手やコーチ達との太いパイプは、女性としてのハンディを越え、今日の彼女の自信と成功へとつながったに違いない。氏の軽快な話とその気さくさに時間は飛ぶように流れた。

② Robert Whiting氏

主に日本のプロ野球を扱った作品で知られるジャーナリストのホワイティング氏に、彼自身の経験談を含めてプロ野球から日本社会論にいたるまでの広範な話題について語っていただいた。日本に来た外国人選手権との付き合いから垣間見れる日本野球チームの閉鎖性や、偏狭とも取れる練習に対する一途さは、そのまま日本社会にもあてはまると氏は分析する。我々の立場からの意見も交えながらの対談は非常に興味深いものとなった。

③ SUDAC（スポーツ・クラブ）

健康ブームに乗る今日の日本の世相を象徴するものとして、スポーツ倶楽部の繁栄ぶりがある。都内にも星の数ほどあるスポーツクラブの一つであるスダックを訪れた。エクササイスを実際に体験した後にクラブ内を案内していただきながら、その運営などについての説明を伺った。住宅地に立地する同クラブは小規模ながら、利用者の多くを占める主婦や仕事帰りのビジネスマン／ウーマンの希望に合った設備と時間帯などの運営を実施するなどの努力に努めていた。

＜最後に＞

それぞれの経験、立場、そして問題意識から私達はスポーツと私達の社会の関係について語り合ったのだが、そこでは各人の様々なスポーツ観が投影されることとなり、毎回の討議は個人の持味の生きた意見が交わされた。スポーツを私達の社会を見つめ直す一つのバロメーターとして捉え、共に考えたことの成果は大きい。ここで得た視点を基に私達にとっての「豊か」な生活への模索をこれからも続けてゆきたいと思う。

最後にこの分科会を支えてくれたHall他６名の参加者、そして協力者の方々に心からの感謝の気持ちを表したい。（深町　あおい）

マスメディアと国際関係
(Media and International Relations)

現在は世界的な変革の時代である。その現代に於いて、マスメディア、ジャーナリズムの果たす役割、影響力には計り知れないものがある。ソ連・東欧に於いても、アジアに於いても、人と人を結び付けたのはマスメディアであり、ジャーナリズムであったとも言える。一方、湾岸戦争の際に大きく取り上げられたのもマスメディアであり、ジャーナリズムであった。このようにマスメディアの力は国際関係にもおよぶ。日米摩擦の中で、マス

前列左より、猪刈由紀、野村研二、西山裕子、Hiroshi R Yamazaki、
後列右より、Jeffrey Huffman、大塚雄三、Mary O'Donnel、
Kimberley Todd

メディアの占める位置は大きいといわれる。当分科会では、マスメディア、ジャーナリズムの国際関係に対する影響と役割について討議し、今後のあるべき姿を模索した。

＜分科会討論＞　　（発表順）

1．「情報操作主体としての広告」

大塚　雄三

大塚は、マスメディアの社会に対する影響を様々な観点から分析し、そのマスメディアが恣意的に大衆を操作する様を観察した。特にそうした大衆操作を主目的とする広告についてフォーカスをあて、その影響力は他のメディアに比して絶大なものがある。そこで、広告会社も、国際関係に与える影響の度合いにふさわしい責任を果たすべきことを説いた。本来営利活動を営む企業が社会に責任を負うべきという説に対して賛否両論があった。

2．「性と流行と広告」

Hiroshi R. Yamazaki

広告は社会の中で大きな地位を占めて入る。そのような広告の中で最も多いのが性に関するものである。Yamazakiはこの性を題材とした広告について流行との関係を実証的に分析した。性的なものは、様々な意味で人々の興味を引く故に、広告では多用される。それだけに社会的な影響力も大きい。Yamazakiは、性を扱った広告に時代的な変化を見いだし、それが社会の流れと表裏一体の関係にあることを発見した。分科会討論ではセクシズムと広告の関係や、広告のあるべき姿について、Yamazakiの用意したビデオテープをもとに話し合われた。

3．「湾岸危機に於ける日本の役割についての報道」

Mary O'Donnel

O'Donnelは、New York TimesとWall Street Journalの2紙における、湾岸危機の際の日本についての新聞報道の相違について分析し、Journal紙を除く新聞・雑誌は、日本についての深い洞察なく記事を供給していると批判した。さらに、こうした思慮を欠いた日本叩きは両国関係の改善にはつながらないと述べた。この報告に対しては、米国側から日本国憲法に対する日本人の意見・認識についての質問が出されたり、日本側からは米国人の対日観について質問がなされているなど、マスメディアの映し出す国のイメージと現実との相違に驚かされた。

4．「国際衛星放送網の構想」

野村　研二

野村は、戦争はその原因が政府の情報操作や情報の欠如に負うところが大きいという前提の下、どこでも簡単な設備で送受信できる衛星放送システムを、国の枠を越えた世界的な組織とし設立することを提案した。衛星放送が国境を越え直接国民に届くということで、政府の干渉を受けずにありのままの事実が伝えられ、異文化交流はもとより、国という枠を越えた新しい文化を作り上げることも可能になるという。さらに世界的な問題に対して共通の認識をもって、ともに解決する事もできる。野村は、存在する国際衛星通信網を分析し、それが放送に関しては国の域を越えていないことを指摘し、その原因は、言論の自由に対する考え方の違いと、科学技術の地域的遍在を背景に各国が国際衛星放送の確立に反対していることとしている。文化の固有性、国家の主権を侵かす危険性を認識しつつも野村はこの放送網の設立をその長所故に望む。この発表に対して、国際放送網に対する規制の是非や、提案されたシステムの実効性について活発な議論が行われた。

5．「第二次大戦・占領下の新聞」

猪刈　由紀

湾岸戦争下の報道規制の問題が問われる中、猪刈は日本の国内報道規制について特に太平洋戦争、続く占領期の報道規制は、政府・軍部主導という側面もあったが、一方で販売部数競争に勝ち残るために新聞社自体がセンセーショナリズムを求めたことによって軍部寄りの報道姿勢を強めたことの方が先であったという指摘がなされた。このような状況の下でしかれた報道規制に対しては抵抗が困難であるばかりか、そうした状況に慣れ「検閲を通すために書く」姿勢が身についてしまった。占領期に報道の民主化が図られたにも関わらず、当たり障りのないことを書き続けたことはその証左といえよう。猪刈は、検閲や報道規制に対する慣れや検閲を通過させるために記事を書くという無意識の癖の危険性を指摘したといえよう。これに対し報道規制がなければ、自由に記事を書くことが出来、戦争を防ぐことが出来たかどうかという疑問も出され、一同頭を悩ませた。

6．「沈黙の権利－日米マスコミの自己検閲」

Kimberley Todd

検閲は世の中で忌み嫌われており、かつ禁止されていることであるが、実際にはマスコミ報道はどこか似通っており、自己検閲が行われているように思われる。こうし

た前提の下、Toddは日米の自己検閲を実証研究し、検閲の是非を問うた。日本で行われている記者クラブ制度は報道の自由に対する政府の介入を容易にさせる体制であり、構造的には米国でも同様のシステムが存在している。さらにニュース番組の視聴率の増加にともなう広告増収は広告主の介入を引き起こしているといわれる。こうした報告に対して、検閲の是非や、その在り方まで様々な意見が出された。

7．「日本見直し論者と日米関係」

西山　裕子

西山は日本見直し論について考察し、その社会に対する影響を論じた。考察対象をいわゆるリビジョニスト四人組とし、各々の論点を明確にした上で、見直し論者は米国に於ける日本への注目を喚起し、両国の違いを米国人に認識させるという点で大きな役割を果たしたと評価する。しかしこうした注目も必ずしも正しい内容によって引き起こされたとは言えないばかりか、かえって両国の間に大きな溝を作っている観もある。今後は、見直し論によって引いた注目を、正しい理解に導くことが、ジャーナリズムに求められていると西山は説く。こうした西山の考えに対して、参加者は今後のジャーナリズムの役割について様々なアイデアを述べあった。

8．「日米文化理解と報道」

Jeffrey Huffman

Huffman は日米相互の文化理解において著しい不均衡が存在し、その原因としてマスメディアが大きな地位を占めているとした上で、今後の新時代においてジャーナリズムの果たすべき役割について述べた。日本での米国の露出度は多大なものがあるが、米国の側では日本の重要性は認識されておらず、コミュニケーションをとる能力も語学面などで欠けている。さらにジャーナリズムに於いてはセンセーショナリズムばかり追求すると述べる。それをふまえて、

彼は各々の国のジャーナリズムが、より重要なパートナーに対して注目を喚起すべきであると結論付けている。この報告に対し、両国代表は、実体験に基づく事例を挙げ、現状認識をした後でジャーナリズムのあるべき姿についての討論をした。

＜実地研修＞

①　株式会社博報堂

米国での滞在経験の長い眞水宏美氏から、広告会社が国際関係に果たす役割と、国際的な広告戦略、広告比較研究についてレクチャーを受ける。プレゼンテーションにはビデオが使われ、世界各国の広告が同じ商品についても異なることを認識させられ、広告業界の国際化は逆説的にローカリズムを意味することに驚かされた。また広告会社は国際関係には政治的に関与することなくあくまでも中立な経済の論理から行動するべきであることを述べられた。

② 槇原久美子氏（TIME誌）、Bill Powell氏（NEWSWEEK誌）

外国人記者クラブにて、日本のマスメディア、ジャーナリズムの国際関係に果たす役割と外国メディアの日本での活動と役割についてレクチャー受け、討論した。日米摩擦に於けるニュース誌の責任についても討議され、国際報道とビジネスの関係が強固であることには大きく驚かされた。他にも様々な点について詳細な説明と質問が繰り返された。

③ 日本放送協会国際部

副部長の藤澤秀敏氏を訪ね、湾岸報道を中心に国際報道の現在について伺った。率直で誠実な対応故か、大変説得力のあるレクチャーに一同感激した。日本のマスコミの特派員の派遣先分布には偏りがあるため、対応が遅れることも多いという。また視聴者の判断材料を増やすためにも、特派員は増員すべきであるということを説かれ、どんな報道にも一定の視点を決める必要があること、戦争を止めるにはとにかく伝えることだということなどを述べられ、参加者が多いに学んだ場であった。

④ Ronald Rhodes氏

（朝日新聞Japan Access誌）

朝日新聞英文ダイジェスト誌のRhodes氏をお招きし、ジャーナリズムについての概論の講義を受けた。氏は、大学教授の経験もあるジャーナリトであり、学生に対して丁寧にジャーナリズムについて教え諭して下さった。この講義によって学生参加者の中に一定のジャーナリズムに対する視点と合意が形成されたといえよう。

⑤ 北海道新聞社

編集局次長の池城氏を訪ね、日米の草の根における情報・マスメディアのギャップについてお話を伺った。最後の講師であったため、参加者から多様な質問がなされた。特に説明には実証データが付されており、大変分かりやすいものであった。その後学生たちによって東欧変革におけるマスメディアの役割について分科会の議論をまとめる形で検証した。

＜最後に＞

今回の分科会では、日米間のマスメディアの違いや、国際報道の国による違いなどを中心に発表が行われ、それを基にジャーナリズムと国際関係の一般論を討議する手法を取った。今回の討議の中で得たことは、そうしたマスメディア一般論にとどまらず、自分達の身近な問題として、両国が同質性と異質性を合わせ持ち、それがマスメディアによってつなぎ止められているという現状をふまえ、両国の学生が討議を根気よく続けていくことこそ真の意味での相互交流であることを知ったことである。

最後になるが、米国側実行委員のYamazakiと講師の方々のご協力に深くお礼申し上げたい。

（大塚雄三）

Ⅲ．シンポジウム／フォーラム／コロキアム

貿易シンポジウム・総括

日米学生会議において、必ずと言って良いほどディスカッションのテーマとなるのが、日米貿易摩擦である。私達が、小学校で社会科を学習する際から、この問題と程度の差はあれ直面してきたはずである。その時から現在に至るまで、この問題の解決の道筋はあきらかではないように思える。それを反映して、第43回日米学生会議実行委員は、会議のプランニングを行う新実行委員会議における日米双方の合意の下で、このシンポジウムは企画したのである。

私達は、シンポジウムで取り上げるトピックとして日米構造協議（ＳＩＩ）、農産物、政治過程、知的所有権、そして内外投資の５つを選んだ。最初の日米構造協議は、外交の常識からみた特殊性、つまり相互の内政干渉ともとれるこの協議を通して日米間の貿易問題に迫った。農産物については講師の先生の専門である砂糖についての世界市場における農業保護政策について考えることによって、究極的にはＧＡＴＴウルグアイ・ラウンドで農業がその対象として該当するのか否かの議論をすることを期待した。政治過程では、講師の先生の著書のテーマであった日米オレンジ交渉を一つのケーススタディとして貿易交渉において政治がどの様に関わっているのかを考えてみることにした。知的所有権については、このシンポジウムで話し合うことについて疑問もあったのだが、米国政府の方針の一つに知的所有権の保護を挙げており、米国企業の重要な商品となっているのでこれからの日米貿易の争点となりえると考えたのである。最後の内外投資も貿易問題の一つとして取り扱うには疑問があったのだが、貿易政策の立案に当たっては金融面でのバックアップ体制が不可欠と考えトピックの一つとしたのである。

シンポジウム自体の構成は、第一部で第22回、23回会議参加者で前米国通商代表代理補として活躍されたグレン・Ｓ・フクシマ氏に日米通商政策に携わった方としてその問題点の鳥瞰図を示して頂き、第二部の５つのトピックに分かれた小グループ講師レクチャーでは、第一部を踏まえた上で５つのトピックのうち最低一つについては参加者に押えてもらおうと企画した。第三部のパネルディスカッションでは、より良い日米関係を模索すべくビジネス・ウィーク誌東京支局長のロバート・Ｃ・ネフ氏の司会の下で第二部の五人の講師の先生方による活発なやり取りと参加者との質疑応答で参加者それぞれがタッチしなかった残りの４つのトピックについて理解を深めることを予定していた。当シンポジウムではシンポジウム自体を単なる机上の空論に終わらせないために実地研修を活かすことを計画した。そこで新潟県黒川村では豪農屋敷や酒造工場

見学を通じて日本の伝統的農業の文化的背景についての理解を深めることを期待した。黒川村においては、さらに実地研修の後にライス・セッションを設定し、当地で美味しいお米を賞味する体験を活かしながら感情論で終わりがちな米論議を充実させようとした。以下にシンポジウム自体とライス・セッションについて報告したいと思う。

第一部のフクシマ氏の基調講演は、５つのＰで始まる①Problems（問題点）、②Perspectives（見方）、③Paradigms & Policies（凡例と政策）、④Prospects（見通し）、⑤Prescriptions（処方箋）という切り口から日米関係を主としていわゆる貿易問題を説明された。この中で最も私に印象深かったのは、フクシマ氏の「将来的には、米国政府と一般企業とのより緊密な協力が望まれており、それに向けた、さらなる米国政府の優秀な人材確保が必要である。その指針として戦略的貿易政策の立案・実施が必要である。」という発言である。日本が目指そうとしている方向と逆の改革が必要と主張されているように思えた。日本と米国との真の公正貿易実現には、このように互いの政策のバランスをとる必要があるのではないだろうか。

第二部で、私自身は内外投資のグループに参加した。講師の藤井氏は氏の証券のプロとしての視点から懇切丁寧に日米間の直接投資の現状と問題点を説明して下さった。丁度証券会社による損失補塡から端を発したいわゆる証券スキャンダルが巷を賑わせていた時期であったためトピックの一つとして取り上げられた。氏はこの出来事は不透明さの象徴として海外から批判されるだろうと述べられた。

第三部では、活発なやり取りがあり、多くの質疑応答がなされた。農産物の講師であった金井氏の「次の10年から15年の間に農業従事者の多くが引退するので、それらの土地を買収して集約化し、効率的農業の実現を図れれば良いが、高い地価が障害である。」とのコメントは今日の日本農業の現状を端的に表していたように感じた。

黒川村でのライス・セッションは、日米双方のボランティアによる米問題の基本的レクチャーの後、日米交えた５名の小グループに別れて米問題についてディスカッションした。プログラム終了時に各グループから提出されたレポートを基にまとめてみたい。

日米双方の参加者とも米問題については、ある程度事前に勉強していたので、かなり活発な議論が交わされた。日本側の参加者は、外国からの米の輸入は、消費者の選択に必要な程度の量の輸入は妥当とすることで意見の一致を見られたように思う。但し、個人個人の米との接し方（米に対する価値基準）が異なっており、可能な限りの米作農家の集約化を図り、国際競争力をつける必要性はほぼ全員感じていたようである。米国側の参加者は公正貿易をやるには消費者の選択の自由を奪ってはならないとして日本政府主導による米の輸入禁止を批判し、その政策の柱である食料安保論は現在のＧＡＴＴウルグアイ・ラウンド体制の下では妥当ではないとの意見が多く見受けられた。私としては農作物はＧＡＴＴ

ウルグアイ・ラウンドのトピックとして妥当なのか考えてほしいと思っている。

この中央大学駿河台記念館での貿易シンポジウム開催にあたり、基調講演と第二部、第三部の各講師及びコーディネーターを御紹介頂いた日本ＡＴ＆Ｔ株式会社総合政策・事業開発本部長であり、第22回、23回会議参加者のグレン・Ｓ・フクシマ氏、御尊父のご逝去にもかかわらず、第三部パネルディスカッションのコーディネーターを務めて頂いたビジネス・ウィーク誌東京支局長のロバート・Ｃ・ネフ氏、そしてご多忙にも関わらず参加頂いた講師の先生方、アドバイス頂いた日本興業銀行の中村祐司氏、会場使用にあたって格別のご配慮を頂いた中央大学駿河台記念館事務長の深沢幸彦氏、新潟・黒川村でのライス・セッションに対し資料を提供して頂いた新潟大学経済学部教授の小山洋司氏にはこの場を借りて参加者一同厚く御礼申し上げたい。

（コーディネーター：江藤　一）

貿易シンポジウム　講師リスト

第一部

基調講演　Glen S.Fukushima氏（日本ＡＴ＆Ｔ株式会社総合政策・事業開発本部長）

演題　FORGING A NEW U.S.-JAPAN RELATIONSHIP(新日米関係の提案)

第二部

小グループでの講師レクチャー

日米構造協議　松下　満雄氏（東京大学法学部教授）

農産物　金井　道夫氏（農林水産省農業総合研究所海外部国際研究室長）

政治過程　草野　厚氏　（慶応義塾大学総合政策部教授）

知的所有権　本間　忠良氏（三菱電機株式会社知的財産権渉外部長）

内外投資　藤井　清孝氏（ＣＳファーストボストン証券会社東京支店
インヴェストメントアンドバンキング部
M&Aヴァイスプレジデント）

第三部

パネルディスカッション

テーマ「より良い日米関係に向けて」

司会　Robert C.Neff 氏（ビジネス・ウィーク誌東京支局長）

パネリスト　同上

貿易シンポジウム

それは蒸し暑い１日だった。正装が汗ばむのを感じながら素晴らしく整えられた中央大学の建物に入った。「貿易シンポジウム」。この日米開戦50年を経て新たな局面を迎えた今、最もホットなイシューである貿易問題を５つのカテゴリーから考えていくというこの試みに対して、利害にとらわれることのない学生レベルの意見交換が期待できるものとしてそれぞれがこのシンポジウムに臨んだ事であろう。

グレン・フクシマ氏による基調講演は我々に新しい視点を与えてくれたような気がしている。マスコミによって作られる双方のイメージを受けとめるのではなく、自分の瞳で見つめ考えていく必要を改めて感じたのである。担当者の案内で各分野のスピーカーが登場したのはちょうど昼食をすぎたころである。知的所有権、内外投資、日米構造協議、政治過程、農産物のプレゼンテーションを経て、スピーカーの講義に入る。専門の分野を英語で聞きとり、理解するというのは、我々日本人にとっては並大抵のことではない。私が知的所有権の担当であった、ということを踏まえてその様子を述べておこうと思う。

知的所有権。とても抽象的な言葉である。しかし視点を変えてみれば日常よく目にする問題であったりするのである。例えば、レコードレンタルやキャラクターの使用の問題など。内包する事柄は広かったものの、「日本はいつもアメリカの考えたものを‘steal’（盗んでいる）している。」という指摘が米国側からでたり、願わくばもっと時間が欲しいところなのであった。

第三部はロバート・ネフ氏の司会のもとでのパネルディスカッションとQ&A。そうしてシンポジウムは幕を閉じたのである。

貿易問題ほどここ数年の日米間での懸案事項はないだろう。構造協議なるものが行われ日米関係は新たな一歩を踏み出したと言える。そうした中でこのシンポジウムは各界の専門家や識者を招き、日米貿易問題の現場にいた人の講演まで用意されていたという点で、我々学生にとってはとても恵まれたチャンスであったろうと思う。ただし、ここに準備の差が指摘されていたように、各個人についても消化の具合はまちまちであったのは否めない。しかし、このシンポジウムが契機で問題意識が深まったり、何かが示唆されるものがあったのであれば、こうした機会を持てたことに感謝すべきであろう。

定例会や合宿でそれぞれの発表を聞きながら、自分の思いを会議で発表する。時間がもっと欲しい、と思いながらも一つ肩の荷が降りたような気分で私は会場を去ったのだった。

（遠藤　繁）

貿易シンポジウム

現在の日米関係の最大の懸案事項といえば貿易摩擦をおいて他にはない。従って、貿易シンポジウムは今回の会議のメイン・イベントであるべきだという位置付けを私はしていた。政治過程のタスク・フォース（担当者）として、一番力を注いで準備したのがこれであり、このシンポジウムを通して自分なりに貿易摩擦の解決策らしきものを見い出せればと期待していた。

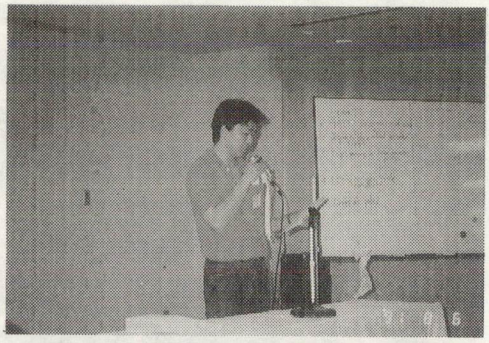
前日のプレップタイム（準備時間）で初めて日米一緒に議論した。本来ならばそのときまでに全員にレジュメがわたり、皆それに目を通して、基礎知識が把握されているという前提だった。しかし、それが出来ていなかったためかどうか、日米問わず参加者の間で基本的事項の認識に差異が見られた。また日本側参加者の発言が少ないことも気になった。その日は、レジュメをよく読み、翌日のために質問等を考えておくよう申し合わせ、議論を終えた。

当日は、第一部のグレン・S・フクシマ氏の講演で幕を開けた。フクシマ氏の講演は予め配布されていた項目リストに従って進められた。その内容は日米貿易摩擦全般をカバーするものだった。しかし、かなり専門的な話のうえに氏の英語は速かったので、私も含め日本人参加者にとってはなかなかついていくのが大変だったと思う。また、仕方のないことではあるが、氏の見解がかつて在籍していたUSTR（米国通商代表部）からの視点に偏っていたのではないかという印象を私は受けた。

第二部は各グループに分かれての討議だった。政治過程グループではまず、講師の草野

厚慶応義塾大学教授が「日米政治過程の共通点と相違点」について話された。わかりやすくまとめられていたと思う。続いて参加者から様々な質問が出された。そんな中で「アメリカ側はSII（日米構造協議）で決めたことを少しも実行していない。アメリカも政治的効率の高い日本のような議院内閣制を導入すべきだ」という草野氏のラディカルな提言が記憶に残っている。これにはアメリカ人学生はかなり驚いていたようだった。参加者の知識や関心にバラつきがあったため、議論はあまりまとまりがとれていなかったが、「日米の政治過程の相違が両国間の摩擦を実際以上に増幅させている面がある」という点は皆、理解したのではないかと期待している。

第三部のパネルディスカッションは、講師陣が活達な議論を展開、時おり白熱する場面も見られ、盛り上がったのではないかと思う。



「日米貿易摩擦解決への展開」という観点からすれば、今回のシンポジウム全体でわれわれ参加者が多くのものを得たとは思われない。逆に、日本市場の閉鎖性や日本社会の特殊性ばかり強調されすぎた感がある。しかし、このシンポジウムを機にわれわれ参加者のうちの一人でも多くがこの問題に関心を持ち、真剣に考えるようになれば、それだけで十分成果はあると言えるし、また実際にそれは果たせたと思う。　　（山下　真）

安全保障フォーラム・総括

第43回日米学生会議において、我々が安全保障フォーラムという場を設けたのは、これこそが人類が直面する問題のうちで、最も重要なものであり、「平和」というものが人類が達成すべき最大の課題であるからである。世界はまさしく激動の時代にあり、既存の秩序が流動化し、新しい国際秩序の構築による平和の維持が求められている。その一方で世界的な民族意識の高揚に伴う民族自決の理念と世界秩序の安定との折り合いをどのようにつけていくか、ということも重要であり、かつ難しい問題である。

そこで我々は、日米の学生の代表が集う第43回日米学生会議において、「安全保障」の問題をフォーラムにおいて扱うこととしたのである。準備は他の行事と同じく、第43回日米学生会議実行委員会発足とともに開始され、約１年間が費やされた。その中で、当フォーラムの運営方針、絞り込むべきテーマ、講師（スピーカー）の選定、実地研修のプラン作成、フォーラム当日のスケジュール等々が、私と米国側の安全保障フォーラム担当のEric J.Mathesonとの間で連絡をとり合い合意を積み上げながら決定された。その際には、他の実行委員や一般参加者の意見を極力汲み取るように努めた。

タスク・フォース（担当者）は以下のように分けられ、以後それぞれのテーマについて調査し、定例会、フォーラム当日に発表を行った。

① 戦争（戦争とは何か、戦争は何故起こるのか、戦争を防ぐことは可能であるのか等）
② 兵器（世界の兵器市場の現状、軍縮・軍備管理を進めるにはどうしたらよいか等）
③ 日米安保（日米安保の意義、日米安保は必要か否か、日米の防衛協力の在り方等）
④ 国際安保（国際的な安全保障システムのあり方、国連を中心とした安全保障の意義とその問題点等）

講師の方は、我々のフォーラムの趣旨に最も合致する方に依頼すべく努力した。始めに講師ありき、ではなく、始めに問題意識ありき、であった。我々としては、この安全保障という問題の感情面を強調し、平和の大切さを訴えるというのにとどまらず、それを前提とした上で、冷静に安全保障をめぐる問題状況について分析、検討し、現在どのような問題が存在し、それをどのように克服し、そしてどのような国際秩序と理念を築き上げなくてはならないのかについて議論したかった。このような議論を経てはじめて、実現可能性のある「平和への構想」が生まれてくるではなかろうか。

そして、熟慮検討の末、国際連合で事務次長補を務められ、平和維持活動についても深い見識をお持ちの、国際基督教大学教授の功刀達朗先生と、防衛大学校教授で、日本語、英語の両方で防衛・安全保障問題に関して数多くの論文・著書をお書きになっている西原正先生を講師としてお招きすることに決定した。両先生とも、快く引き受けて下さり、ご講演だけでなく、担当者の行ったプレゼンテーションと小グループに分かれてのディスカッションにまでご参加下さった。当フォーラムは、功刀・西原両先生のこのような熱心なご指導により、机上の空論に陥らずに、それなりの水準を維持することができたのではないかと自負している。

また、北海道においては、防衛庁のご協力により、自衛隊札幌真駒内駐屯地において日本の防衛の現状について、防衛庁文官、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊それぞれの

幹部クラスの方々からブリーフィングをして頂いた。これもまた、机上の空論をさけ、現状を踏まえて地に足のついた議論をしたいという趣旨に基づいたものである。

以上において発表、議論された内容については、水野直子、白石史朗の書いた報告を参照されたい。そこで、以下では私なりの感想を簡単に述べたいと思う。

やはり最も強く感じたのは、今日ほど「平和」が必要とされているときはない、ということである。科学技術の発達に伴って、兵器の破壊力が途方もなく大きなものになってしまったことは、周知の通りである。戦争はプロフェッショナルである軍人のみによって遂行されるのではなく、いまや全国民をも巻き込むものであり、核時代にあっては人類の生存そのものが危機にさらされている。

このような認識は、甚大な被害を出した第一次大戦以後しだいに高まってきており、その過程で国連憲章なり日本国憲法なりが制定され、戦争の違法化が進行してきた。平和への理念と基本的な概念はほぼ確立しつつあるが、問題はこれをいかに実現するかである。

国際秩序の安定をはかるためには、国内社会におけるように社会構成員に優越した権力による法の実効性の確保が必要である。しかしこれを達成するには、多くの障害があり、短日のうちに完成できることではない。といっても、国際社会を眺めてみると、わずかずつではあるが国家主権の制限が進みつつある。いずれは、軍事力の保有と行使の権利は、国連警察軍にのみ与えられるべきであろうが、当面は国家による軍事力の保有も容認されざるを得ないであろう。

我々は、理想を捨ててはならないのであって、国際公益を維持・発展させるためのシステムの確立に向けて努力を続けなければならない。それは人類の福祉の向上をめざすものであり、人間が人間であるがゆえに当然享有する基本的人権を確保するのが人類究極の目標であるからである。そのためには功刀先生も力説されたように、安全保障という問題を戦争という問題に限定するのではなく、広く環境、教育、人口、経済といった問題を包括するものとして捉えていく必要があるのではなかろうか。

また、軍事面に限れば、当面は兵器の流通状況の把握から始めて、軍備管理・軍縮へと歩みを進めて、各国の軍事力を領土侵略者を領土外へ排除するために必要な最小限のレベルにまで引き下げることが課題となろう。そのためには、西原先生が言及された「信頼醸成」ということが重要となるにちがいないのである。　（コーディネーター：岸本　肇）

安全保障フォーラム

8月1日に、日米会話学院7階大講堂に於て、安全保障フォーラムが開催された。防衛大学校教授・西原正氏と国際基督教大学教授、功刀達朗先生の両氏を講師の先生方として迎えた。東西冷戦の終焉、湾岸戦争を経た今後の日米間の安全保障のあり方、アジアにおける日本の役割などを中心に全日にわたって議論がなされた。

今回の安全保障フォーラムのために、私達参加者は、1)国際安全保障、2)日米安全保障条約、3)武器、4)戦争のディレンマの4つのタスクフォース（担当者）に分かれ

て調査、発表、議論などの準備をしてきた。当日はコーディネーターである岸本肇とEric Mathesonによる開会のスピーチの後に続いて、各タスクフォースによる発表がなされた。

国際安全保障班のメンバー10人全員が、国際連合の成立過程、戦後46年間に果してきた平和と安全を守るための秩序・機能について発表した。次いで日米安全保障条約班は条約が締結後31年の間に果してきた役割、条約存続の立場と廃棄する両方の立場に立った発表を行った。三番目の武器班は現に存在する武器、兵器のとらえ方、世界経済にしめる軍需産業、兵器輸出の実態について、白石・遠藤・Hornungがまとめた。最後に戦争のディレンマ班は10人で戦争はどうして起きるのか、戦争を未然に予防する代替としての経済制裁の可能性と限界などについての疑問を浮き彫りにする形のスキットを演じた。

学生側の発表に対する、講師の先生方よりのコメントを頂いた。双方の先生共に高く評価をして下さった。午前中のセッションとして西原先生による変容する国際環境の中の安全保障問題の傾向・アジア状勢、今後の日米安全保障条約のあり方の主に3点についての講演が行われた。西原氏は、89年のマルタ会議以降のヨーロッパの軍縮、緊張緩和を述べられたうえで、ヨーロッパとは異なるアジアの不安定材料を1)朝鮮半島、2)台湾、3)香港の3つの地域的な緊張の事例について語られた。今後のアジア状勢は日米安保のような従来の二国間アプローチに加えて、現在ソ連・カナダ・オーストラリアなどが提唱するアジア安全保障協力会議（ＣＳＣＡ）構想などの多国間アプローチの可能性について講演がなされた。

午後のセッションでは功刀先生による湾岸戦争中と戦後のアメリカの行為、アジアの中の日本の役割、国連の今後についての講演が続いた。前国連事務次長補であられた功刀先生の実務経験を生かされた国連の未来像の提言は漸新であった。特に安全保障理事会を環境、資源、人権などの広義にわたった問題を討議する複数の安保理を設ける提言があげられた。また国連の従来のような紛争の事後処理から未然防止・予防外交へとシフトするべきと語られた。

双方の先生方は講演の後の質疑応答・小グループディスカッションと全日にわたるフォーラムに出席して下さり、私達学生の質問、意見に率直な返答をして下さった。この場を借りて深く感謝したいと思う。

（水野　直子）

ポスト安全保障フォーラム

13時40分きっかりに来た迎えの自衛隊のバスに乗り、ものものしい雰囲気のなか我々は札幌にある陸上自衛隊北部方面総監部に乗り込んだ。講堂で防衛庁の西氏のレクチャーの後、髪を短めに七三に分けたいかにも軍人らしい安村一等陸佐のレクチャーを、ＯＨＰやスライドによる豊富な図、最新兵器の写真などを混ぜて聞いた。

自身Ｆ－15のパイロットである岩崎一等空佐のレクチャーでは、極東におけるソビエト空軍は最近50％以上を最新鋭機で固め、依然その増強は続いていると言われ、ミグ31を始めソ連の最新鋭機第四世代戦闘機のスライドを見た。

藤田一等海佐は海上自衛隊の白い制服に身をつつみ、そのエナメルの白いくつは今にもタップダンスを踊り出しそうなほど印象深かった。

講演の後、矢継ぎ早の質問のうち、米軍の援軍なしでどれくらい自衛隊は侵攻するソビエト軍と戦えるかと江藤が聞いたところ、最終的に藤田キャプテンが「空１日、海１週間、陸１ケ月という人もいる。」と回答した。

講堂前での全員撮影ののち、偶然国旗の降納になり、自衛官の方々は全員敬礼してしまったので大将と呼ばれる筆者も思わず敬礼して

しまった。帰りのバスはすでに緊張感もなくスクールバスと化し、我々は大いに平和を謳歌した。こうしてトップガンのような一日は終わった。自衛隊側のよく準備された完璧な三軍のブリーフィングは、全員に好印象を与え、なかなか得られない経験をさせてもらったことに我々は深く感謝した。以上が８月11日の作戦内容であり、任務は無事終了した。

（白石　史朗）

民族問題フォーラム・総括

当フォーラムは、90年代の世界を読み解く最も重要なキーワードの一つである民族問題に関し、アイヌ民族問題等、少数民族問題に焦点をあてて行われた。米ソ冷戦構造崩壊以降のヒト・モノ・カネを始めとする世界のボーダーレス現象の一方、各地で民族主義の台頭・人種差別問題の頻発・先住民族復権運動等が起こっている。ボーダレス時代におけるコミュニケーションの共通基盤として、まず多様な人種・民族の存在を認識することが求められている。こうした点をふまえ、様々な人種・民族問題を契機として、次代を担う我々学生が世界市民としての資格（world citizenship）を獲得するという視点でこのフォーラムに取り組んだ。目的は共生の模索である。

民族問題フォーラム・プログラム及びタス

クフォース（担当者）は以下の通り。

＜東京セッション＞　7月31日
基調講演　Juan Williams氏
（ワシントン・ポスト政治部記者）
John G. Russell氏
（千葉県立衛生短期大学研修員）
タスクフォース全体討論

＜札幌セッション＞　8月12日
実地研修　北海道大学農学部付属植物園博物館
（解説　難波拓雄氏・北方民族資料室）
各タスクフォース・プレゼンテーション準備

＜民族問題フォーラム当日＞　8月13日
基調講演　野村義一氏
（社団法人北海道ウタリ協会理事長）
小グループ討論1.
小グループ討論2.
（含準備グループ・プレゼンテーション）
個人的討論

＜準備グループ＞
1．先住民族問題（アイヌ民族、ネイティブ・アメリカン）
2．歴史的民族問題（在日韓国・朝鮮人／部落民、アフリカ系アメリカ人）
3．難民・移民者問題（難民／外国人労働者、移民労働者／アジア系アメリカ人／ヒスパニック）

東京セッションはオリンピック記念青少年センターで、共にアフリカ系アメリカ人である上記二名の研究者を招いて行った。

ウイリアムズ氏は日本における黒人あるいは外国人一般に対する人種差別・日本の経済成長と日本人の対外意識との関連を研究するため来日した。講演では日本人が人種・民族問題を避けている現状を指摘し、日本人のアウトサイダーに対する強い拒否反応が強調された。又、公民権運動以降のアメリカにおける人種・民族問題の複雑さに触れ、基本的な人権を獲得するために闘った古い世代とすでにそれを獲得した社会で育った世代の二つの方向性を指摘し、かつて、白人、黒人の問題であった公民権が、これからは様々な色が集まっての公民権となる変化が強調された。

ラッセル氏は日本人の黒人観と差別意識・日本人の精神障害者への差別意識等の研究を行っており、講演ではまず人種・民族問題に内在する社会的権力関係を指摘した上で、人種・民族の概念規定、日本における単一民族神話とその社会構造について言及した。又、日本人の黒人観に関しては、近代化の過程において西欧からその差別的偏見をそのまま受け継いでいった歴史的背景を指摘し、すでに多民族によって構成されている社会に、政治・教育環境が追い付いていない現状を様々なマイノリティを引き合いに出して論じた。

札幌セッションは、休館日にもかかわらず難波氏及び関係者各位の御協力を得て、北大付属博物館・北方民族資料室にて実地研修を行った。ここには北海道有数のアイヌの民俗資料が展示されており、異文化としてのアイヌ民族・文化（世界観・宗教観）を知る上で貴重な資料を多数見学することができた。解説は氏にお願いし、通訳は米国側実行委員山崎が担当した。

民族問題フォーラム当日は、北海道ウタリ

協会理事長としてアイヌ民族復権運動に第一線で活躍していらっしゃる野村氏の基調講演から始まった。通訳は日本側実行委員大島が担当した。

氏はまず、和人によるアイヌ民族侵略の歴史に触れ、特に明治政府による同化政策や現在に至るまで続く旧土人保護法の凄まじい問題点を指摘し、アイヌ民族は世界の先住民族の中でも最も権利保証のされていない民族の一つであることを強調した。又、福祉政策の一環としてではない、抜本的改革・民族政策としての政府に対するアイヌ新法制定要求運動・ウタリ懇話会設立に触れ、この新法が民族の存続に関わる現状が論じられた。世界の潮流としての先住民族復権運動の高まりに伴う、アイヌ民族の国連先住民族作業部会やILO総会への参加に関し、1993年が国連先住民族年となることが指摘された。質疑応答ではアイヌ民族・文化に関する民族教育の現状や差別撤廃への取り組み等が話された。

小グループ討論では基調講演を踏まえ、又各タスクフォース・プレゼンテーションが加えられ複雑な人種・民族問題に関し深い議論がなされた。特に様々な人種構成から成る米側参加者からは、マイノリティあるいはマジョリティとしての自らの体験に基づくコメントが多数寄せられ、問題の複雑さを認識させられた。差別撤廃のための教育環境の整備や自らのエスニック・アイデンティティの問題にも言及された。個人的討論では二人一組となり、よりパーソナルなレベルでの人種・民族問題に関する意見共有・議論を行った。

非常に幅の広く、微妙かつ複雑な問題ではあるが、今や人種・民族問題は避けて通ることの出来ない政治・社会問題である。3セッションにわたって行った議論も多岐にわたり、総括することはできない。コーディネーターとして、社会的に現在マジョリティである側の自分というものの立脚点（アイデンティティ）をどこに置くかという問題意識を常に抱えざるを得なかった。あるいはマジョリティ／マ

イノリティといった二項対立をどう処理するかといった問題も含まれるであろう。北大博物館で見せていただいた数々の民俗資料も、アイヌ民族の世界観・宗教観を知る上では貴重ではあるが、現存するアイヌ民俗の問題として考えた場合（現状は）彼等を歴史的産物に隠蔽させてしまうことになり兼ねない。自らの内に現実に存在する少数者差別意識を見据えつつ、他者と出会う為の重層的アイデンティティの必要性を強く感じさせられた。やり方次第で差別の拡大再生産となり得るこうしたフォーラムの重みを結論づけるだけの余力は今の私にはない。関係者各位、特にプログラミングにまで御協力いただいた北海道ウタリ協会のスタッフおよび北海道庁の方々に厚くお礼申し上げたい。　　（天野　環）

民族問題フォーラム

民族問題フォーラムは最終地、北海道にて２日間にわたって開かれた。北海道はアイヌ文化の中心地であり、日本において民族の違い、問題を肌で感じるのに適した場所であるからだ。一日目には、北海道大学の植物園でアイヌの資料館をみてまわり、館長にアイヌの歴史と現在の様子を聞き、２日目はウタリ協会会長、野村義一氏の熱のこもったスピーチを聞いた。10年程前まではアイヌの人々自身自分達の存在を隠そうとしていた。しかし現在では徐々にではあるが自分達の文化を守ろうとする動きがさかんになってきているそうだ。フォーラム中、自分の知らないことの多さに驚いた。民族問題には関心があったので様々な本を読んでいた。しかし、まわりのほとんどが日本人という環境で、実体験として、人種や民族による差別、偏見を感じることがあまりにも少なかった。アイヌ民族に対しても、その存在はもちろん知っていたものの、気にとめることは、ほとんどなかった。外国人に日本を紹介するときも、“我々の国は単一民族・単一文化という特徴があります”などと言っていた。つまり自分のとっていた行動自体無知に等しいのではないかと思うようになった。人種・民族問題においては、無知自体が差別につながる。無意識にまた無邪気に差別を行うことになるからだ。自分に罪の意識がなく差別してしまうのである。ともすると両者が訳もわからず傷つけあうことになる。解決策としては月並みだが、異なる者を理解しようとする努力を惜しまないことだと思う。もちろんそうすることは大変困難なことだと思う。世界には無数の民族・宗教・考え方がある。また時には自分と全く反対の考え方をする人々もいるだろう。しかし、異なる民族の人々が、また我々日本人が気持ちよく生きていくためにも、異なったものを理解する思いやりを忘れてはいけないと思う。

卑近な例ではあるが、日米学生会議自体様々な文化の集まりである。２つに大きくわけると、英語と日本語を母語とする人々の集まりである。その中で自分は理解する思いやりを

怠っていた気がする。私は会議中アメリカ人となかなかうまくコミュニケーションがとれなかった。もちろん、言語上の問題もある。しかしそれ以上のことがある。それは、相手の言っていることがわからなかったらどうして何度も聞き返さなかったのだろうか、ということ。自分の言いたいことがあったら、たとえそれを英語で伝えることが困難と思えても伝えるべきであり、それができなかったということ。米国側の参加者が、英語を話す速度を遅くすることが日本側への思いやりなら、上に挙げたことは、日本側参加者の米国側への思いやりである。

日常生活において、異なったものを理解する努力はたびたび忘れられるものであり、注意して常に頭に留めておくべきであろう。

（野村　研二）

プレ民族問題フォーラム

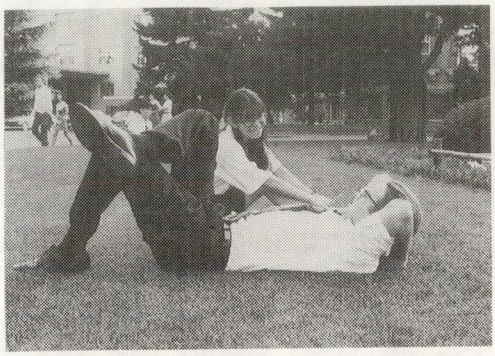
7月31日の民族問題フォーラムの準備時間は、タスク・フォース（担当者）となった日米各20名がまずホアン・ウイリアムズ氏とジョン・ラッセル氏のレクチャーを受け、それに続くディスカッションの時間で差別とは何であるかを実際に体験し考えてみようというものであった。

ウイリアムズ氏は、公民権運動の歴史を描いた“Eyes on the Prize”でよく知られているが、講演では、日米両国における差別について話され、両国とも多数を占める側に立つ者が、差別をする側にあることについては同じであると述べられた。また、日本の広告に出てくる女性の30％が白人女性である事など日本における白人優位についても言及され、参加者にとっては驚きでもあるとともに考えさせられる点の多いレクチャーであった。

次の千葉県立衛生短大で研究をされているラッセル氏は、より専門的にEthnicityの観点から、まず可視、非可視的マイノリティ、アメリカのRaceとGender、日本の更にイエ制度を加えた民族問題について話され、続いてその問題に対する両国政府の姿勢について言及された。ラッセル氏の専門である、日本における黒人観についての話の中では、黒人に対するステレオタイプがアメリカのそれとよく似たものがあると述べられた。講演後の質疑応答では参加者が、それぞれの視点にひきよせて考えようと盛んに質問が出され、ラッセル氏も熱心に答えて下さった。

私達は、講演を様々な差別に関する知識の共有の場、今後問題を考えていく上での手掛かりとし、ディスカッションへと移った。コーディネーターによりExerciseが用意されていたのだが、講演の中で触れられた部落民についての米国側参加者の質問を契機に、一般的にアメリカでは馴染みの薄い日本における差別問題、そして米国側参加者個人個人の差による体験談が話されるという流れになっていた。部落民については、日本側が定例会で勉強してきたことを参考に部落の歴史や現状、また渡辺の部落問題研究所訪問の体験談などから、私達自身が教育の中で、日本にある差別をどのように知らされてきたかということについてまず多くの参加者から語られた。日本における差別がどのようなものであるかが、米国側参加者によく伝わったものと思われる。

これに続いて、人種的差異が日本以上に可



視的であるアメリカでの個々の参加者の差別体験や、差別とまではいかないまでも差異を感じ、感じさせられる時の心情や、実にパーソナルな部分に至る話までが語られた。周知のことではあるが本当に様々なエスニシティを持つ参加者から成るアメリカの現実を実際によく知る、実によい機会となった。また40名という人数にもかかわらず多くの人が発言の機会を得、日米という国の壁を越え、差異とは何なのか、差別とは何であるかを会議全体を通して考えていく契機になったことは間違いない。（長野　宇能）

ジェンダー（個人における男女の平等）コロキアム・総括

ジェンダーコロキアムは８月５日、新潟県黒川村胎内パークホテルにて開催された。２日前の中間反省会に於いて、日米間で、コミュニケーションの難しさ、会議への期待と現実の間でのギャップ等が言われたが、その後最初の全員参加のイベントであった。このコロキアムは、もともと自分達の最も身近な問題であるジェンダーについて、今までの経験や考えをもとにして自由に意見を交換する場として設けたものである。東京滞在中に出て来た不満がここで少しでも解消されたら、との願いと共にコロキアムは始まった。

話し合いのきっかけとなる問題提起を、と位置づけされたタスクフォース（担当者）によるプレゼンテーションから始まった。タスクフォース（担当者）は、「男女間の関係」「社会的に作られる男性と女性の役割」「ジェンダーとアイデンティティ」「結婚の在り方」の４つのグループに分かれ、各々の問題に焦点を置いた発表が行われた。

「男女間の関係」グループは、日本の伝統的なものとしてお見合い、現代的なものとして合コンを、又アメリカの伝統的なものとして高校生のデート、現代的なものとしてパーティーでの出会いを紹介した。役割分担が日米逆にされ、米国側参加者が日本の発表を、そして日本側参加者がアメリカの方の発表を行ったが、細い所までよく表現されており、会場は何度も笑いの渦となった。決して書物等では学べない文化背景を知る良い機会であったろう。

「社会的に作られる男女の役割」グループは、ＰＴＡ会合の設定だった。教師は非常に保守的な者、革新的な者、そしてゲイの者の３人が登場した。親側としては日本の古典的夫婦、未婚の母、男女全てにおいて同等を推進する夫婦、アメリカの典型的と言われる夫婦である。様々な親からの質問に対し、教師

は各々の立場から考えを述べ、又周囲の親もそれに対し意見を述べるという形で進行された。１つの事柄も立場が違うとこうも視点も変わるのか、と改めて思わずにはいられなかった。

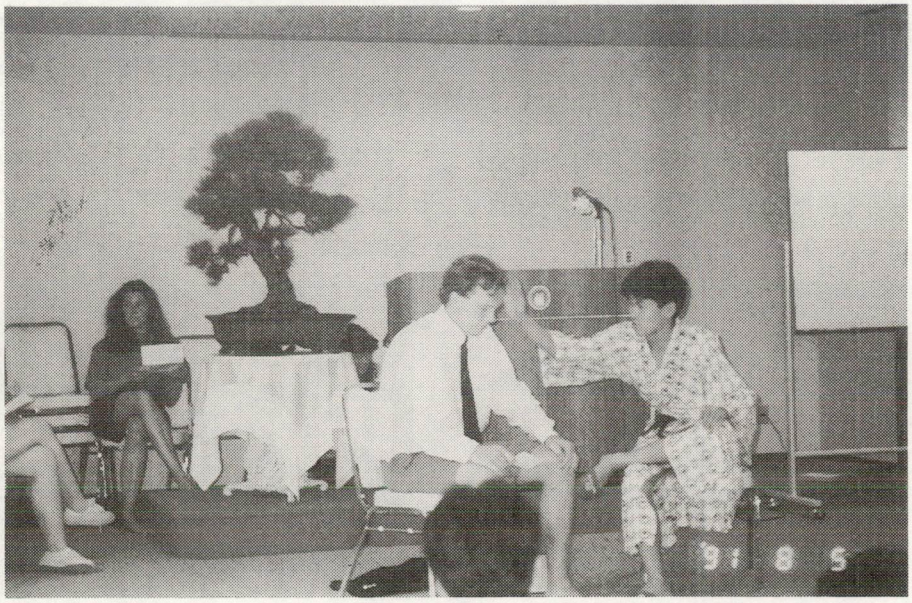
「ジェンダーとアイデンティティ」グループの発表では、全員眼をつぶって横になるように言われ、一風変わった形で始まった。そして声が流れて、自分も周囲も自分が女性だとずっと信じて生きて来たのに、思春期に病院に行ったら、実は自分の染色体は男性のものだったらどうするか等、男性或いは女性であることの意味を問いかける質問がなされた。眼をつむることにより自分の心に自分自身で問いかけられたように思う。その後、グループのメンバーの体験に基づく寸劇が発表されたが、誰もが自分と登場人物を重ねながら見ていたようだった。

４つ目のグループ「結婚の在り方」では１組の日本の夫婦の結婚から離婚までを、女性が仕事を続けることにより発生する問題や子供がないことにより外から受ける圧力等をからめながら追っていった。最後の場面は裁判形式で夫と妻の法的代理人が各々の主張を行い、裁判官が観衆に判決を問いかける形で幕を閉じた。結婚一身近ではあるが我々の多くにとってはまだ未知のものだ。結婚したら直面するであろう問題を今学生の立場から考えるきっかけとなったに違いない。

タスクフォースによる発表の後はペア・トーキングが行われ、同性の相手と異性の相手とどちらとも１対１で話す機会を得た。これは２人が互いに心を開いてじっくりと考えを交換し合うのに本当によい場であった。その後夕食をはさんで各グループ８名でのディスカッションが行われた。ここではペア・トーキングで話し合った事を共有したり、自分の疑問に対し残り７人に各々に答えてもらったり、様々な事が行われた。

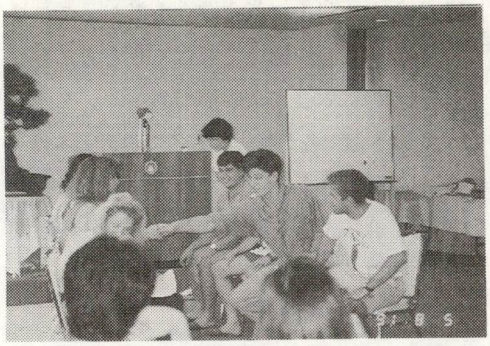
時間が経つのは早く、気付くともう終わりの時刻となっていたが、コロキアムという名にふさわしい自分の個人的な考え、意見を交換する場が持てたと思っている。

（コーディネーター：大島　葉子）



ジェンダーコロキアム

皆待ちに待った（？）ジェンダーコロキアム……我々の日常意識そのものに問題の所在が即結するために、会議中常に熱のこもった議論が繰り返されたこのジェンダー、イベント当日は、タスクフォース（担当者）四組の趣向を凝らした発表からスタートした。



（1） Male−Female Personal Relationship——日米それぞれの新旧デートの違いを寸劇でみせた。相手の親に気に入られようと気を遣う男の子、三高を求めてしまう女の子など、等身大の若者は古今東西変わらない。しかし個人的（パーソナル）な私事であることを自明とする恋愛や男女関係が、“普遍的”“三高”といった社会価値によって知らず知らずの間に公事に搦めとられる因果をみて、日常の自明性の虚実（パロディー）を見せられる思いがした。

（2） Socialization of Male & Femele——保護者会議という場面設定の下、学校教育における性別役割分担の問題を中心に様々な考え方が提示された。典型的な教育ママ、母子家庭を支える進歩的な職業婦人、理想主義的な教師等々が、それぞれの正当性をふりかざす。が、お互いの接点を見出だすことの困難さは深まるばかり……まぎれもないその時代々々の様々な人間の思惑が、混然一体と次世代の“社会化”を完成させるという事実だけは残ったのだ。

（3） Gender & Identity——まず皆で床に寝転んで目をつむり、人生中途での生理的性認知の誤謬の発覚、生殖機能の喪失といったことの追体験を試みた。次に各メンバーの個人的体験を再現してみせた。性差による社会評価の不合理、慣習や惰性によって育まれる性意識……先天的（セックス）、後天的（ジェンダー）“性”とは何なのか？で、その“性”を選ぶ権利とは何なのか？根本的な問いかけに戸惑ってしまう。

（4） Marriage——愛し合って結ばれたはずの２人が、良妻賢母を求める夫と、自己の才能を社会で試探することを願うという対立で離婚裁判へとつき進んでしまう。家庭とは女性にとって或いは男性にとって何なのか？経済的自立＝女の自立なのか？結婚とは？制度とは？我々の多くが潜在的当事者であるだけに、自身をもどかしく感じる自分を隠しきれない。

以上の発表のあと、ペア・トーキングが日米異性間、日米同性間で約一時間ずつ行われ、

その後更に八人ずつに分かれて、各自のジェンダーに関する認識、経験談、問題意識等を分かち合った。

私にとって皮膚感覚で衝撃だったのは、米国側参加者（の多く）の性の認識の自主自律性である。よくよくジェンダーを語る際、彼等は性を二元化してしまわない。少なくともそれを絶対視しない。そうした認識の中に、日常性の構造に埋没しない“個”の意思と、よりトータルな“人類”としての性の解放の予感をみてとったのだが、と同時にその孕みは、“個体我”へと収斂していく“近代”へと吸い込まれかねないのではないかとの一抹の不安も感じずにはいられなかった。

（森村　王英）

コミュニケーション・コロキアム・総括

日米学生会議に参加した誰もが必ずぶち当たる問題の１つはコミュニケーションの難しさではないだろうか。国籍の違う人間の集まる日米学生会議の例を出すまでもなく、我々の生活においてコミュニケーションは常に行われており、人間生活そのものと言ってもよい。しかし、我々は日常生活において、当然のごとくコミュニケーションを行っているため、その重要性、難しさ、影響力についての深い認識は持っていないことが多い。科学技術の発展にささえられたこの情報化社会におけるコミュニケーションの現状と、文化背景の異なる学生が個人の体験をもとに話し合うことで本会議においてはもちろん、その後の個人の社会生活の中でも役立てていこうと考えたのが当コロキアムであった。

コミュニケーションと一言に言っても、その意味するところは広く、準備の段階で我々の多くも驚かされたが、身近なコミュニケーションについて考えるため以下の４つのグループに分かれて準備を行い、次のような内容の発表を行った。

コミュニケーションとテクノロジー
- 技術の発達とコミュニケーション形態の変化
- 視覚・聴覚障害者への対応
- ダイヤルQ²などの社会現象

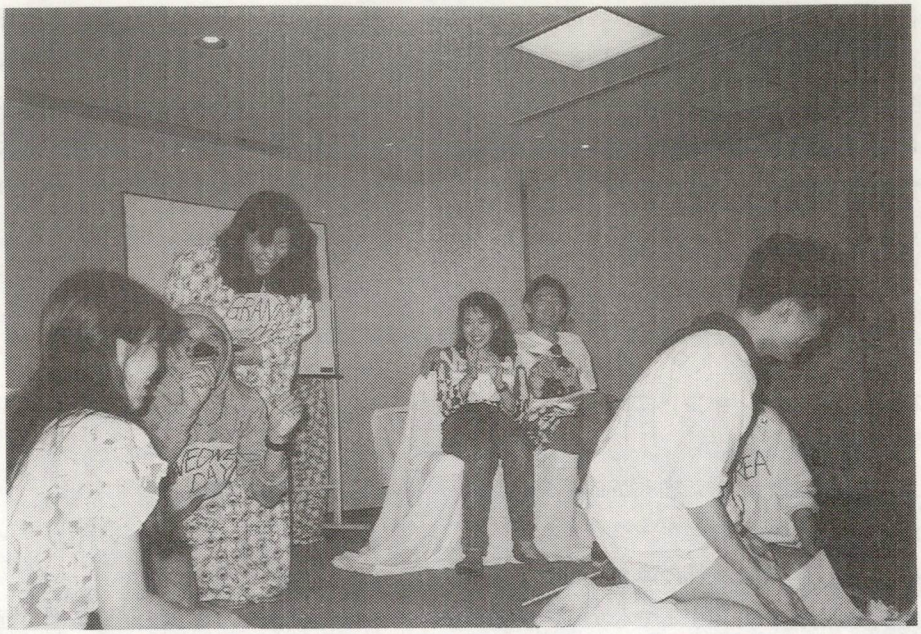
マス・コミュニケーション
- マスコミによる個人の価値基準の画一化
- 過剰報道による人権侵害

個人間のコミュニケーション
- 意思疎通の形態と効果
- 授業形態の内容と関係
- 教師と生徒との関わり合い

視覚的コミュニケーション
- 非言語コミュニケーションの要素とその効果の大きさ（視線・表情・容姿外観・ジェスチャー・沈黙・音楽・色彩など）

次に日本人有志による寸劇が行われ、日本人が見たアメリカ人の典型的なコミュニケーションのとり方がテーマとなった。同意して笑う多くの日本人学生と、笑いながらも自分達の特徴に気付かされ、驚きを隠せないアメリカ人学生の姿が対照的だった。

次に以上の発表から得た個人の意見・感想を持ち寄り、小さなグループに分かれての話し合いが行われた。友人間、異性間、親子兄弟間、世代間、多国間でのコミュニケーション、手書きとタイプ、手紙と電話、最後には日米学生会議の中でのコミュニケーションへ



と話題は尽きなかった。

夕食後はコミュニケーションの要素を多分に含んだゲームが行われた。ここでは全員が大きく２つの集団に分かれる。両集団とも独自の社会システムとコミュニケーション様式を持っており、相互の事情は知らない。そこにスパイを送り込んで相手集団のシステムを知るというゲーム。これにより人々の間に日常どれほど複雑なコミュニケーションが成立っているかを認識し、本コロキアムのまとめとするのが目的だった。この目的は無事達成されたように思うが、予期せぬところで大きな問題が持ち上がった。一方の集団の規則に、女性は男性の許可なしでは話せないというものがあり、これが一部のアメリカ人女性の反発をかったのだ。途中で他集団に“亡命”する者、ゲームを拒否する者までいた。アメリカにおける男女平等運動の底力を感じた。

最良のコミュニケーションの形態などはもちろん存在すまい。数限りない状況の下で数限りない人々が意思疎通を行うとき、そこには数限りないコミュニケーション様式が存在する。人間関係を円滑に運ぶことができ、かつ、その人らしいコミュニケーションの方法を、我々は一生通じて模索しているのだ、と感じた一日であった。

（コーディネーター：小林　隆司）

コミュニケーション・コロキアム

８月７日、黒川村でコミュニケーションコロキアムが開かれた。会議が始まって２週間。反省会で日本側とアメリカ側の参加者の間のコミュニケーションの問題点が挙げられた後でもあったので、活発な意見が出された。

まず、４つのタスクフォース（担当者）がそれぞれスキット（寸劇）をつくり、問題点を提示した。マスメディアのタスクフォース

では、殺人の容疑者として報道されてしまった人が、社会に受け入れられなくなってしまうケースを取り上げ、メディアと人権の侵害について考えさせた。また、雑誌などが社会にどのような影響を与えているのかも取り上げられた。また、科学技術の発達がどのようにコミュニケーションの形を変えてきたのかを考えたタスクフォースもある。科学技術の発達で、聾唖者も自由に意思を伝達できるようになった反面、人間疎外的状況が生まれてきた事実も否定できない。文化が異なれば、感情の表現の仕方も違うということを日本人の夫婦とアメリカ人の夫婦の愛情表現の違いや、消極的な日本人留学生と積極的なアメリカ人学生との対比で現したスキットも会場の笑いを誘った。色や表情からどんな印象を受けるのかを試すことで、非言語的コミュニケーションの重要性を再確認させたタスクフォースもあった。日本側の有志によるスキットもおもしろかった。松本扮するAndyの誕生会での一場面。日本人が抱いているアメリカ人のイメージを大げさに表したものだ。

異文化間コミュニケーションの難しさを疑似体験させてくれたのが、BAFA BAFAというゲーム。言語も価値観も全く異なる社会でどのように意思の伝達をはかってゆくのかを体験できた。80人が意味不明な声を出して部屋中を動きまわる様子は実に異様ではあった。このゲームで自分の文化を基準に異文化を評価してしまうのがどんなに危険なことかを認識できた。

この後、小グループに分かれてディスカッションを行った。スキットやゲームの中で提示されていた問題を自分の体験と重ね合わせて、活発な話し合いができたようである。

こうしてコミュニケーション・コロキアムは成功のうちに終わった。私は、このコロキアムの成果が、残る2週間の会議の中で生かされることを望んだ。

（渡辺　文枝）

第３部　その他の活動

Ⅰ．準備活動（１）

＜総　　括＞

第42回日米学生会議の終盤に、第43回会議の実行委員が日米各々11名、10名選挙によって決定した。バークレーにおいて３日間にわたる昼夜を通した会議の中で、第43回会議の枠組み・テーマ・開催地が決定され、閉会式で発表された。この後日米双方の実行委員は本会議まで顔を合わすことはなかったが、電話や手紙・電子メール等で連絡をとりながら準備を進めた。

日本側実行委員は関東地区10名、関西地区１名とに分かれ、毎週一回以上の定例ミーティングと月一回の合宿を行い、繁忙期には毎日事務所で活動を行った。

準備活動は、会議のトピックごとに分担される内容面と、その他の仕事ごとに分担される枠組作りの側面に分かれた。枠組作りの面においては、プログラミング活動・選考・広報・財務・経理に分かれ10名が協力しあって行われた。

（大塚雄三）

＜財務・経理＞

日米学生会議の予算は、主として一般賛助団体賛助金（各財団・企業及び地方自治体）と国際教育振興会賛助会賛助金によって成り立っている。この賛助金に関する集計・総括・情報収集等財務活動一般を岸本（財務）が担当し、準備期間・本会議中等諸経費支出一般の管理・総括を天野（経理）が担当した。

日米両主催団体の協定により、第42回会議以降は受入れ国側が会議中の全諸経費を負担

する予算システムとなったため、協定後初の日本開催となった本年度は当初かなり危機的予算状況が想定された。にも拘わらず、各賛助団体のご協力・叱咤激励によりこうして本年度会議を成功に終わらせることができた。特に本年度は日本開催ということで、会議開催各地の地方自治体にはプログラミング等を含めて多大なご協力を頂いた。謹んで御礼申し上げます。

御協力有り難うございました。

（天野　環）

＜プログラミング＞

プログラミングは、会議全日程の内容の大枠を作り、各会議開催地間におけるスケジュールの調整・交通の便宜など本番の会議活動が円滑に行われるように準備することをその主な活動内容としている。開催地ごとに担当の実行委員を決め、それぞれが地域の自治体、宿泊施設、企業等と連絡を密にとり合った。そうやって細かく詰められた議事内容をプログラミングが最終的に30日間の日程にまとめた。

今年は特に開催地と会議とのつながりを重視して積極的に現地へ足を運んだ。各自治体等との話合いから、スケジュールに関するアイディアが生まれたことも数多い。有形無形の援助を各方面のたくさんの方々から頂くことになった。我々の会議がこういった方々の期待の下に成り立っていることに、感謝の念を抱きながら我々の責任を改めて痛感する一年間であった。

（深町あおい）

＜広報・選考＞

広報は、日米学生会議の存在を広く社会に知らせること、新参加者の募集を主たる目的として行われた。前者の目的を達成するために各種メディアに働きかけ、会議についての記事掲載を実現させた。また12月を中心に各大学において会議の実施要領を含めて説明会を行った。２月には作家の石川好先生、東京女子大学現代文化学部教授の猿谷要先生を招いて講演会を催し、併せて第43回会議の最終説明会を行った。また６月には、東京大学法学部教授の五十嵐武士先生の講演会、その後で会議の雰囲気を味わってもらうために小グループ討論を行った。後者の活動としてはポスターの作成・発送と実施要領の発送を各大学、請求者に対して行った。

選考は、第43回実行委員間での会議に対する考えを話し合うことから始まった。そこで合意を得られたものに沿って活動を行った。選考担当が昨年より一人増えたので実施要領の編集を担当した。前年の活動は、説明会の実施や受験地決定など広報との連携プレーが重要であった。１月初旬の試験問題作成、実施要領発送を契機に本格的活動に入った。受験者からの問い合わせに対する要領発送、受験願書処理、選考試験実施に当たっての準備に追われた。選考試験は３月上旬より会議開催地の一つである札幌を皮切りに新潟・東京・大阪を含む計６ケ所で行われた。そして30名の新参加者を迎えたのである。広報選考活動を遂行するに当たって他の実行委員の協力が活動の充実につながった。

最後に広報・選考活動に対して温かい御支援・御協力を頂きました関係者の方々、会議のＯＢ・ＯＧの皆さんに御礼申し上げます。

（江藤　一）

＜関　　西＞

関西地区でも規模は小さいながら東京同様、財務、広報、選考などの準備活動が全て行なわれた。10人の実行委員のうち１人だけが関西という状況で、これほど東京が遠く感じたことはなかった。この距離を埋めるためほぼ１カ月に一度の割合で東京で実行委員の合宿が行なわれたが、会うたびに苛立ちと焦りを感じ、そして、一人だけとり残されていく思いが常にあったのは正直なところである。しかし、人数の少ない分、過去の参加者の結束が強く、広報活動など、彼らの協力なしには考えられなかった。

主な内容としては、12月に関西学生団体交流会、１月に高木信二大阪大学助教授による講演会を行なった。特に高木氏による講演は良い評価を得た。

５月の全体合宿の後は、定例会が週に一度行なわれた。小人数のため東京地区のような活気には欠けたものの一人の発言時間が長くとれ、内容面で奥深い議論ができた。また、テーマディスカッションという時間を設け、各自が総合テーマについて、個人的体験、将来の夢を交えながら思うままに語りあった。抽象的なテーマを自分の言葉で解釈することにより、会議を自分のなかにどう位置付け、どのような意義を以て望むのか確認することができた。また、より多くの人に会議の擬似体験をしてもらうために、一般学生と共に、京都部落問題研究所を訪れ、奥山峰夫所長よりお話をうかがった。

定例会の報告を兼ね全国の参加者と連絡を密に取ることで、我々の結束は高まり、かつては遠く感じられたあの距離が、いつしかずっと近くなっていた。

（小林　隆司）

II．準備活動（２）

＜全体合宿＞

1991年（平成３年）５月４日から６日の２泊３日、東京代々木にあるオリンピック記念青少年総合センターにおいて全体合宿が行われた。この全体合宿は文字どおり、参加者全体が集まるものであり、全参加者が各々親睦を深めると共に、本会議の準備の指針を決めて行く重要な機会である。

全体合宿と直前合宿との大きな違いは、先程も述べたように前者は、本会議に向けて準備を始めるきっかけのようなもので、後者は本会議からの手順を確認するようなものである。

本年度の参加者出身大学の内訳として、主に関東・京阪地区、それ以外は北海道・広島・下関が挙げられる。実に様々な場所から集まってきた。多くの参加者は初めて逢うのだが、初日に自己紹介前の様子を見てみると、旧知の友人と久しぶりに逢ったように打ち解けていた。全体合宿前に一体どんな参加者と一緒に会議を作って行くのか、不安と期待で一杯だったが、全体合宿が始まりそんな不安は吹き飛んでいってしまった。

さて２泊３日の全体合宿は、JASC（日米学生会議）名物自己紹介から始まった。一体何が名物なのかと言うと、参加者一人一人にニックネームをつけることである。実際相手を呼ぶときに本名で呼ぶのではなく、ニックネームで呼び合うのである。これは、参加者同志がリラックスできる関係であるようにす

る為のようである。

しかしただでさえ40人の本名を覚えるのも大変なのに、初めて呼ぶ（或いは呼ばれる？）変わった名称で多少なりとも戸惑ったが以外とすぐに慣れてしまった。（＊忠告＊JASCでは会議後もお互いをニックネームで呼び合うので、名称決定は慎重に行った方が良いかも知れない?!）

自己紹介で和気藹々となってから、本会議中に参加する分科会を始め、フォーラム・シンポジウム・コロキアムについて話し合ったりした。この際、一人一人の担当を決めて行き、それと同時に如何にして本会儀に向けて準備を推し進めて行くか決めていったりした。また関東・京阪地区では、定例会が毎週土曜

日に開催されているので、合宿時に定例会で何を発表するかも決めた。その他にも本会議中に開催される、ジョイント・オリエンテーション（日米合同親睦会）や会議中に着る揃いのTシャツについても話し合った。

2泊3日と言う短い間ではあるものの、実に様々なスケジュールが入っていたが、そんな中でも参加者同志で、遊んだり話し込んだりして親睦を深めることが出来た。私のように地方出身者は全体会議まで多くの参加者と逢う機会は殆ど無かったが、それでもこの全体合宿を通じて、自分も含め参加者全員が日米学生会議の参加者であることを強く認識が出来たのではないかと思った。

（松井　恵一）

＜定例会（関東）＞

関東での定例会は毎土曜の午後1時から5時まで日米会話学院の教室を借りて行われた。全体合宿後から本会議が始まるまでの2ケ月半は、非常に短かったけれど多くのことが凝縮された期間だったといえよう。

毎週前半は各タスクフォース（担当者）のレジュメに基づいての勉強会、すなわち本会議のための知識の蓄積、後半はシンポジウム・フォーラム等の会議中の実際の内容のつめであるプレップタイム（準備時間）、最後にＪＥＣ（日本側実行委員）からのインフォメーションという形で進んでいった。毎週トピックが変わる勉強会は、タスクフォースが非常に力を入れて準備していくためにいつも時間が足りず、「もっと多くのことを皆に伝えたい」と思ってしまうほどだった。それ以外の人も、自分の今まで関心が薄かった分野にも目を開かされ、新しい知識を吸収し、いい刺激となった。プレップタイムでは各人が意見を出しあって、少しずつ案を煮つめていった。話し合いは時間内で終わらず、定例会はいつも日米会話学院のビルの前に多くのＪＡＳＣ

er（参加者）が群がる姿が見られたし、平日に事務所へ来たり電話をかけあったりして準備を進めた。関東地区以外の人もほぼ全員、一度はお土産片手に定例会に参加し、ＪＡＳＣerの自覚を新たに帰っていった。またＯＢが遊びに来てくれることも多く、彼らのＪＡＳＣ（日米学生会議）に対する特別な思いを感じたりもした。

この２ケ月半は一週間が土曜日を頂点としたサイクルで過ぎていった。ただでさえ、研究会やクラブ活動等で忙しい人が多いのに、皆土曜日に備えて、本を読み、他のメンバーとプレゼンテーションについて話し合った。そうする中で、これから始まる本会議は自分で作るものだと言う意識を高め、また、お互いをよく知るようになっていったのだと思う。忙しかったけれど、皆の眼は輝いていたなと思う。私達にとって、定例会をもった日々もＪＡＳＣそのものであり、意味も大きかった。

（比企野　慶子）

＜定例会（関西）＞

関西の定例会ではまず場所探しから始まった。森村さんが部屋探しに奔走してくれ、大阪大学の研究室の一室を借りることができた。５人という少人数は『融通がきく』という点から非常によかったと思う。定例会への全員参加を目的として、日程の変更が何回かあったが、これも少人数だからこそできた。

さて定例会の内容だが、インフォメーションなどは関東から１週間遅れで届くので、関西では各々の属するシンポジウム・フォーラム・コロキアムに関して調べたレジュメの発表と、それについてのディスカッションがおもな内容であった。

関東では人数が多くて１人当たりの発表・ディスカッションの時間が少ないのに対して、関西ではあり余るほどの時間がとれ、深くディスカッションできたことは、学問的にも他のＪＡＳＣer（参加者）を知るといった意味でもとても有意義であった。時には予定していた時間では足りなくなり、夕食を取りながらディスカッションの続きをしたこともあった。

準備期間中に１回、民族問題フォーラムに関連して、京都の部落問題研究所を訪れるフィールドトリップ（実地研修）を行った。関西では部落問題は大きな社会問題であり、研究所の先生から有意義なお話を聞くことができた。ただ一つ惜しむらくは、広報活動の期間が少なく、外部からの参加者が少なかったことである。フィールドトリップには、今回のＪＡＳＣ（日米学生会議）に参加できなかった学生にもＪＡＳＣを良く知ってもらおうという意義があるだけに、これは今後の重要課題と

なるであろう。

定例会での反省点はいくつかあるが、一番大きいのはディスカッションのとき英語を使わなかったことであろう。また、やはり関東と関西では入ってくる情報量の格差が大きかった。さらに関西では少人数ゆえにフォーラムなどに関連した勉強会を開くことができなかった。これらのような格差をなくすのは、これからのＪＡＳＣの課題である。

（大前　拓也）

＜直前合宿＞

７月21日、日曜日。真夏のような強い日射しの中、日本側40人のＪＡＳＣer（参加者）は重いスーツケースを抱えて代々木オリンピックセンターにやってきた。５月の全体合宿から早２ケ月。知り合ってそれ程期間は経っていないのに、お互いに昔からの友達であるかのようにすっかり打ち解け合い、楽しそうにおしゃべりしている。同じＪＡＳＣerだというだけで既に輪ができ始めているようだ。

試験の為に合宿を途中一時的に抜けてしまう人もあったが、プログラムは順調に進んでいった。すべてが本会議に向けて欠かすことのできない最終打ち合わせで、皆１つ１つのインフォメーションに耳を研ぎ澄まし、迫りくる本会議へのちょっぴり不安の混じった期待に胸ふくらませていた。

フォーラム、コロキアムの打ち合わせに始まり、ジョイントオリエンテーション（日米合同親睦会）、分科会のことが１つ１つ決まっていく。特に「プログラミング２」で本会議のプログラムを１日１日追っていった時は楽しかった。新潟での神楽舞・盆踊り、北海道でのホームスティ、清水町での全体研修等々。盛り沢山のプログラムに胸が躍る思いがする。それと同時に１つ１つのイベントを企画し、準備していく上での大変さを思い、また各々の地域の人々が我々ＪＡＳＣerのために様々

な企画をたて、支援して下さっていることを知り、だだ感激するばかりだった。

プログラムの合間合間には、合唱の練習をしたり、バレーボールで汗を流したり、昼寝をしたりと、気分転換をはかる機会を持つこともできた。

そして最終日の23日、オリンピックセンターを発ち、いざアジア会館へ。各自荷物を部屋に置くとすぐ日米会話学院へ向かい、次の日のレセプションの会場作りを終えた。あとは米国側を待つのみだ。　（作　佳代子）

＜講演会２月＞

２月９日。その日は朝から最終準備に大忙しだった。ある実行委員が講師に作家の石川好氏と東京女子大学教授の猿谷要氏に決まった時、「うそだ、これは夢だ。」と思った程、一同念願のお二人を招いた東京での講演会の日である。テーマは～日米関係入門講座～で、日米関係とは、一体どんな関係なのか？メディアには情報が錯綜しているが、その基礎を私

達は本当に知っているのか？そんな思いから決められた。

集まった人は約80名。まず、はじめに石川好氏からの御講演を聞く。石川氏は人と人との関係の三大要素をあげられたが、それは①金、②セックス、③言葉　であり、日米関係はとりわけ①と③の要素によって、成立っているとされた。現在の両国間の摩擦は金の流れの不均衡、言葉の誤解、によるもので、日本人はたとえ罵倒されても自分たちが思うところを勇気を持って主張せねばならない、とのことであった。氏の明快かつ大胆な分析は非常に新鮮で、ご自身の体験に基づいた日米関係論は聞く者を圧倒した。

続いて、猿谷先生の御講演。「アメリカ黒人解放史」など、アメリカの民族問題に関する本を数多く書かれている先生だが、今回は日米関係入門というテーマをご考慮下さり、日本の開国以来の日米関係の歴史を時代別に分けて説明された。戦争をへて、50年、現在の両国は果たして蜜月の関係にあるのだろう

か。これからの日米関係には新たな歴史が作られる可能性がある、との言葉にその担い手である我々の責任の大きさと歴史の事実を把握する重要性を痛感した次第である。

このように、お二人のそれぞれの視点から日米関係を論じていただき、質疑応答の際には参加者から次々と質問が出るなど、非常に白熱した講演会となった。会場に残って感想を語り合う人を見ながら、今回の講演会は偏った報道に惑わされない事実と熟考に裏打ちされた日米関係観を自分なりに築いて行くための第一歩なのだ、と強く感じた。

（七戸　美弥）

＜講演会６月＞

６月22日（土）の午後、東大法学部教授の五十嵐武士先生をお迎えして、日米会話学院七階の講堂において講演会が行われた。テーマは、日米関係を考える上で今年が開戦からちょうど半世紀の節目にあたるということの重要性を認識して、『日米関係を見る眼～真珠湾から50年を経て』であった。この講演会は、日本側一般参加者が初めて企画・運営に参加したもので、講師交渉から大学・マスコミへの広報、当日の運営等、すべて自らの手で行われた。

当日はあいにくの雨であったが、学生のみでなく社会人や年配の方も集まり、五十嵐先生の講演に聞き入った。先生はまず、日米関係は戦前、戦後とも３つの段階を持つ共通のサイクルがあり、今はその第三段階の“敵対”の時期であることを指摘した。そのような摩擦は日米間の認識の差から生じるもので、今こそ日本の指導者層の資質が問われているという。国際社会で指導力のある国になるには日本人には構想力が欠けている。そのような現状打破には教育制度の問題もあるが、高等教育を受ける者つまり大学生が教養を身につけなければならない。以上のような講演内容は、私達自身反省させられると同時に、これからの学生生活の励みになるものであった。

その後の質疑応答では会場のあちこちから質問が飛び出し、先生もそれに応えて時間延長までして下さり、活気に満ちたものとなった。休憩をはさんでからは、８人程度の小グループにわかれて本会議と同様の形式でディスカッションが行われ、参加者全員が各々の意見を述べた。

こうした講演会を通して、社会に日米学生会議の存在を知ってもらい、本会議で行う私達の活動の疑似体験を他の学生にも味わってもらった。一方で、本会議に向けて、日米関係の中の私達の役割を考えるいい機会であった。

（比企野慶子）

＜講演会（関西）＞

参加者の割合からみても瞭然のように、日米学生会議の東京と地方での知名度の格差は著しい。それを何とか是正すべく、関西での講演会に地方参加者は奮起した。が、事態は難行……その戦績（？）を振り返ろう。

まず全体合宿の折りに決められたのは、国際派志向（？）でない学生や理系学生にもより興味を感じられるよう、脳死や生体肝移植の問題の日米比較を講演会の演題にしようということ。（今回理系学生の多かった地方の面目躍如の一端である。）しかし、今やこれら医学問題に従事する方々は時の人、時間の都合のつけられる講師が見つけられず、急遽演題（テーマ）を変更し、より多くの学生と今回の日米学生会議中での議題を話し合いたいと、ジェンダーや民族問題等のトピックを扱うこととなった。最終的にはフィールドトリップ（実地研修）という形で京都部落問題研究所が決定、それから更に大忙し。何しろ人数が少ないので全員が全員で、文章を作成し、イラストを用意し、ワープロを打ったり、印刷したり、ビラを配り・DM発送と、時間に追われつつも今思えば、なかなか楽しんでやっていた。（と思う。）

当日は研究所で奥山所長に、近代以降の部落問題の歴史と現状について数字やスライドを交えながら講演していただいた。講演後に

は一般参加者と夕食を共にして、互いの意見交換の場をもつことができた。一般参加者が少なかったのが残念であったが、私達自身関西の学生参加者として部落問題をより自覚的にとらえ直す最高の機会だった。

（森村　王英）

Ⅲ．会議後の活動

＜報告会＞

この報告会は、私たちが行った第43回日米学生会議の内容について、本会議に関心を持って下さった方々やＯＢ・ＯＧの方々に対して報告を行うことを目的として開いたものである。場所は四谷にある日米会話学院７階講堂。数多くの人が参加して下さった。

本会議の意義は大変深いものがあり、多大な影響を参加した者に与えているものと自負している。この体験を閉じたものとして温存するのではなく、広く世の中に発表するとともに、できる限り多くの人に本会議を理解してもらい、今後、当会議に応募してもらいたいと考えたのである。

まず実行委員長からあいさつと会議概要の報告があり、それから各フォーラム、シンポジウム、コロキアムの担当者がそれぞれについて報告を行った。その後、会議の雰囲気を知ってもらうために、ビデオを見てもらった。

次に次回第44回日米学生会議日本側実行委員長である遠藤があいさつをし、自身が感じた会議の魅力を述べるとともに、次回会議の内容の説明を行った。

その後数人の会議参加者が感想、これからの抱負等を述べ、お菓子を食べながらの交流会に移った。そして、なごやかな雰囲気の中でこの報告会は終った。

この報告会だけで「日米学生会議」の全てを語り尽くせたとは思はないが、次の会議に応募して下さるきっかけとなれば幸いである。いずれにしても、同世代の若い学生が寝食を共にし、語り合うという日米学生会議の魅力と意義は、永遠に不滅であると固く信ずる。

（岸本　肇）

第43回日米学生会議：主催、後援、賛助団体

主　　催　財団法人　国際教育振興会

後　　援　外務省

文部省

国際教育交換協議会（ＣＩＥＥ）

日米文化センター

賛助団体（地方自治体）　新潟県

黒川村

北海道

札幌市

清水町

賛助団体・賛助者

株式会社アイビーインターナショナル
旭硝子株式会社
アサヒビール株式会社
アーサーヤング公認会計士共同事務所
味の素株式会社
石田昌隆
財団法人石橋財団
イーストマン・コダック・ジャパン株式会社
株式会社伊勢丹
伊藤忠商事株式会社
株式会社イトーヨーカ堂
岩手ラインズ株式会社
エーザイ株式会社
SGSネットワーク株式会社
エッソ石油株式会社
大阪ガス株式会社
オムロン株式会社
株式会社大林組
鹿島建設株式会社
財団法人鹿島平和研究所
カルテックス・オイル・ジャパン株式会社
川崎俊平
川崎製鐵株式会社
関西電力株式会社
菊水酒造株式会社
キッコーマン株式会社
九州電力株式会社
協栄生命保険株式会社
共同石油株式会社
京都日産自動車株式会社
株式会社協和銀行
キリンビール株式会社
財団法人神戸国際交流協会
株式会社神戸製鋼所
財団法人神戸日米協会
財団法人国際教育財団
財団法人国際交流基金日米センター
財団法人国際コミュニケーション基金
国際証券株式会社
国際電信電話株式会社
株式会社埼玉銀行
株式会社サイマル・インターナショナル
株式会社札幌銀行
三洋証券株式会社
三洋電機株式会社
株式会社三和銀行
七戸幸夫
秀和株式会社
樹心学園
社団法人証券投資信託協会
社団法人信託協会
新日本製鐵株式会社
住友海上火災保険株式会社
株式会社住友銀行
住友金属工業株式会社
住友建設株式会社
住友商事株式会社
住友信託銀行株式会社
住友スリーエム株式会社
住友生命保険相互会社
住友不動産株式会社
株式会社西武百貨店
社団法人生命保険協会
積水ハウス株式会社
セコム株式会社
ゼネラル石油株式会社
ソニー株式会社
株式会社第一勧業銀行
第一工業製薬株式会社

第一生命保険相互会社
大成建設株式会社
株式会社ダイナワード
ダイハツ工業株式会社
株式会社大丸
株式会社太陽神戸三井銀行
株式会社第四銀行
株式会社大和銀行
大和證券株式会社
武田薬品工業株式会社
株式会社竹中工務店
中外製薬株式会社
中部電力株式会社
TDK株式会社
デュポン・ジャパン・リミテッド
株式会社電通
東京海上火災保険株式会社
東京急行電鉄株式会社
株式会社東京銀行
東京電力株式会社
株式会社東芝
東洋信託銀行株式会社
凸版印刷株式会社
トヨタ自動車株式会社
財団法人新潟経済社会リサーチセンター
株式会社新潟中央銀行
ニッカウヰスキー株式会社
日興證券株式会社
日産自動車株式会社
日商岩井株式会社
財団法人日商岩井国際交流財団
日清食品株式会社
日本アイビーエム株式会社
社団法人日本医師会
株式会社日本エアシステム
勧角証券株式会社
株式会社日本興業銀行
日本航空株式会社
日本コカコーラ株式会社
社団法人日本歯科医師会
社団法人日本自動車工業会
社団法人日本證券業協会
日本信託銀行株式会社
日本信販株式会社
日本生命保険相互会社
日本電気株式会社
日本郵船株式会社
財団法人庭野平和財団
株式会社ネットワーク21
野村證券株式会社
株式会社長谷工コーポレーション
株式会社阪急百貨店
株式会社日立製作所
ファイザー製薬株式会社
富士火災海上保険株式会社
株式会社富士銀行
藤沢薬品工業株式会社
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
株式会社フラワーホーム
株式会社ブリジストン
財団法人放送文化基金
株式会社北越銀行
株式会社ほくさん
北農中央会
株式会社北洋銀行
株式会社北海道銀行
株式会社北海道拓殖銀行
北海道中央バス株式会社
北海道電力株式会社
北海道旅客鉄道株式会社
本田技研工業株式会社
松下電器産業株式会社
マツダ株式会社
株式会社松屋
丸紅株式会社
三井海上火災保険株式会社
三井信託銀行株式会社
三井物産株式会社
三井不動産株式会社
株式会社三菱銀行
財団法人三菱銀行国際財団
三菱地所株式会社
三菱自動車工業株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
三菱信託銀行株式会社
宮澤喜一
明治生命保険相互会社
メルシャン株式会社
安田火災海上保険株式会社
安田信託銀行株式会社
安田生命保険相互会社
山一證券株式会社
山崎製パン株式会社
山種證券株式会社
雪印乳業株式会社
財団法人吉田国際教育基金
株式会社ライソズコーポレーション
株式会社ライソズ柏崎
Rebecca C.Dinwoodie
株式会社ロイヤルホテル

（五十音順、敬称略）

第44回日米学生会議のお知らせ

第44回日米学生会議は、きたる1992年７月26日から８月22日までのほぼ１カ月間にわたり、アメリカ合衆国にて行われる予定です。大統領選挙にあたる本年は、ますます注目の的になるであろう街ワシントンD．C．、日本企業の進出も著しいナシュヴィル、壮大な自然を残すコロラド・スプリングスをまわりながら地球に住む人間としての責任とは何なのだろうかということを考えていきたいと思います。日本と米国の双方を知るのはもちろんのこと、ボーダーレスが言われている昨今において私達のできるグローバルな社会への貢献とは何なのかを探っていきたい、そうした思いを込めて第44回の総合テーマは“Exploring our responsibilities to the global community”と設定されました。

会議はこのテーマの下、日米の学生80名が寝食をともにしていきながら、率直な意見交換を10の分科会や２つのセミナー、フォーラムといったさまざまなプログラムを通して行いながら相互理解に努めていきます。会議においては生活習慣や価値観の違い、抱いていた日米それぞれのイメージと実際の違いなど様々な意見があるはずです。ときには苦しみ、悩むこともあるでしょう。しかし、色々な個性がぶつかりあいながら会議は作られていき、そしてその中で異なった考え方を受け入れ学んでいく姿勢を身に付けていくのです。この一カ月の経験は、新しい自分との出会いであり、相互理解の上でも密度の濃い、貴重なものになることでしょう。

会議内容としては以下のものを予定しています。

分　科　会	テクノロジーと新しい世代、現代政治問題、社会の変容、芸術
	メディアとその影響力、教育、医学と社会、企業と地域社会、宗教と哲学
	第三世界問題
フォーラム	民族問題、環境問題
セミナー	Volunteer Work, War and Peace
シンポジウム	貿易問題

それぞれの開催地で民族問題と環境問題については可能な限り討論をし、また日米学生会議による社会への奉仕、貢献を考えていきたいと思っております。討議したことを実行するための実地研修も企画しております。この他にもテーマ・ディスカッションやホームスティなど、盛り沢山のプログラムを予定しております。

日米関係に興味のある方、そして現代の諸問題に関心のある方、会議をともに作っていく熱意に溢れる方、皆様のご参加を心からお待ちしております。

第44回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長
遠　藤　　繁

編集後記

今年の会議が終わって、もう半年以上経ちました。会議後、参加者は、それぞれの目的に向かって一生懸命がんばっています。毎年言われていることですが、会議の得たものをいかに花咲かせるかが、参加者の課題と言えるのでしょう。この充実したプログラムの実施に当たり御支援頂いた方々に、その出発点となった会議の報告をここに致す次第です。

報告書発行が遅れてしまい、皆様には大変御迷惑をおかけ致しました。編集者を代表して深くお詫び致します。最後に第43回日米学生会議を御支援頂いた皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

（江藤　一）

第43回 日米学生会議
和文報告書

発行日　1992年4月1日

編集者　天野　環　小林　隆司
江藤　一　七戸　美弥
大島　葉子　鈴木　美紀
大塚　雄三　西山　裕子
奥井　暁子　深町　あおい
上窪　一世　松本　正道
岸本　肇　山下　真

発行　〒160 東京都新宿区四谷1－21
財団法人　国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印刷　（株）実業公報社